
デュエリスト アシュマ 第十一話 キュポアの春（前編）

高岡 佳司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デュエリスト アシユマ 第十一話 キュポアの春（前編）

【Nコード】

N4540K

【作者名】

高岡 佳司

【あらすじ】

アーチェルがスコラに復帰した。

復帰早々、学園祭の出し物に借り出される。

その名もずばり『ロイヤル喫茶』

キュポアも学園祭に力を入れる。

そんな中オロは世界を手に入れんが為暗躍を始める。

SF剣戟冒険アドベンチャー、新シリーズオロ編三部作の一、

デュエリスト アシユマ『第十一話 キュポアの春（前編）』ただ今参上！

主な登場人物

アシユマ・アトー・ヒョウエ・シバ・ショ阿克・アシユオン。

先のノリトレアでのバヴェル紛争（七賢人紛争）での英雄である。
無類の武器、『鬼虎』と言う刀を持つ。

年の頃は二十四〜五。

年齢が定まらないのは生年月日があやふやな為である。

謂れの無い事には敢然と立ち向かい、怒ると何でも真つ二つにする怖い男でもあったが

アーチエルにとっては優しい夫だった。

多少寡黙なところがある。

アーチエル・アトー・ヒョウエ・シバ・ショ阿克・アシユオン。

元、レキシタニア王国の第一王女。

破壊の権化、バヴェルのまさに鍵であり前回の七賢人紛争の中心にいた少女である。

今は、愛するアシユマの妻。

と、同時にアシユマが暴走しない為のストッパーでもある。

どこまでも真つ直ぐな、豊かで美しい栗色の髪の毛を持ち、長く密度の高いまつ毛と黒目がちの大きな瞳を持ち合わせた美しい眼は遥か彼方を見つめ、潤って張りのある形の良い薄紅色の唇はきゅつと真一文字に引き締められて、人形のように形容されるほどの美形の少女。

凜として可憐で儚げでなとよく形容される。

オルバニアン・マグマイヤー

ノリトレア王家王位継承者第二位であるルーラン・ノリトレアがその正体であり、アルステインの義理の弟に当たる。

王位継承者なのだが今は王位継承権をかなぐり捨てて武者修行を兼ねた賞金稼ぎとなっている。

刀と銃両方にいいセンスを発揮し、また、魔導機兵に乗らせれば右に出るものがないほどの操縦技術を見せる。

好むと好まざるとに関わらず、喜怒哀楽のはっきりした性格である。

アルミナ・ラ・シア

言いたい事は、はっきり言う性格。

口の悪いのがタマに傷。

戦利眼なる特殊な能力を持つ大剣使いの少女である。

顔かたちは目鼻立ちがはっきりとしていて、きりつとした美少女である。

眼帯を取って両目が開けば赤い眼と黄金に光る眼が見れるはずである。

オルバニアンとは恋仲、リィナとは喧嘩友達でもある。

アルステイン・ノリトレア。

年の頃は二十七。

ノリトレア王国の国王

頭は切れるが変わり者の王である。

また、国民に善政を敷き人気は高い。

七賢人紛争の英雄の一人。
その正体はダスト・モンキーことヨディ・ヨフルである。

エフアール・ノリトレア。

ノリトレアの王妃である。

未だにアルステインをヨディと呼ぶ。

先の七賢人紛争での英雄の内の一人である。

今では二人の間に子を生している。

息子のアシュオンだ。

これは、アシュマの名からとったもの。

キュポア・アップルトン

レキシタニア王国の第二王女。

アーチェルの実妹である。

常にお転婆だが、時に弱い部分も見せる。

物事をずばずば言うが、心根は優しい少女である。

最近はそういうことは減ったが多少我侭な所もある。

なお、父親似なのか、直ぐ上の姉、アーチェルには似ているところはない。

が、こちらも整った顔つきで美形である。

リイナと歳が近い事もあり、彼女とは非常に仲が良い。

ハルマ・イコナ

魔法に造詣が深く、剣の腕も達者である。

非常に温厚であり、日向を思わせる微笑が印象的な美青年である。キュポアに急接近する。

謎な部分が多々あり、アシュマには危険視をされる。

リイナ・アナ

体に似合わず大振りで鉈の様なククリを使う。

青黒い艶やかな髪を持つ。

正体はアシュマと同じイレギュラーナンバーで戦闘のセンスに関してはもしかしてアシュマの次に実力があるかもしれない少女である。

それ以外、はつとする様な美少女である。

この少女、二重人格であり、優しい可憐な少女の時もあれば、寡黙でそのくせ口を開けば口が悪く性悪に見えることもあるが性根はとても優しい。

アルミナとは喧嘩友達でもある。

アールヌー国のレンヌ王子とは中々良い仲であるが、そのことからかわれると泣く。

レンヌ・アデュニ

スラリと背が伸び、褐色の肌と相まってエキゾチックな美少年。

アールヌー国の第二王子であるが実質的な後継者。

これは兄のディーヌ・アデュニ第一王子が王位継承権を放棄したためである。

時に喧嘩もするがリイナとはとても良い恋仲にある。

召喚術を得意としている。

ミカ・タキオ

スコラの優等生。

アシュマと同じイーハンのタマン島出身。

アーチエルとは親友関係にある。

ジークフリート・シュヴァイツァーと言う将来を誓い合った恋人がいる。

非常に他人想いのところがある。

ジークフリート・シュヴァイツァー

アルミナと同じく身の丈ほどもある大きな剣を遣う。

剣の腕も確かである。

ただ、アルミナ曰くアシュマに輪をかけた寡黙さと無愛想さで周りからは誤解されがちであるが、ミカには優しい彼氏であるらしい。

サクラコ・セタ

イーハンの家老の娘。

根っからの女王様気質。

性格は悪くない。

エースティ・アップルトン

レキシタニア王国の現在の王。

アリア・アップルトン

エースティーの妻。

王妃。

出自はオロ・エバスの妹。

エドス・アップルトン

レキシタニアの前王。

人生はまだまだ現役。

アン・デボン

元々はアップルトン家のメイドとして働くが、数奇な運命からかアーチェルと共に戦場にも付いて回る不遇な人。

ただし本人はアーチェルのお側にいられるだけで幸せらしい。

アーチェルの姉的存在でもある。

アリシアナ・コクレト。

黒龍号のメカニック担当。

程よく鍛えられ、引き締まった肉体を持っている。

鼻筋の通った中々の美人でもある

良くも悪くも軍人氣質。

ダン・コクレト少尉。

男性かなり、ガタイが良い。

それに比例して顔の方はあまりよろしくない。

この男性このようななりをしてコクレト軍曹の旦那である。

夫婦して黒龍号に『勤務』しているのである。

旦那の方から猛アタックがあったかと思いきや、それは奥さんのほうからと言うことらしい。

事実、アリシアナは、男性とはこうだと思っている節があるらしく、アシュマなどは線が細くて駄目らしい。

アリサ・コクレト。

アリシアナとダンの間に生まれた女兒。

三歳。

母親アリシアナ似のくりつとした愛らしい瞳を持つ幼子。

リン・シャオリン

オロ・エバス、クーロン支店の総責任者。

先のクーロン革命の立役者。

キララ・ムラサキ

元、ガルマイン配下、暗殺集団『影の者』の内の一人。

アシュマに捕まって以来、アシュマの仲間となり、アベニの元で訓練が続けていた。

少女は髪の毛は短かく亜麻色の髪の毛を持ち、中々愛くるしい、くるりとした瞳と愛らしい唇を美少女。

ガンロク

アシュマを『師匠』と呼ぶ。

名字なのか名なのかは分からない。
ただのガンロクである。

身長は二メートル二十ほど。

剣の腕はアシュマも一目を置くほど。
意外と手先が器用である。

サリアナ・タウル

自称イーハンの貧乏御家人の主従の主。

男……らしい。

エスタ・ワナックス

とある、貧乏御家人の従者の方。

身なりは悪くない。

男……らしい。

オロ・エバス

汎用型電腦装置などの基本OSを作って財を成し、今では、鉄鋼

や貴金属、造船や飛行機、果ては魔導機兵の様な兵器なども取り扱っている豪商。

今や世界の五パーセントは彼の財力とまで言われ、世界をその指で動かせるのではないかと噂されるほどの人物。

ティシュラ・アマンガム

オロの貞淑な『愛人』

ウグラ・ハン

三年前のイルドリアの武道大会の優勝者。

オロの軍師。

オロに意見を言える数少ないうちの一人。

ザザ

牛頭牛足の魔人。

マスケドのリーダー。

戦槌『牛槌鬼』を使う。

割と人情に脆い点がある。

ロシ

銀白色の長い髪を持ち、蒼白く氷のように冷たい色の視線を放ち、酷薄で残忍そうな笑みを浮かべる、無情の男。

絶世の美青年。

マスクドのサブリーダー。

刀『天馬鬼』を使う。

ミヤ

羊頭の魔人。

マスクド。

槍『羊槍鬼』を使う。

グチ

猿頭の魔人

マスクド。

『猿双鬼』を使う。

ザキとは犬猿の仲。

ザキ

犬頭の魔人

マスクド。

『犬牙鬼』を使う。

グチとは犬猿の中。

ラキ

女のマスクド。

『猪球鬼』と言う大鉄球付きの鎖鎌を使う。
かなり身体は大きい方。

妹にマスクドのハヤがいる

ハヤ

女のマスクド。

中々美形。

細身の剣『鬼細鳥』を持つ
姉にマスクドのラキがいる。

序節

アルステイーンが即位してその秋、ノリトレアとレキシタニアの同盟国調印式が執り行われた。

アルステイーン、ノリトレア国王とエースティー、レキシタニア国王は、調印文書を片手にガッチリと握手を交わし国内外に両国の蜜月振りをアピールした。

経済・文化交流、軍事同盟に関してはレキシタニアはノリトレアにおんぶにだっこだった。

つい先日、ノリトレアのバヴェル事変があるとはいえ依然レキシタニアに攻め込もうなどと言ういかれた国は存在しない（と、信じていた）し、その点で言えばノリトレアとレキシタニアの軍事的な同盟は『おまけ』として見られ、同盟国と言うよりは友好国に近い内容となった。

ともかくも両国王は「目出度い」と言った。

第一節 スコラ復学

アーチェルが復学していた。

アシュマとの生活の基盤を作って数ヶ月程の新婚生活を楽しんだ後スコラに戻ってきていた。

そのスコラに復学する少し前……

アシュマとの生活は実に優しく楽しいものだった。

その二人に国民も優しく接し、祝福もしてくれたので、実に生活しやすいものだった。

生業はアシュマが民に剣術・武術を教えるもので月謝としていくばくかの金品を貰っていた。

日々取れた農作物などの現物納品も可とした。

アシュマの道場は盛況で国中（と、言っても一市ほどの大きさだから、それほど大きい国ではないが）から、アシュマの道場目指してやって来た。

なので、日々食べていく分には、困らなかった。

夜はアシュマがアーチェルに優しくしてくれた。

アシュマは寡黙だったが眼で語ってくれた。

アーチェルにはそれで十分だった。

そんな幸せの日々の中、アーチェルは悩んでいた。

スコラへの復学である。

この優しい幸せな日々も捨て難がったが、元の楽しい日々もまた忘れられないものだったからである。

そのことで悩んでいると見たアシュマは、アーチェルの背中をそつと優しく押してくれた。

「若いうちは学べる時には沢山学んだ方が良い」と。

これを聞いたアーチェルは感激して、
「アシュマさま有難う！ 大好き！」

そう言つて抱きついた。

「尤も、アーチェルが行くなら俺も行くのだがな。……月の三分の一ほどは」

「え？」

アシュマはアーチェルにウィンクをして見せた。

「まことに我侘な妹で相すみませぬ。アシュマ殿」

エースティー王は嘆息した。

「いえ」

アシュマは短く答えた。

が、その瞳は笑っていた。

「その代わり私も月の内三分の一スコラに出向することをお許し下さい。スコラとも向こう三年そのような契約になっていますれば……」

「……」

「いや、それはもうこちら承知の上でのことですから」

「済みませぬ。義兄上」

「……流石にそなたに義兄あにと呼ばれるのはこそばゆいな」

「未だにですか？」

「うむ。未だにであるな」

「義兄上はもう少し御気を大きく持たれるが宜しかろう」

「そうです。この人ったら少し気が弱い所があつて……」

アリアがそう言った。

すでにレキシタニアの家に入って数ヶ月がたつが、最早夫のエースティーを尻に敷に敷いている感がある。

かといって、夫を軽んじたり、殺す事はないようだ。

確かに気の強さで言えばアリアの方が強いのかもしくなかつた。

公務には常に側にいて補佐をする。

それでいて夫を立てる。

非常に頭の良い女性であつた。

アシユマは身内であるのだから、大丈夫なはずなのだが、一応夫を守るつもりで出張って来たが、それも杞憂に終わるようだ。

「それはそうと、義親父殿おやじはどうされました？」

「外で『遊びまわって』いますよ。はは。困ったものです」

「それは『ご兄弟』ができることややこしいからですか？」

「『まだ』、そこまでは至っていませんがね。困った事に……」

「困った事に？」

「父上の悪ふざけが意外と好評なのです」

「そうですか。人徳なのでしょうなあ」

「アシユマ様！」

声を荒げたのはアリアだ。

だがそれは意に介さず、

「義親父殿だ」

アシユマが窓の外を見て言った。

「へ？ どちらに？」

エースティーが素っ頓狂な声を上げる。

「我が家の勝手口の……あつ、アーチエルがいるな……後ろからそーっと近付いて……あ、尻を触った」

「ああん、ア〜っシユマつま〜♪ こんな、昼間からっ♪ ……
て、お父様！！ 何してるの！！」

驚いたのはアーチエルだ。

まさか実の父親に尻を触られるとは思わなかったろう。

「昼間っから人に尻を触られて喜んでおるとは、なんともはや……」

「そっ、それはアシユマさまが触ってくれたんだと思って……」

「おぬしたちは昼日中ひるひなかからそんな事ばかりしておるのか？」

「してません！！」

前王エドスはこの所、老けたとアーチエルは思っていた。

ただし人の良い、好々爺足る風貌になりつつあるのは、良い事だ

と思っていた。

エドス前王は勝手口から上がろうとしていた。

「あ、お父様ここは勝手口よ。道場だったらそっちの方の入り口を……」

アーチエルが言いかけた。

「大体、今日の練習終わったんでしょ？」

と、あるようにエドスは、アシュマに弟子入りして、毎日ここへ通うのが楽しみの一つとなっていた。

だから道場の方へ向かうものだとはかり思っていた。

が、今日は母屋の方に行った。

アンが慌てて出てきて、

「今日は如何なさいました!？」

そう言った。

アーチエルはその時危ないと思ったが、時すでに遅く

「きゃああっ!」

アンは尻に触られ悲鳴を上げていた。

「見ろ、アーチエル。普通の婦女子と言うものは尻に触られるとだなあ……」

「お父様!!」

「エドス様!!」

「はい……」

「お父様一体何しに来たのですか？」

「おお、そうじゃったわいアンよ近うよれ」

アンをかまどの近くに呼び、なにやらヒソヒソと話をしている。人を差し置いて感じが悪いとアーチエルは思った。

「それでキスとかしたら殴りますからね!」

アンがエドスを牽制してそう言う。

「なんてことを。ワシは前王じゃぞ」

「前王でも、何でも、したら殴りますからね」

どーでもいいが（どうでも良いのか）父は自分の居場所が無くな

りそれが寂しくて……と、アーチエルは思ったが……。

「だから。お尻触らないで下さい!」

アンはグーでエドスを殴っている。

どうやらそれは無いようだ……。

「で、何で御座います? エドス様」

「その、なんだな? この家の内情と言うかだな、やりくりと言うかだな、ちゃんと食えていつてるのかなと……」

「エドス様、偉い!! ちゃんと娘の事を気遣っている!!」

「ば、馬鹿者! こう言う事は内密にだなあ」

「そういうことなら、このアンにお任せあれ!」

「全然お任せあれでは、ないではないか。全く」

「家計のやりくりから、家事に至るまで、このアンめに何でもござれ!!」

「人の話は聞いてないし……」

「私がいるからには、もう安心で御座りまするぞ!」

「そうか。そういえば、この家の家計は全てこやつに握られているんじゃない。まあ、逆に安心といえば安心……」

(お父様……私のこと心配してくれていたんだ)

アーチエルはそのやり取りに、心温まる何かを感じ取っていた。

「それにしても、そなた、香の物を漬けておったか?」

「あらやだ。分かりますか?」

「分かるとも」

「いえね、アーチエル様のお友達に教えてもらった、香の物があるんです。それで丁度良い具合に漬け上がったのがあるんですよ。よかったら、それでお茶にしませんか?」

「ほほう……」

「良いわね。私もいいかしら?」

「もちろんですわよ。アーチエル様」

「もしかして、わたくしの友達ってミカさん?」

「ええ」

「さあ、持ってきましたわよ」

「アン、作業着のまま食べるの？」

「この後も作業が残ってますゆえ」

その時勝手口から、

「今、帰ったぞ」

アシュマの声がした。

「はあ、いい」

アーチェルが席を立った……

「わ、わたしも……」

アンも席を立った。

「あら、アンもアシュマ様をお出迎え？」

「いえ、わたくしは服を着替えてよかったと」

「ふふ。おんなごろ」

珍しくアーチェルがアンをからかった。

「まあ！ 年上をからかって。あとで、覚えてなさいませ！？」 た

んと辛いものを食べさせます故、お覚悟召され」

アンは服を着替えに行きアーチェルはアシュマを出迎えた。

アシュマが佩刀をアーチェルに渡す。

「父が来ております」

「分かっている。見えていた」

「見えていたって……じゃあ……」

「ああ。あの変な尻踊りも見させてもらった……いらっしやい、義

親父殿」

「お邪魔しているよ、婿殿」

「尻踊りって……いやっ！ お嫁にいけない」

「アーチェル。お前はもう俺の嫁女だ。戯けた事を申すな。サケを
もってこい。今日はこの香の物で、義親父殿と晩酌をする」

「でしたら香の物が少し少ないですわね」

そこへアンが結局着替えもせずに大皿に、香の物、サケのつまみなどを盛ってやってきた。

「全く、家の旦那様は我侭なんですから……着替えてまいります」
アンはそう言うと言間からいったん出て行った。

「これでは、どちらが奥殿か分からんかう」

エドスがアーチェルを揶揄した。

「もう！ お父様！」

娘は拳を振り上げる真似をして怒った振りをした。

そうこう言っている間にアンがサケを二升とぐい飲みを四つ持ってきた。

「いけない娘だ。アーチェルは。アンに全て任せて」

「えへ？」

「いえ、いいんです。旦那様。これが仕事に御座りますれば」

「すまん」

アシユマが軽く頭を下げる。

「あ、頭をお上げ下さい。旦那様。だ、旦那様に頭を下げられる謂れは……本当に仕事であって……」

アンは、アシユマの事となると、面白いほどにうろたえる。

アーチェルは、アンのそういうところを、何故か好ましく思っていた。

「あつ、あつ、あつ、ぐい飲みが四つあるって事は、私も吞んで良いのかな？ ねえ？ お父様」

「そのような事は、もう夫婦なのだから婿殿に聞くが良からう」

エドスは優しく言った。

「だんなさま？ 吞んでも宜しゅう御座いますか？」

アーチェルがアシユマに尋ねていた。

「吞んでも良いが、このぐい飲みじゃ大きいな。アンすまないがお猪口を一つ……」

「かしこまりました」

杯が四つ揃った。

サケが杯に満たされた。

「義親父殿、乾杯の音頭をとって構ませぬか？」

「うむ。よいも何も、そなたの家ではないか」

「では失礼仕る。……えゝ……我妻アーチエルが一週間後学び舎に戻り申す。その為のごくごく内輪のささやかな宴と言うことで、今日はひとつ宜しくお願い申す。……乾杯！」

咄嗟にであろう。

こう言う宴を考え付いたのは。

だが、アーチエルはアシュマのこう言う、優しい所を嬉しくも思い、愛してもいた。

その晩、宴は、アーチエルが軽く酔いつぶれた所で、お開きとなった。

アシュマはアンに片付けは明日で良いと告げた後、アーチエルを湯に入れてやり自分も湯に入りアーチエルが眠る布団へもぐりこんだ。

アシュマが優しく抱いて暖めてやると、

「うゝん……今日は有難う存じます……」

寝惚けながらお礼を言っている。

アシュマはそんなアーチエルが愛しくて耳元で囁いた。

「アーチエル、愛してるよ」と。

「アーチエルは果報者です」

そう言って、アーチエルは眠りに入った。

喜びの内に。

今晚は、このまま抱いて寝かして置こうとアシュマは思った。

一週間後。

黒龍号に人だかりが出来ていた。

アシュマとアーチエルの見送りの為だ。

殆どがアーチェルのための見送りと言って良い。

多くが青年団の見送りのようだ。

「今日はよろしく頼む、軍曹」

アシュマがそう言った相手は誰だろう、この黒龍のメカニック担当コクレト軍曹である。

「はっ!! 命に代えましても!!」

「氣を楽に軍曹」

「はっ!!」

「そして、少尉か。よろしく頼むよ」

「はっ!!」

そう応えたのはアリシアナの夫、ダン・コクレト少尉である。

「どうもこの一家は硬いのが多そうだ。俺も人の事を言えた義理ではないが」

「今日はよろちな! えくと、えくとアチュマのお兄ちゃん!」

「!」

「! こ、これ!! アリサ!!」

「まあ、軍曹、良いじゃないか。宜しくな。アリサ」

アシュマは、アリシアナの娘のアリサをひよいと担ぎ上げると、いつもの自分の席に座った。

アリサはその隣だ。

ここでアーチェルが艇内に入ってきた。

「お待たせ、アシュマさま。待ったでしょ?」

「ん? んん」

「アシュマさま?」

「きゃっ、きゃっ!」

「? ……まあ。わたくしがいない間に、もう、こんな若い女性をたぶらかしたの? アシュマさま?」

「たぶらかしたって……人聞き悪いなあ。お兄ちゃんと遊んでんだよなあ? アリサ」

「くすくすくす……」

そう言って笑ったのは、アリシアナだ。

「オクガタって、アチュマさまはアリサのお婿さまなの！ そっちこそ私のアチュマさまをタブラカサナイで！」

アリシアナの笑いで、自分の事を馬鹿にされたのかと思ったアリサは、怒りの矛先を、アーチェルに向けてきた。

もう、アシュマを自分のモノ扱いだ。

「はいはい。申し訳ありません。え〜……」

アーチェルは相手をいなし、まともに取り合おうとしなかった。

「鬼ぐんそうなんだぞう！ 怖いんだぞう！」

「はい、軍曹。わかりました。では、アリシアナさん行きます」

アーチェルが半球板に手を付いた。

「宜しく願います！ アーチェル様！」

「『様』はいらないわ。アリシアナさん」

「はい！」

黒龍号が浮き出した。

眼を白黒させているのはアリサだ。

ただし黒龍号が浮いていることにはない。

母親が、この女性に、服従のそぶりを見せたことに関してだ。

「あの、おねーちゃんは……えらい人ですか？」

「これ、アリサちゃん。その人はお母さんより偉い人ですよ」

「えええ〜？ ママよりえらいの？」

「偉いのよ」

「偉くないのよ。ぜんぜん」

アーチェルは優しく言った。

「じゃ、じゃあ、わたちのお婿さん、かえちます……」

アリサはしゅんとなってそう言った。

黒龍号は巡航に入った。

アーチェルはエナジアのバーを下げアシュマの方へやって来た。

アシュマもアリサも寝ている。

アーチェルは、スコラの制服を、久しぶりに着ていた。

アシュマに出発前、格好を見て貰えなかったので少し寂しく思っていたのだが、今のように気持ち良さそうに眠られていると、起こすに起こせず、寂しさは募った。

隣ではアリサがアシュマの手を取って矢張り眠っている。

いつの間にこんな小さな子を手なずける術を身に付けたものか……。

「本当、わたくしがいない間に、もう、こんな若い女性をたぶらかしたのね？ アシュマさま。可哀相なアリサちゃん」

「……誰が『たぶらかす』だ」

「あら？ アシュマさま、起きてらっしゃったの？」

アーチェルが悪戯っぽく聞き返していた。

「当たり前だ。あんなに気配ありありで、近付いてくる者が……」

「アシュマさまだけで……す。気配を察知して眼を覚ます人なんか」

「んあゝゝゝ、くちゅん！ くちゅん！ くちゅん！」

アリサがくしゃみと共に眼を覚ました。

はなを垂らしている。

「あらあらあら」

アーチェルが鞆からティッシュを取り出した。

「熱は無い様だな」

アシュマが額に手をあてる。

「えらい可愛がりよう。そんなに可愛い？」

「……ああ」

「そんな御子が欲しいのですか？」

「ああ……。だがお前には授けてやれないかも知れない」

「イレギュラーナンバーだからですか？」

「ああ……。すまない」

「そんな……。上手く言えませんがアシュマさまのせいではないと思います。それにわたしは何故か絶望もしていないのです。……は

い、ちーんしましうねえ」

「アーチェル様、申し訳ありません」

アリシアナが申し訳なさそうに言った。

「いいんです。気にしないで下さい」

アーチェルがそう言った。

黒龍号はスコラに着いた。

校庭の片隅にひっそりと下りた。

その周りにはスコラの生徒達が集まっていた。

黒龍号のハッチが開く。

アーチェルが現れタラップを降りる。

ミカが現れ

「アーちゃん!!」

と、叫んだ。

「ミカさん!!」

アーチェルは叫び、親友同士はその場で抱き合った。

「お帰り! アーちゃん、待ってたよ!!」

「ただいま! ミカさん! 約束どおり戻ってきたよ!」

「お帰りアーチェルちゃん」

「サクラコさん!」

「これから忙しくなるわよ」

「え?」

皆の祝福もそこそこに、ミカ達とアーチェルが廊下を歩きながら話をしていた。

「学園祭?」

「ええ、そう。これも立派なカリキュラムの一つで、何かを皆で行うことに意義があるんだって。それが後々の作戦行動だったり、何

かに繋がる事にもなるかも知れないんですって」

「そう、それでこんなに、慌しかったりするのね？」

「で、アーちゃん、早速『脱いで』？」

「ええ、いいわ。みんなの為ですもの。『一肌脱ぐ』わ！ ミカさん」

で……。

「ぬっ！ 脱ぐって、本当に脱ぐ事だったのねッ！（ふえっくくん）」

「ふえっ！ ふえっ！ ふえっ！ ……さあ、お姫様の身体というのはどうなっているんだろうねえ？ アタシがひん剥いてあげるよ……ふえっ！ ふえっ！ ふえっ！」

「ひゃあっ、ミ、ミカさん！？ 正気に戻って！？」

「ふえっ！ ふえっ！ ふえっ！」

「これ、ミカ！ 遊んでいないで、早く姉様の寸法を取らんかい！ それで無くとも時間が無いのに……」

そう言ったその本人は、キュポアだった。

ここはミカの学級。その教室の衣装室。

衣装。

それは今度の出し物の成否を左右する。

学園祭当日、スコラでは教師たちが採点を施していく。

当日スコラで上位を目指しているミカのクラスの出し物は……。

「ロイヤル喫茶？」

「うん、腕上げて？ うん……アーちゃん、キュポアちゃん、サクラコさん。王族じゃないけど私とリィナを含めて女子の接客係になるのね？」

「王族？」

「うん、『王族風』『王侯貴族』が一般の方々とお茶するの。そういうコンセプトなの。駄目かな？」

「うううん！面白いと思うよ！王族側も普段そういうこと出来る機会ないし」

「ああ、良かった。アーちゃんにそう言ってもらえると安心できるよ」

「そう？良かった」

「あ、腕おろして良いよ、アーちゃん……うわー細い細いと思ってたけどアーちゃん、やっぱり細い……スタイル良いわあ」

「やだ……そんな事……、もう。あ、でもミカさんわたしもう王族じゃないよ？それでもいいの？」

「それを言うならわたしも王族じゃないし、アーちゃんなら実際王族だったんだし王族のオーラ持ってるし、何か問題でもある？」

「う……ん……？（いいのかな？）」

「姉様気張ってもらわんと困るぞ？」

キュポアが言った。

「何故？」

アーチェルが柔らかく聞き返す。

「女子側は五人と品揃えは豊富なのがのう、如何せん男子がのう……」

「し、品揃えて……男子がどうかしたの？」

「うむ男子側で『王侯貴族風』に振る舞えるのはレンヌとジークぐらいのものじゃ。人数不足は否めん。これでは『ロイヤル喫茶』も片手落ちじゃ。せめて、後一人おればのう……」

そう言い切ったキュポアは少し大人びた。

姉より濃い目の栗色の髪の毛をボブにカットし今は後ろに束ねていた。

背丈は姉を少し追い抜いただろうか？

肉付きもそれなりのようである。

それはそうである。

もう十五歳なのであるから。

「オルバニアン様はだめなの？」

「いまだ復学しておらぬ。それにあのような人材じゃ。他の学級から引く手数多じゃ。どこぞの学級の睡が付く前にこちらに引き入れねばの」

キュポアはなぐりを振り回しながら言った。

「皆様〜〜！ お父様の伝で『最高級茶葉』の入手に目処が付きますよ！」

どこに行っていたものかサクラコが部屋に戻ってくるなりそう叫んだ。

湧き上がる歓声。

素直に『お父様の伝で』と言ってしまふところが、すでにお姫様足る所以か。

続いてレンヌ王子も教室に入ってきた。

レンヌはあれからスラリと背も伸び始め、顔も少し大人びて褐色の肌と相まってエキゾチックな美少年振りを発揮していた。

「皆さん茶葉の買い付けに成功しました。等級は最上級です。近日中には届くかと思えます」

なにせ、この世界では茶葉は、イーハンかアールヌーかクーロンか、といわれているほどである。

そのうちの二国を抑えているのである。

それも最高級茶葉を。

すでにこの時点でロイヤル級であった。

向うには貴婦人足るべき作法などを書いた小冊子……いわゆるアンチョコを諳んじているリイナがいた。

そのリイナは最近少し背が伸び女の子らしくなった。

青黒い艶やかな髪を持つこの少女は、後ろ髪に赤いリボンで束ね、レンヌを見ると、

ぱっ！

と、華やいだように微笑んで、その元へと歩み寄ろうとした。

レンヌも微笑んでリィナの元へ行こうとするが……。

「レンヌ様、お疲れ様」

「レンヌ様、ご夕食など一緒にいかがですか？」

「行きましょう、行きましょう」

レンヌ狙いの女子たちが、レンヌを取り巻いてしまった。

それを見たリィナの顔から、微笑が消えた。

どうやらリィナは、相当の愠気持ちの様である。

「いや、その、参りましたね」

などとレンヌが照れるモノだから、リィナは無表情になり、くると方向を転じ元いたところに戻ろうとした。

「リィ……」

レンヌはリィナを追おうとしたが、取り巻きが邪魔で身動きが取れなかったのと、リィナがさっさと向うへ去っていつてしまったから、追うに追えなかった。

そのリィナも取り巻きの男子達に囲まれていた。

「ええ、『誘ってくれて』嬉しいわ。行きましょう」

リィナも美少女然として、スコラの話題をキュポアと二分していた。

当然狙う男子は多くリィナの一拳手一投足に振り回されていた。

リィナたちはみんなして食事に行った。

レンヌに小悪魔的な、笑みを残して。

そして、下心ありありで、レンヌを狙う女子も多かった。

レンヌもレンヌで愠気持ちで、そんなリィナをわざと無視するように、取り巻きと一緒に食事に出かけてしまった。

リィナはそんなレンヌにムキになる。

負の連鎖だ。

「つたく、あの二人は……!!」

つと、キュポアは「またか」と言わんばかりに『なぐり』を玄翁袋に押し込んで、

「ミカ、チョツと早めの夕食をとってくる。許せよ」

教室を出て行ってしまった。

「二人を宜しくねえ」

ミカは言った。

「キュポアがどうかしたの？ 我俣言うようだったら、わたしが注意しようか？」

アーチェルがそう言った。

「うううん、お世話になっているのはこっちの方。最近リィナとレンヌ王子の関係が微妙に距離があるような感じがするのよねえ」

「距離？」

「うん、そう、距離。二人の。その二人の間を取り成しているのがキュポアちゃんなの」

「そうなの……。そんな事が……。それにしても二人の関係が、そんな事になってしまっているなんて、少しも知らなかったわ……」

「無理も無いわよ。これだけスコラから離れていれば……」

「うん……ところでミカさん。この学級のリーダーは誰？ 一体わたしは何をすれば良いの？」

「企画・立案・総指揮、全てわたしが取らせていただいております。えへん！」

「まあ、凄いわ！ ミカさん！」

「いやあ、たはは……それ程でも……アーちゃんは衣装係の子を手伝ってあげて」

「はい、分かりました」

「アーチェル王女お帰りなさい」

「アーチェル様お帰りなさい」

「アーチェル王女お帰りなさい」

この頃になってやっとアーチェルは教室の中央、皆の輪の中へ入っていた。

周りから祝福の声が上がる。

「あの、みなさん……わたくし、もう王女ではないので……」
針仕事の班長から仕事の説明を受ける。

その時背中側からそ〜っと忍び寄る影が……。

その影はゆっくりアーチェルの背中に指を這わせた。

「ひゃうあうあああ」

アーチェルは元王族らしからぬ奇妙な声を上げてへたり込んでしまった。

そしてキツと涙目で、後ろを振り向くと、そこにはエミルがいた。
意外にも、エミルは、手先は器用だったので針仕事に配属されたのだ。

「もう、エミルったら一体何を……!!」

憤慨しかけるところへ、

「もう、意味分かるわよね『もう、シタ』のよねえ？ そのところ聞かせてよ」

アーチェルは今度こそ意味が分かったので、顔を赤らめ返答に窮していた。

周りの人間も、それとなく聞き耳を立てていたのが分かったので、
アーチェルは立ち上がり衣装室の方へ小走りに逃げてきた。

そこでちまちまと針仕事を始めた。

「全く、あれぐらいで一々目くら立てておっては、これから先、
人間関係でやって行けんぞ？ 分かっておるのか？ こんな事で三
時間も時間をとらせおって」

キュポアたちが帰ってきたようだ。

「済みません」

「大体レンヌ！ お前はリィナよりも年上なのだからもう少し大人
になれ」

「ふふふ。叱られているのう。いい気味よ」

「リィナ!!! いい気味とは何事か!!! 仮にもレンヌはお前の想

い人であろう！！ 大体お前は素直でない所がある。そこがお前の欠点じゃ！ もっと素直になれ！ リイナ」

「自分に素直になったからこうなったただけだが？」

「なら訊こう。お前はレンヌの事が好きではないのか！？」

「……………」

「それみい。素直じゃないわい。ミカには言っておくから今日は帰って休め……あーレンヌ……」

「なんででしょうか？ キュポアさん」

キュポアはレンヌを部屋の端に呼びつけ喋り始めた。

「良いかレンヌ。帰りは遠回りして星か何かが見えるロマンチックな所を通って帰れ。で最後に一発キスじゃ！」

「き、キスって！！」

「馬鹿モン声がでかい！！」

二人の会話を聞きながらリイナは、

（モロばれ）

そう思いながら、

「レンヌ、行ってしまうぞ」

と、催促していた。

リイナはレンヌの示した帰り道には賛意を示した。

しかし実務型のリイナにとって、早く宿舎に帰って、レンヌを引き入れるなりなんなりした方が、よっぽど効率的だと思った。

だが、レンヌの好きにさせてやった。

ただし、彼が好きに出来る程度までで。

手は繋ぎそうに繋がせない。

顔はキスが出来るほど近付いているのにキスをさせない。

からかっているのだ。

いい加減レンヌもそれに気付いて、

「僕はもう帰る！！」

怒って帰ろうとした時、流石に焦ったのかリィナが後ろから抱きしめて来て、

「お願いわたしを独りにしないで……」

と、来た。

どうやら泣いているようだ。

これをどう捉えればいいのか、レンヌには分からなかった。ただ優しく、

「大丈夫。リィナを離したりはしないよ」

振り向いて言った。

するとリィナがキスをして来た。

この年齢だ。二人はフレンチキスしか知らない。

二人はキスを交わすと手を繋ぎながら校舎の中へと消えて行った。

「全くあそこまで言ってやらんと駄目だとは……」
そう言ってキュポアはなぐりで頭を掻きながら衣装室に入ってきた。

そこでちょこんと針仕事をしていたアーチェルと目が合う。

「……………」

「……………」

「姉様……！」

「きゃあ……！ なに？ キュポア大きな声を出して？」

「姉様はおもての文字が読めんのか？ 『立ち入り禁止』だと」

「え？ そうなの？ なんで？」

「ここの裏手の補強を今晚中にしなきゃならないから！ それが分かったら出た出た！」

「はあい………」

どちらが姉でどちらが妹か判ったものでは無い姉妹ではある。耳を澄ますと隣できゃあきゃあ黄色い歓声が聞こえて来る。

「きゃああー！ アシユマ先生ー！！」

「アシュマ先生、こっち向いてー！」

が、アシュマは無表情のままミス・ケリー・サトウ校長と校長室へと入って行った。

「あー、つまんなーい。アシュマセンサーってオールドミスの校長の事、好きだったりするのかなー？」

「おえーっ、マザコン？」

「アシュマさまはそんな方では無いと思います」

「無いと思いますってあんた……って、ひくくっ！！ 正妻が出たあー！！」

どうやらアーチェルが夫の後を追って校長室近くまで来ていたようである。

『AのDCのBの一四五六、アーチェル・アップルトン……もといアーチェル・アトーさん、至急校長室まで来るように』

「あ、わたしだ」

「アーちゃんどうしたの？ なんかした？」

矢張り近くまで来ていたミカが言う。

「うううん？ チョット行ってくるねくく」

校長室だ。

アシュマが校長に小言を言われている。

「全くあなたと言う人はホントに根無し草と言うか、あっちへふらふら、こっちへふらふら……」

「はあ」

アシュマの返事は気の無いものだった。

その時部屋にノックが響いて、

「A D C Bの一四五六、アーチェル・アトー出頭いたしました」

「入りなさい」

アーチェルが校長室へと招きいれられた。

「アーチェルさん何故ここへ招かれたか分かりますか？」

「いえ、……何か悪い事をしたんでしょうか？」

「まあ、お座りなさい」

「はい」

アーチエルはアシュマの隣のソファに座った。

アシュマはどこかばつが悪そうな、それでいて、拗ねたような子供のような表情をしていた。

この程度の表情で済んでいるなら、そう大事ではあるまいと、アーチエルは高をくくってしまった。

「全く。貴方方は本当に似たものの夫婦なんですから。特にアーチエルさん、貴方はもう少し、しっかりしているかと思いましたか？」

「はい……あの……何のことでしょう？」

「転入手続き！ 事前に連絡を寄越したまではよう御座いました。

こちらでも書類を用意できましたから。でも書類を書きに来ないというのはどういう事です？ お二人ともこのお祭り騒ぎに多少浮かれてやしませんか？」

「いう事一々ご尤も。浮かれていたのもこれまた事実。妻の分まで頭を下げますゆえに、平に……平にご容赦を……」

これを聞いたとき、アーチエルは涙が出るほど嬉しかった。

アーチエルはアシュマを庇おうとしたが、アシュマに眼で制されてしまった。

「……………ふむ」

ミス・ケリー・サトウは一拍置いた後、

「夫としての自覚はできてきたようね。良いでしょう、今回のアシュマ先生のたつての願いによりお二方を許しましょう。と、いつでも罰則は考えていませんでしたけどね」

そう言って、ミス・ケリーはちりんと一回呼び鈴を鳴らした。

ガチャリと奥の扉が開いて、

「終わりましたか？ 校長？ 全くトンだ残業ですよ」

タタラオが言った。

「済まん」

アシユマが詫びる。

「いえ、いいんですよタタラオが、チョツと苦勞すれば良いだけなんですから。それにしてもアーチェル様は、更に御綺麗になられましたね」

フンデーネが如才無く言う。

「あつ、きったねえなあ！ さっきまで自分『もうやってらんねーよ』とか言ってたくせに……それはそうと、ご結婚おめでとう御座います。僕たち行けなかったから……」

「あ、お前それは……」

「お前こそ……！」

「SHUT UP!! 書類を作るのが先!!」

二人はミス・ケリーに叱られた。

二人は書類を作成した。

これで二人は晴れて(?)スコラの教員と生徒に戻った。

ついでながらアシユマはここで学園祭の採点方法を教わった。

「なあにいゝ!? この忙しい時に怪獣と姉様がああ!? 何を考えているのじゃ! あの二人はっ!! こんな時に乳繰り合って!!」

キュポアは舞台の脆弱な部分の補強を、一手に引き受けながら怒鳴っていた。

「今日も就寝の延長を申請せねばなんのか! クソ!!」

ガン! となぐりを床に叩きつけると怒りをあらわにした。

「キュポアちゃん、そんなに怒ってばかりいると美容に悪いわよ」
サクラコが言った。

「ほっとけ。針仕事組は良いよな。自室に仕事を持って帰って夜なべが出来る。だけど舞台づくりはそれが出来んな!」

「企画書を見る限り、今の時期からこんなに根を詰めなくてもいいはずだぞ?」

その台詞の正体は……

「か・か・怪……」

キュポアは懐かしい（と、言っても数ヶ月程度だが）その姿を見て、

「怪獣！」

叫んで抱きついて来た。

それは紛れも無いキュポアの義兄アシュマ・アトーだった。

「わらわはなあ……わらわはなあ……」

その時、側に姉の笑顔を見た。

何かを言っただけ抱きしめようとした時、がばりと身を起こし、

「……なあんてな！ 義兄様！ も・もう何でも無いのじゃ」

「無理をしてないか？ 大丈夫か？ 相談に乗るぞ？」

「か、怪獣……実はな……いや、話せん」

「キュポア……我慢は身体に良くないわ……さあ、話して御覧なさい？」

アーチェルは優しく言った。

「なに、義理を立てているのよ。話すわよ？ やつと信頼できる先生に出会えたんですから」

ミカも言った。

ミカが言うにはこうだ。

大道具係の長にキュポアが選ばれた。

それは良い。

（後で気付いたのだが）キュポアを目当てに、男子数名が大道具係になった事。

モーションを何度かキュポアに掛けたが、相手にされなかった事。それで頭に来たのか、男子数名そのまま引き連れて、学園祭に参加しなくなった事。

キュポアが言うには、ミカの指導力不足を云々されて、減点の対象になると思って、誰にも相談できなかった事。

「それは、不純な動機で、キュポアに近付きフラれた腹いせに職場

放棄する、そいつらが悪いだろう。ミカのせいでもキュポアのせいでもなからう。むしろ学校側はそれで何かトラブルがあったり、倒れられたり、怪我でもされたりしたら、そっちの方が困るだろう」

「うん……」

「先生、何か考えておくから今日はもう休みなさい。こんな時間だし」

「うん……」

「それにしても大人びたな、キュポア。先生ビックリしたぞ」

「ホント？ ……ブー、却下！ 怪獣が自分のこと『先生』なんて言う時点で変すぎ！ わらわは帰る！ ミカ！ サクラコ！ 悪いけど後宜しく！」

そう言って出て行ってしまった。

皆が啞然としていると、ひょいと恥かしそうに顔を再び出して、自分の玄翁入れを引っ掴むと、アシュマに向かって、

「い……だ……！」

そう言って、今度こそ本当に去ってしまった。

「キュポアは成長したのか？ あれで」

アシュマが危ぶむと、

「ええ、もちろんです」

ミカが即答してきた。

アシュマが、

「ほう、その根拠は？」

そう訊いてみた。

クラスの中核人物になっていること、特に人望の面で篤い事、相談事などを良く聞くこと。

「要はキュポアの照れ隠し……か」

アシュマがそう言うのと、

「は、恥ずかしながら」

姉がそういった……。

「でも、わたしなんかよりずっとリーダーらしい事をしている。チ

ヨツと落ち込んじゃうな」

ミカは少し落ち込んで見せた。

「気にするな。お前はお前にしか出来ないことをしている。立派なリーダーだ」

「わあああつ」

女子二人が驚いた。

何の気配も無く、そこにジークが佇んでいたからだ。

「な…なんだよ。そんなに驚く事じゃないだろ」

その声を発した人が逆に少し驚いて見せた。

「恋人にそんな態度を取られたんじゃあ、立つ瀬無いなあ、ジーク」

「は、はあ……」

アシュマにそう言われて、しどろもどろになるジーク。

「もう、ジーク君、一体いつからそこにいたの？　せめてわたしにはそれとなく……」

恥かしそうにミカは言った。

「ちゃんと挨拶したよなあ」

アシュマがそういう。

「あ、ああ……」

そうジークが言う。

（いつよ？）

美女三人が呆れ返っていた。

「ところでジーク、さっきお前さんが言っていたミカにしか出来ない仕事と言うのは？」

「全体を見据えた差配、配置、命令系統の効率化……しかもみんなの不満を良く吸い上げて実務によくフィードバックしていると思う。このフィードバックの上手さがミカの持ち味だと思う」

「ジーク君……やだあ、そんな事」

ミカは顔を手で覆わんばかりに照れた。

「ところでジーク君。君は何の係りをしているんだ？」
アシュマが何気に訊いてみる。

「いや、俺は特に何も……」

「良かった」

アシュマがにやりとする。

「何が良かったんだよ（悪い予感）」

アシュマがミカに耳打ちをする。

ふんふんと頷くミカ。

「なっ、なんだよ！ 人を蚊帳の外においといて（更に悪い予感）」

「ジーク君御免ね。でもこれがベストな判断だと思うの」

「だっ、だからなんだよ！（超絶に悪い予感）」

「みんなの事を考えて出した結果なの、ジーク君」

「だからなんだよおお……（究極に悪い予感）」

「大道具係になって？」

「へ？ ……結果ってそれかよ？ ……なんだよ……ま、いいぜ」

「これで問題、一つ解決なわけだ」

アシュマが言った。

「俺一人が大道具係になるんで済むんなら、話は簡単なんだけどな」

「ところで、アーチェルは黒龍こちゅうに帰ってくるのかい？ それともス

コラに泊まるかい？」

アシュマは訊いた。

「御免なさい……アシュマさま、学園祭が終わるまでスコラに泊まるわ。学園祭の不正採点の噂になるより良いでしょ？」

「うん、そうだな。それに皆と積もる話もあるだろう。泊まっといで」

「有難う、嬉しい、アシュマさま。アシュマさまのそういう所、好き」

アーチェルはそう言ってアシュマの片手を自分の両の手でぎゅっと握り締めた。

「あまり夜更かしはしちゃ駄目だぞ」

アシュマの目はどこまでも優しかった。

アーチェルにはそれが嬉しかった。

「じゃあ、この教室も消灯するぞー！」
アシユマが大きな声を張り上げた。

三人は自室に帰ってきた。

「わぁ。懐かしい！ 一年ぶり？ それ以上ね！？ 服は残っているかしら？」

アーチエルはつづらを取り出して見てみた。

アーチエル自身がいつここに帰ってきてきても大丈夫なように残していったものである。

どうやら心配していた、虫に食べられてはいないようである。

「良かった。制服もブラウスも無事だよお」

アーチエルは、良かったと言わんばかりに頬擦りした。

「後は下着かな？」

そう思っふつと振り返ってみると、皆の眼がらんと興味本位の視線で、アーチエル（のつづらの中）を見ていた。

「きゃ、な、なあに？ みんな？ こ、これで終わりよ？」

アーチエルは慌てて後ろ手でつづらを隠した。

「いや、まだ、下着見てないにゃ」

どこから湧いたかエミルが妙な猫語を使った。

「そうにゃ。今はともかく、当時王族だったアーチエルちゃんのパンツ見て見たいにゃ」

と、サクラコ。

「チョツと止めなさい！ 二人とも！」

ミカが止めに入る。

「いや、ほら、わたくしクマさんパンツとかしか、持っていないし……」

アーチエルが身に危険を覚える。

「勝負下着は無いのかにゃ？」

「勝負下着って何ですか！？ エミルさん！？」

「それ！ 者供ひん剥けえ！」

「にゃあ~~~~！！！」

「いつ、いやあああっ！！！」

「再会した嬉しさは分かるが、そこら辺で止めとけ。でないと本当に泣くぞ？ アーチェルは」

リィナが冷蔵庫に牛乳を取りに行きがてらそういった。

「わたし、別に特別な下着なんか……ひっく……持って……無いのに……えっく」

「え？」

もう、泣いてた。

「そうよねえかわいそうに。お〜よちよち」

ミカがアーチェルをなだめた。

「さて。お二方？」

そして、視線をエミルとサクラコに投げかける。

びくっ！

とエミルとサクラコが身体を硬直させる。

「何で御座いましょう？ おほほほ……」

「はい、謝る！」

ミカが言う。

「え？ いいよう。もう大丈夫だし。貴族の人、頭を下げるのって相当な屈辱なんだって……」

アーチェルはそんな事はよさげだった。

「例えば、アーちゃん是人に悪い事をして御免なさいって謝る時、屈辱感とかって覚えるの？」

「え？ ううん……そんな事は無いけれど……そんな時はホントに悪いって思うし……ちゃんと御免なさいって言うよ？」

「でしょう？ だから、サクラコさんとエミル！ ちゃんと謝る！」

「そうね。ちゃんと謝りますわ。チョツと悪ふざけがしてみたかっただけなの。御免なさいね。アーチェルちゃん」

「ア、アタシも御免ね。ははは……王女様の勝負下着って何なのか

なあって……はあ御免ねえ」

「勝負下着？ 勝負下着って何？ 何と勝負するの？ 誰と勝負するの？」

アーチェルは皆に訊いて回った。

「あー、アーちゃんはどう必要ないから……」

ミカは、皆をなだめた。

「ええ？ 二人だけでのタイン祭とかセント・チョコレットDAYとか誕生日とかカップルでも勝負する事あるじゃない？」

エミルがそこは反論する。

「そうねえ、そういう意味で勝負下着は有りか」

サクラコが呟いてみる。

「コラコラコラ、そこそこそこ！」

「コラそこじゃなくて、ミカさん勝負下着ってなくにい……あうあうあう」

アーチェルはもう、パニック状態だ。

「しょうがない。アーちゃんたつての希望です。教えて進ぜましょ」

「お主ら、それでも何でも良いが、先ずは風呂食って飯に入ったほうが、良いんじゃないか？」

風呂上りのキュポアが格好よく決めたつもりだったが……

「キュポア、お風呂食べて、ご飯に入るの？」

これまた天然で、突っ込みを、アーチェルが入れた。

「う、ウルサイわい！！ 姉様は細かい所をちくちくと……わ、わらわは寝る！！」

さっさと自分のベッドに潜り込んだ。

例によって二段ベッドで、キュポアは良く寝惚けるので下の段。

その上の段にはリイナが寝ていた。

意外にもリイナのベッド周りには、可愛い熊のぬいぐるみや兎のぬいぐるみ、可愛いフリルの付いた花柄の布団や枕などの装飾がなされていた。

リイナ本人に言わせると、きつと、

「失礼な奴だな」

等と、怒るかもしれないが、この部屋で一番女の子らしい格好なのはリイナだった。

それもここ最近、急にである。

それまでのリイナはとても清潔感があっても、自分を女性と見ていない節があつて（特に『蜘蛛』覚醒時）女の子らしさとは無縁であつた。

それでも当初は普通の人格が残っていて、『蜘蛛』の人格はそのうち消えて行くだろうと思われていた。

しかし、結局『蜘蛛』の人格が残って、普通の人格と言う物は見られなくなった。

では、今は普通の女の子らしい人格が戻ってきて、そうして可愛い物を集めているのかと言うとそうでもない。

『蜘蛛』の人格で『それ』を行っているらしい。

それを指摘されると極度に照れて多弁になり、仕舞いには怒る。見る者によっては可愛く見えるだろう。

リイナはこれを不幸に思っているかと思えば、そうでもないようだった。

それは、どちらの人格もリイナであつて、どちらが残っても構わなかったからである。

そうこうしている間にアーチエル達は、遅い食事を済ませ風呂に入った。

アーチエルのベッドの場所が一番奥の下側だ。

隣にはミカ、上にはサクラコ、斜め上にはエミルがいる。

皆、布団に入って寝る状態だ。

アーチエルがもじもじしている。

「ねえ……ミカさん……」

「なあに？　アーちゃん」

「あの……、あのね？　しょ……勝負下着の事をね……教えて……欲しいの」

アーチエルは最後は消え入るような声でミカに訊いていた。
一応恥かしい事とは学習したらしい。

「ああ、その事ね。尻切れトンボになっちゃったもんね。うん。勝負下着ってのはね、異性の性欲を誘発させるために身に着ける、下着の事よ。女性が男性を……この場合には、アーちゃんがアシユマ先生を欲情させるために身に着ける、下着を指す場合が多いわ」

「せ、性欲を誘発って……ど、どういうの？」

一応興味はあるらしい。

「黒いレースの色っぽい下着とか、Tバックの下着とか……エッチな感じの下着なんかはそうよ？ ……あ、でも真っ白い清楚な下着のほうが良いって男の人もいるから……そうだなあ、異性に喜んでもらえて、尚且つ、自分が相手に見せたいとおきの下着って事になるのかしら。……多分」

「とっておきの下着……」

（そういえば、アシユマさまはどういった下着が、お好みなのかしら？）

考えアーチエルは顔を真っ赤にし顔を半分まで隠してしまった。
恥かしいのだろう。

「それより、今度は訊かせて？ アシユマ先生とアーちゃんのこれまでの生活」

「えっちな事？」

「えっちな事じゃないわよ」

ミカは努めて優しく言った。

「そうねえ……二人の生活……これまで、どうやって暮らしてきたのか？ 若しくはこれからどうやって暮らしていくのか……なんてね……かたっ苦しい言い方になっちゃったけど、要はどうやって生計を立てているのかね。そこら辺のところを訊きたいのよ」

アーチエルはホッとした様子で話し始めた。

「うん、それなら……王宮の隣にね道場建ててね、そこで道場開いてるの。……なんか変な言葉ね。生計はお弟子さんからのお月謝で。」

決して内情は豊かではないわ。でも、お弟子さんの現物納品や、付け届けなどもあるし、何とかやっていける。内情は豊かじゃないって言ったけど、皆の温かい目に見守られて生かされているって感じかな……。上手く言えない。あはっ」

「じゃあ、アシュマ先生道場主で？」

「うん、ついでに言うならお父様も門下生なの。もともとこっちの地方に、アシュマさまの刀を使った流儀は珍しいじゃない？　だから国中からは門下生が沢山来るの」

「道場は大盛況。でも台所は火の車……と？」

「そこまでは行かないけど……奥向きはアン……うちの女中なんだけれどね……に半ば任しちゃってるし……」

「アンさんってこの前うちに遊びに来た人でしょう？」

「そう、ミカさん家に一緒に行った」

「バリバリのメイドって感じだったよねー。家のご飯作るの手伝ったりして。言葉だって通じないのにだよ」

「う……ん」

アーチェルが返答に窮していると、

（あの人は、そういう力技的などころあるからなあ。そういえばアシュマさまとの仲ってどうなったんだろう……？）

そんな想念が沸き起こった。

そして……

（アシュマさまかあ……）

想いはアシュマに馳せる。

「アシュマ先生は優しい？」

アーチェルは話しがアシュマのことに話を振られて、ほんの少しどきりとする。

「うん。とっても。わたしを見る眼が優しいの。昔に比べて格段に。何かに付けてキスしてくれるようになったし♪」

その言葉にキュポアは、

（それは昔からじやろうが！）

心の中で舌打ちした。

「ごめん、惚気ちゃった。この話はここまでにしとくね」

「うん、……付け届けてどんな物があるの？」

「パンとか小麦粉とか魚とか肉とか。後はその家その家の家庭料理とか」

「変わったものでは？」

「………かえるの干物……とか……故郷^{くに}では、特産品なんだけど……わたしはチョツと駄目……」

「あたしも駄目そう。形とかそのまま残っているんでしょう？」
「うん」

「ワタクシも駄目そうだわ」

「あら？ サクラコ姉さんご参加」
「くすっ」

アーチェルが笑った。

「あたしも駄目ね」
クールにリイナも話に参加した。

「リイナちゃんご参加」
ミカがいう。

「アッ、あたしも！」
「はい、エミルさんご参加……キュポアちゃんは？」

「もう寝たのよ。きつと。そういえばかえるの干物で思い出したけど、キュポアはかえるの干物が大好きで……いつも必ずほお張っていたっけ……」

アーチェルは昔を懐かしむように言った……。

「このタイミングでその話題を振るかあー!!」
キュポアはミカの隣でがばりと起きた。

「あ」
「キュポアちゃんご参加」

学園祭の準備の疲れが残っているにも拘らず、アーチエル達は今も経つのも忘れて話し夜は更けて行った。

夜更け……そう、夜更け。

校舎の壁を這い回る怪しい影があった。

がさがりとめばしい所を捜しては気配も無く動き回っていた。

『そいつら』は三『匹』いた。

長い触角を持ち、棘のある脚を六本持ち、油にてかった様な羽根を持った……。

姿形はまるでゴキブリの様……。

いや、そのものだった。

人間大のゴキブリは、ある目標があるようだった。

その目標を見つけたとき、一斉にゴキブリどもは集まった。

目標はアーチエルの眠る部屋だった。

それは即ちアーチエル自身が目標だとも言えた。

しかし、七賢人紛争も終わった今、一体どこの勢力が何故アーチエルを狙うのか？

が、それは今は分かるまい。

今、分かる事は、ゴキブリ共がアーチエルを狙っている事だった。

「何、人妻の寝所を覗いているか！ 慮外者！」

その声は低く静かだが、よく通り迫力を伴ったものだった。

「そんなところにいないで、こっちに来い！」

声は彼等の頭上から聞こえてきた。

「ジッ！」

ゴキブリ共が視線を転じた先には、アシユマがウィングの魔法によつて、宙に浮いていた。

ゴキブリ共が殺気を放つ。

「おいおい、普通ゴキブリと言うものは、ここで逃げるものだろう？ それに鬼虎を貴様らの体液で汚したくもないしな」

ゴキブリはアシュマを襲う気配を見せた。

一匹、また一匹と校舎から離れて飛んで行く。

アシュマは極々自然に校舎から離れて校庭の方へと飛んで行く。
誘っているのだ。

アシュマはゴキブリ共をマシンナリービーイングと踏んでいた。
何が起るかわからない。

下手をしたら自爆されかねない。

だからアシュマは被害の及びにくい校庭を戦いの場を選んだ。

そのことを知ってか知らずかゴキブリ共はその体を地面に接地させた。

そこからがさごそと、蠢くように這いずり回りながら攻撃に機会をうかがっているのだ。

アシュマがぴくりと動く。

するとザーッとゴキブリ共が這いずり回る。

「そうだったな。スピードがこいつらの信条だったな」

アシュマの背後に回った奴が攻撃を仕掛ける。

尻の根の突起物を飛ばしてきた。

大質量の念封弾だ。

それはアシュマは難なくかわした。

アシュマは鬼虎の刀身を銀色に輝かせ、『三日月』を三枚、鬼虎から煌かした。

が、全て外れた。

「！」

侮ったわけではない。

やつらのスピードに追いつけなかったわけではない。

では何か？

アシュマは気弾の類を相手の気を頼りに狙う。

ここから先は、矛盾に聞こえるかもしれないが、秘剣の類はよほどの例外を除いて気を持つものをその標的から外さない。

マシンナリービーイングは擬似的な念導境界面、いわゆる気の力

場を形成する為に『気配』を発生させる。

念導境界面の力場を構成する為に『脳』をその部品としているらしい。

故に、マシンナリービーイングも、この攻撃から逃れる術は無い。大袈裟な言い方だが、その、アシュマの気弾『三日月』をゴキブリ共は外したのだ。

（念導境界面を張ってないのか？）

こうなればアシュマは地上に降りてきれば良いだけのことなのだが……。

（しかし、よくもまあ似せて作ったものよ）

呆れた。

倒すのは簡単。

アシュマは今それをやってみせる。

「アーアーゲー。アーゲーアー。ゲーアーアー……」

アシュマお馴染みの技だ。

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無

無限の力、その一端を見せん

我を死の淵から救いたまえ

纏え漆黒の羽根

ブースト!!」

今日はいきなり飛ばすらしい。

何せ逃げられてもなんだし、その上何より彼らの体液を浴びるのが嫌だった。

尤も念導境界面で防げるのだったが

ゴキブリ共はと惑った。

急にせわしく動き始めた

が、アシュマのブーストの前になす術も無く斬り刻まれていった。

第二節 学園祭 Ⅱ準備Ⅱ

アシュマはこの事態を校長に報告するべく夜中の校長室へと出向いて行った。

「もしそんな化け物みたいなゴキブリ……うゝっ、さぶっ……失礼。……が、いたらどう対処したら良いのでしょうか？」

校長は先ず言った。

「とは？」

アシュマが問う。

「このスコラは今ノリトレア、オロ・エバス両国にまたいで帰属しています。処理するにしても、どちらの国にお願いすればよいのやら……」

「……………」

「それに、一体どの勢力がこのスコラなり、人物を狙っているのやら、それも突き止めねばなりませんし」

「……………そうですね。とりあえずアルステインにでも声をかけてみましょう」

「オロ・エバス国では駄目でしょうか？アシュマ先生……」

「……構いませんが？ 何故」

「今ではこのスコラは出資資本が殆どオロ・エバス国に頼っています。また、立地条件がノリトレアよりオロ・エバス国のほうが近いので何かと便利です……学園祭が近付いてきているこの時期に生徒達に不要な動揺を与えたくないのです」

「つまり秘密裏にこの事进行处理するのはオロ・エバス国が適任だと」

「ええ。そうです」

「変わられましたね、校長」

「は？」

「昔でしたら即刻学園祭を中止して事態に当たっていた筈」

「ご、ごほん。そ、それより現場に行ってみましょう。先ずはそれ

から」

「そうですね。それからこの事は一応アルステインにも報告しておきますよ?」

「そうね。そうして頂けるかしら? それにしても、陛下も貴方に掛かると、呼び捨てになるのねえ」

ミス・ケリー・サトウは、アシュマと二人で、先程戦闘があった現場へと向かった。

そして現場に着いたは良いが、そこにある筈の死体が、綺麗サツパリ無くなっていた。

「アシュマ先生、本当にここで戦闘が行われたのですか?」

ミス・ケリー・サトウは、大いに疑問を呈した。

アシュマはそこ残っている痕跡が無いか、注意深く辺りを見回した。

よくよく見ると細かな部品が、辺りに散在していた。

よほど慌てて回収に来たらしい。

「校長、これが証拠です」

そうアシュマは言った。

「おお、怖い。本当に戦闘があったのねえ。じゃあこの事を、オロ理事長とアルステイン理事長代理に報告しなければ。ああ、アルステイン陛下には、貴方が報告をなさるんでしたよね?」

「ええ。あと、暫く生徒には夜間外出禁止を言い渡した方が良さそうですね」

「そうですね。そうしましょう」

オロ・エバス国の捜査官たちは直ちにやってきて、手際よく現場の処理を行なった。

その手際のよさに、アシュマは逆に不信感を抱いたほどだ。

そして次の朝、朝礼で夜九時以降の夜間外出禁止令はすぐさま発布された。

理由は述べられなかった。

生徒達の激しいブーイングが起こった。

これからが学園祭の追い込みに入るといいうときに、この禁止令は生徒達にとって死活問題となるからだ。

しかしそれ以外では、生徒たちにとっては慌しい日々の連続であった。

「そうねえ。やっぱりこうなると欲しくなるわよねえ」

ミカが頭を捻っていた。

「そうでしょ？ 無いとなるとそれはそれで寂しいモノよ。お客様にはそんな気持ちにさせたくないわ」

サクラコが言う。

そこへアーチェルがやってきて、

「どうしたの？ 二人揃って頭を捻って」

そう言った。

「うん、あのね……」

ミカが話すには、クーロン茶の最高級茶葉がどうしても手に入らない。

この喫茶室で、最高級のイーハン茶とアールヌー茶を出すのに、クーロン茶だけが普通の茶葉ではまずかろうということだった。

「どうにかならないかしら……」

「うーん……」

今度はアーチェルが頭を捻ってしまった。

校庭にサイコフライヤーが降り立とうとしていた。

皆物珍しげに取り巻いて見ていた。

真紅のそのボディには重々しい武装が幾つも付いていた。

護衛の魔導機兵も二機付いていた。

機体はカスタマイズされているが、ノリトレアの最新機種エスタだった。

そのカスタマイズがこれまた極端で二機とも装甲を通常の機体の二倍にし、二機とも機体と同じ長さはあろうかと言う大振りの、『剣』と『刀』で装備されていた。

『刀』を装備している機体の方は三十ミリバルカン砲で武装が施されていた。

三機ともハッチが開いて中から人がでてくる。

二機の魔導機兵からでてきたのは、オルバニアン・マグマイヤーと、アルミナ・ラ・シア。

そしてサイコフライヤーから降り立ってきたのは、なんと、アルステイン・ノリトレアその人であった。

騒ぎ出す女子たち。

「きゃー、誰？ あ的美形のお方は？」

「まあ、お美しい！」

「あの方がアルステイン陛下なんですって」

「でも、正体はヨディ先生って噂が……」

「何でわざわざこの時期に？」

「まさか学園祭を見に行くつもりなのかしら？」

そしてオルバニアンは女子に、アルミナは男子に、取り囲まれていた。

二人とも一応美男美女だったし、二人とも七賢人紛争の英雄だったから、人気が高かったのである。

「皆さん、すまないが道を開けてくれまいか？」

アルステインが涼しげな声音で言う。

「きゃーっ！ アルステイン様っ！」

女生徒の黄色い歓声の中、その歩みは校舎へと向かっていった。

それに続くオルバニアンとアルミナ。

生徒達は知らない。

今、何かが起こりかけていることに。

世界を震撼させる、何かが、起こりかけていることに。

アルステイーン一行が校長室の前まで来た。

扉の前では、ミス・ケリー・サトウが、一行を待ち構えていて、自ら部屋の中へと案内した。

「まあ、皆さんお久しぶりで……」

椅子に座っていたアーチエルが立ち上がり、アルステイーンと握手した。

「アーチエル様もご健勝で何よりです。アシュマ君も……」

「ああ、お互いにな。だが王直々に来るとは恐れ入った」

そう言って、アシュマは立ち上がり、アシュマとアルステイーン二人の友は、握手をした。

「まあ、半分は学園祭見たさにだけどね」

だが、その実本音は、何やらきな臭いものを感じて、実際に自分の目で確認しようと言う腹積もりなのだろう。

二三分程は互いに挨拶をしあっていた。

そして話題の本題に入る。

「？ マシンナリービーイング兵？」

アルステイーンが口を開いた。

「『なり』は俺の好みじゃないがな」

アシュマが応える。

「どんな『なり』なの」

アルミナが訊く

「ゴキブリだな……あれは」

「ひいひい、アタシやゴキブリと放射能だけは駄目なのよ！」

「どういう理屈だよ？ ふざけてねえで先、聞きな」

オルバニアンがアルミナを注意した。

「だって、本当なんだもん」

「で、アシュマ。そのゴキブリ野郎がどうしたんだい？」

「部屋を覗いていたな」

「部屋を？」

アーチェルが訝しそうに訊いた。

「ああ。そういえばあそこはアーチェルの部屋だったな……」

「はたまた、どこぞの勢力が、バヴェルを動かそうとしているんでしょうかねえ」

アルステインがぼそりと言った。

「止めてください。そんな不吉な……」

アーチェルはその事がさも嫌そうに言った。

「成る程。でも、それは考慮に入れなければいけないな……」

と、アシュマ。

「え……嫌ですう……」

「大丈夫だ、守ってやる」

アシュマさま！

アーチェルはぱっと華やくだような笑顔になった。

「でも、そう考えると、理屈としては通りますよね？ あとで、オロにも聞いてみましょう」

アルステインが言った。

「さて、そうとなれば学園祭の下見と行きますか」

アルステインは、楽しそうにそう言う。

「アルステインは、護衛の人間が到着するまで駄目だ」

アシュマが断じた。

「え……？ どうして……！？」

「当たり前だ。こんな雑多な中で刺客にでも襲われても見ろ。お前はおろか下手したら生徒まで巻き込まれかねん。今ある警護の人間でサイコ・フライヤーの中で大人しくしている」

「え……！ やだ、やだ、やだ！ あそこの中は退屈なんだもん」

「退屈もクソもあるか。我慢しろ。大体、なんでこんな我侭な王様になったんだ？ これで名君？ はっ！ 聞いて呆れるぞ。いいか、

お前には最低十人の警護方が必要だ。それが揃うまで外出禁止、面会謝絶。いいな!？」

「そんなくくアシュマくくくん」

「そんな猫なで声出しても駄目だ!」

「あのくアシュマさま……」

「何だ? アーチェル?」

「アルステイーン様が軟禁される前にお伺いしたい事が……」

「な・軟禁……」

アルステイーンは、自分の立場は一体なんなのかと落ち込んだ。

「オルバニアンさん、復学するんですか?」

ミカは鬼気迫る勢いで訊いて来た。

「な、何だよ急に?」

「私達のクラスの出し物に参加して欲しいの!」

「何で俺なんか……まあ、参加してみたくもあるけれど……俺、多分直ぐスコラからいなくなっちまうぜ。なんてたって名目上は、アルステイーンの護衛役って事になっているから」

「それだったら大丈夫じゃない? あのアルステイーンだもの。こう言うお祭り事は好きだと見たわ」

アルミナが断定をする。

「そうね。そうよね! じゃあ、オルバニアンさん、アルステイーン陛下に許可貰って、スコラに復学して! お願い!」

「ねえ、ミカさん。復学は良いけど何でオルバニアンなの? アタシじゃ駄目なの?」

「もちろん皆さんもそうだけど、私達ロイヤル喫茶と言う出し物で……」

そこでミカはロイヤル喫茶の内容を掻い摘んで説明した。

「オルバニアンさん、王族でしょ? 男子の人手が足りないのよ。お願い! 出て!」

「そりゃ、良いけどよう。おれ、育ちはどちらかというとあんまり高貴なほうじゃないから言葉遣いめちゃくちゃだぜ？」

「いいの。オルバニアンさん存在感あるから」

「じゃあ、アタシは何をすれば良い？」

そうアルミナは言った。

「キュポアちゃんのお手伝いをしてあげて」

「わかった」

こうして二人は、暫くの間復学する事になった。

勿論、ミカのクラスの出し物に参加していた。

元来は、違うクラスで、ライバル関係なのだが、スカウト制度のようなモノがこのスコラにはあって、有力な生徒の、争奪合戦と言うものも存在していた。

さながら戦国武将の権謀術数、智謀合戦と行った趣もある。

故に学校側は、これもカリキュラムの一つとして積極的に許していた。

アーチェルは自分の携帯端末でダイアルをプッシュしていた。
コール音が数回鳴る。

【はい、こちらリンです。どなた？】

「あつ、リンさん？ アーチェルです。ご無沙汰してます。リンさん」

アーチェルが掛けた先は、先のクローン革命政府そのリーダー、リン・シャオリンだった。

『何ネ！ 泥棒猫じゃない？ 何のようネ！？ 私忙しいヨ！ 大体この電話番号アルステインにしか教えてないネ』

「あつ、あのお願いが……」

『何ネ？』

「あのクローンの茶葉の最高級茶葉を分けて貰えないでしょうか？」

『……………』

「あの……リンさん？」

『あんだ！ 此処をどこだと思っているネ！ 革命政府あるヨ！ 問屋と違うネ！ 勘違いしてもらっちゃ困るヨ！』

「すっ、済みません！ やっぱ無理ですよね。私が浅はかでした。どうも済みませんでした……」

『……。どのくらい必要ネ？』

「はい？」

『だからどのくらいの量が必要ネ？』

「じゃ、じゃあ分けていただけるんですね？」

アーチェルは教室に入ってくるなり開口一番
「クローンの茶葉最高級仕入れに成功しました」
そう言った。

クローンの茶葉、最高級はクローン国内でも中々手に入らない一品とか。

これに教室中は沸いた。

「凄いじゃない、アーちゃん！ どうやったの？」

ミカが言った。

「アルステイン様の伝で、クローン政府の方に直接仕入れをお願いしました」

「アルステイン様って、一応凄い人だったんだね。スコラにいるときにはそんな風には見えなかったけど」

「くしゅん！ ……風邪か？」

アルステインは、半軟禁状態に辟易していた。

いつになったら、この状態から抜け出せるのかと、苛々いらいらとしていた。

早く本国から警護の者、十人が到着してくれればと思う。

しかし、警護名目で雇ったオルバニアンとアルミナが、スコラに復学するとはどういうことか？

羨ましいを通り越して怒りさえ感じる。

ただ、アルステイーンは、アシュマの言う通り下手に歩き回れないのも事実だった。

アルステイーンは一国の王なのである。

軽はずみな事をして万が一、命を落すような事があれば、一大事なのである。

此処は、矢張り、追加の護衛の者を待つしかないだろうと思った。

昼休みに、レンヌが女子と話をしていた。

当日着る衣装に関して、相談していたのだ。

それに加えて他愛ない世間話もしていた。

リイナはそれを見て面白く思ってた。なかった。

今日はレンヌに、お弁当を作ってきたのだ。

リイナはこのスコラでは、『気まぐれな人』として名が通っていた。

それは口説かれた時の反応による。

時に食事に誘われたかと思えば、時に相手を振る事もままある。

それが同じ人物であったとしても、誘いに乗ったかと思えば時には振る

これが却って、リイナがミステリアスな少女として、崇め奉られる事につながるわけだが……。

その遠因は、レンヌと上手く行っているか否かに大きく左右される事を、幾人が知っているだろうか？

リイナはまた『気まぐれ』を試してみせ、レンヌの前でわざわざ食事の誘いを受けた。

しかも複数人から。

「リイ……」

レンヌはリィナの名前を叫びつけようとしたが、
「レンヌ様。私達もお食事行きましょう？」

レンヌ信奉者がレンヌに取り巻き食堂へと連れて行ってしまった。
これを見たリィナは惱気を起こし、わざと男子と仲良くして見せ、
レンヌもレンヌで同様にして見せた。

互いに火花が散るのが見て取れるかのようだった。

「また、あいづらはっ！！ 昨日言った事を忘れているのかッ！！」
キュポアはなぐりを玄翁袋に入れて、

「ミカ、食事に行って参る」

レンヌたちを追いかけに行った。

「あれね？レンヌ王子とリィナの喧嘩って……」

アーチェルがミカに言った。

「そうなの。ちよつと困っちゃって。今のところキュポアちゃん任せなの」

「そう……」

「今日と言う今日は言っでやる！」

キュポアは息巻いてレンヌとリィナの所へ行った。

先ずはレンヌだ。

「レンヌ！ ちよつと来い！」

「な、何ですか？ キュポアさん！？」

「何よあなた？ 私達のレンヌ王子を横から……」

「うるさい！！ 黙れ！！」

キュポアは取り巻き達を黙らせた！！

「大体お前らみたいな奴らがいるから、こっちは苦勞をするのじゃ」
次はリィナだ。

「リィナ！！ ちよつと来い！！」

「いやだ」

「いやだじゃ無い！！ こっち来い！！」

「何をする！　いたっ！　耳、耳！！」

レンヌとリィナはキュポアに連れられて教室に戻ってきた。

二人ともムスツとして視線を合わせようとしなない。

「一体二人はどうなっておるのじゃ！？　近頃は顔を突き合せれば喧嘩ばかり。おぬしらは何を考えておるのじゃ！？」

「……………」

「……………」

「レンヌ！　お主は、昨日わらわが言ったことを、覚えているのか？」

「……………覚えています」

「なら、もっと大人になれ。そしてリィナ、おぬしには何と言ったかのう？」

「忘れた」

「忘れたではない！　もっと素直になれと言ったはずじゃ。それに人を悪戯に巻き込むな。お前の気まぐれで『勘違い』をしておる輩が増えていると聞く。大事になる前にそういうことはやめよ！」

「どう言う事だ？」

「取り巻きを利用してレンヌの気を引こうとしていることじゃ！！」

「わ、私がそんな姑息な手を使うか！」

「おお！　使うておるわい！」

「……………」

「だから素直になれというておる。嫉妬しているなら嫉妬していると素直に言えばよからう。悪いことではあるまい？　レンヌもそれを受け入れるだけの度量を身に付けよ」

「……………」

「……………」

「返事！」

「分かりました」

「分かった」

「ならば良し。昼休みも終わる。持ち場にもどれ。あと、レンヌは

あまり他の女といちゃつくなよ?」

「分かりました」

これで大丈夫だろうとキュポアは思い、持ち場について一分もしないうちにそれは起こった。

レンヌとリイナが大声で喧嘩を始めたのだ。

「ひどいわ! 嘘つき! 独りにしないって、約束したのに!」

「独りにした事なんか無かったじゃないか! それどころか、君はいつも取り巻きに囲まれて、寂しい想いなんてしてないじゃないか!」

「レンヌの馬鹿!! わたしが、どれだけ寂しい想いをしているか、解らないの!?!」

リイナは涙を流して訴えていた。

「馬鹿が! 最悪じゃ」

キュポアはなぐりを持ったままその場に戻った。

「何じゃ、何じゃ!?! 何が原因じゃ!?! レンヌ、何があった?」

「……………」

「リイナ?」

「……………」

「二人がだんまりでは、解決のしょうが無いではないか? どうなのだ?」

「……………」

「……………」

「ふう……。二人とも、ちと冷却期間が必要じゃの。ミカ、今日は二人とも宿舎に帰そうかと思うが構わないか?」

「えっ、ええ」

ミカはたじろぎながら許可を出す。

「誰か付き添いは……わらわは仕事があるし……」

丁度良い所と、言わんとばかりに、アシユマがやってくる。

「みんなー。ちゃんとやっとなるかぁ?」

渡りに船。

キュポアはアシュマに声をかけた。

「怪獣！ 良いところに来た！ ちょっとこっちに來てたも」

「なんだ？ キュポア？」

「実はレンヌとリイナが『具合』が悪いのじゃ。宿舎まで送っていったも」

「そうか。わかった。送って行ってやる。どこが具合悪いんだ？」

（それを聞くな怪獣。二人は今喧嘩の最中だ。二人には宿舎で頭を冷やしてもらおうかと思っている）

アシュマはきよとし、間を一拍置いてから

「ま、よから」

と、言い

「レンヌ、リイナ行くぞ」

そう言った。

アシュマは二人を従えて、廊下を歩いていく。

後ろの二人は、相手を意識してはいるが、無視を決め込んでいた。その気配を察知したアシュマは、

「何が喧嘩の原因かは知らんが、周りに迷惑だけはかけるなよ？」

下手したら学園祭の減点対象にもなる事になるぞ？」

そう言った。

「僕達喧嘩なんてしてません。リイナが勝手に絡んで来るだけです！」

と、レンヌが言えば、

「何を言う！ 挑発しているのはレンヌお前ではないか！」

と、リイナも返す。

「僕がいつ挑発したんだよ！ 挑発しているのはリイナ、君のほうじゃないか！」

「だって、独りぼっちにしないって約束したのに、約束を破ったからでしょ！」

「僕は君を独りぼっちになんかしていない！」

「じゃあ、なんであんな女共と一緒にするんどのよ！」

「それはお互い様だろ！ ……ところで、アシュマ先生？ なぜ僕たちの喧嘩を止めないんですか？」

レンヌの矛先がアシュマに向いた。

「喧嘩じゃないんだろ？ なら、コミュニケーションなんじゃないか？ 一種の。とことんまでやれば良い」

「これが元で、二人の関係が壊れたら、どうするんですか？」

「その言葉が出てくる間は大丈夫だ。そうだろ？ リイナ」

「別に……こんな関係がいつまでも続くなら、私はぶち壊しても構わないと思っている」

「リイナ！」

レンヌが叫ぶ。

「真にうけとるな。ちょっと拗ねてるだけだ」

そうアシュマが言う。

本当だろうか？

男子寮に着いた。

アシュマが、

「あとは任せておけ。上手く話をつけておく」

そう言ってレンヌを男子寮に残した。

「とは言ったものの、何から話そうかリイナ？」

「私は何も話すことなど無い。要らぬ斟酌だ」

「でもレンヌの事は、まだ憎からず思っているのだろうか？ それを、

周りの要らぬ取り巻き連中に囲まれて嫉妬するわけだ」

「知った風な事を言うな！ 見たこともないくせに」

「お前の事だ。そうやって意地を張って、本当は寂しいくせに……独りぼっちにされてしまうような感覚に襲われるわけだ」

「言うな！」

「それを我慢して……自分も取り巻きを使って、レンヌの気を引こうとして……」

「言うな！！」

「誰よりも好きなレンヌが、遠くに行ってしまうような気がして」

「言うな!!」

リイナは涙声になっていた

「素直になれ。リイナ」

「それはキュポアから聞いた。しかし何をどう素直になれば分らん!」

「そうだな、レンヌに取り巻き連中が来たら、すかさずお前が輪の中に入って、レンヌの腕でも掴め。そしてレンヌは私のものだとも宣言しろ」

「なっ、そっ、そんな恥かしい事が出来るか!」

「いや、やるんだ。出ないとお前の嫌いな『この関係』がいつまでも続く事になるぞ?」

「……分かった」

「ふう。矢張り男手があると、はかどるのう。これで土台は大まか出来上がったな」

キュポアが一息ついた。

「アタシや男手かい!」

手伝っていたアルミナが言った。

「似たようなもんじゃろう。さて明日からは柱と壁の搬入作業に入るぞ」

「搬入作業? 今、此処にあるベニヤ板の壁や柱は?」

オルバニアンが、至極尤もな疑問を言った。

「土台を残して使う! だから今日は土台の補強に回ってもらったのじゃ」

「その壁と柱って、どこから持って来るんだよ?」

「ノリトレアの大塔跡地じゃ。尤も使えるかどうかは、持ってきてもらってから決めるがの。だからベニヤの壁と柱は、残してあるのじゃ」

「誰が考え付いたの、そんな事?」

アルミナが疑問を呈する。

「ミカじゃ。とんでもない事を考え付くわい。お陰でこっちの仕事が、増えよる、増えよる」

その壁と柱は、ノリトレアの王妃と警護のもの十数人と共に、資材運搬用のサイコ・フライヤーと共にやって来た。

王妃は、言わずと知れた、エファール・ノリトレア王妃である。

アルステイーンの、あまりのちゃらんぼらん振りを、じかに諫め（怒り）に來たのである。

早速エファールは、アルステイーンのサイコ・フライヤー『紅龍』に怒鳴りつけに行った。

「『ああた』っ！！ 『ああた』はこの忙しい時に何をやっているの！？ 『ああた』がやらなければならぬ仕事は、山積しているのよっ！ さあ、帰るわよ！！」

「まった！ 今は公務中。公務を放り出して帰る訳には行きません」
「なんですって？ 何を馬鹿な事を……」

ここで、アルステイーンは新聞を取り出し、一面を指差した。

「ノリトレアの国王アルステイーン陛下は、オロ・エバス国の学院・スコラを表敬訪問。同学院の学園祭をご覧になる為、数日間滞在の模様……なんですってえ？ やってくれたわねえ？ ヨデイ？」

そうエファールは言い、指をボキボキ鳴らして怒りをあらわにした。

「ひっ！ ひよええええ〜」

アルステイーンは廊下からブリッジにまで逃げ込み、しだいに行き場を失っておろおろとするばかりだった。

「あっ、ちよっと待って、エファールさん！ そうだアシュオンは？ アシュオンはどうしている？」

「アシュオンをダシに逃げようたって、逃がさないわよ！」
その時後ろで、

「ほぎゃああああん」

と、赤子の泣く声がした。

「あらあ。アシュオンちゃん、御免なさいねー。ママがいけなかったでちゅねー。パパにかまけて、アシュオンちゃんのこと忘れちゃって。お腹が空きましたでちゅかー？　ぱいぱいあげましょうねー」
エファールは早速その豊満な胸をはだけさせ、我が息子アシュオンに乳首を含ませる。

兎にも角にも、この状況から逃げ出したいアルステインであった。

それは、今がチャンスと忍足で、ブリッジから退散しようとしている。

「ヨデイ？　どこに行こうとしているの？　話しはまだ終わってなくてよ？」

エファールがアルステインに釘を刺した。

「うゝゝゝん難題ね」

ミカは言った。

ノリトレアの中央大塔跡地から持ってきた壁が大きすぎるのだ。

「ぶった切るしかあるまい」

そう、キュポアは断じた。

「それに、却って味になる」

「そうね、余分な部分は切りましょう。キュポアちゃん。後の事は任せるわ。宜しく」

「おう、任された」

キュポアは寸法を測り、ノリトレアの職員を使って、壁の余分な部分を、切り分けさせた。

切り分けている最中、元あったベニヤ板のしょぼい壁や柱は、土台として使われ、切り分けられた壁から順に、教室の中へと運び込まれて行った。

壁には美しい装飾が生されていたが、このままでは教室に搬入できない。

そこで壁は無造作に切り分けられた訳だが、意外にもそれは退廃的なムードを漂わせ、良い感じを醸し出していた。

これが済めば大道具係は、仕事の大半が終わる。

後は搬入した壁の補強と、別口で頼んでおいた（これも、ノリトレアの大塔跡地からの流用だが）シャンデリアの取り付け、テーブルセットなどの家具類の調達、その他で仕事は終わる。

キュポアが、壁の移動の采配を振るっている頃、アーチェルがやってきて、

「キュポア、あなたこれちょっと着てみて。あなた用にサイズ合わせただけけど……」

薄紅色のドレスを持ってきた。

するとキュポアは

「今は、それどころではないわい。見て分かんのか、戦争をやるよりも忙しいのじゃ。後で着るから向うで待ってて」

「……………うん、分かった……」

姉としては、一刻も早くキュポアに、アーチェル自慢の手直ししたドレスの、着た姿を見てみたかったのだが、それも肩透かしを食らった思いがした。

アーチェルは、自分で言うのもなんだが、妹のキュポアは可愛く美形であるから、さぞやこのドレスが似合うだろうと思い、丹精込めて縫い上げたのである。

だが、当のキュポアは大道具仕事で手一杯。

寂しい思いがした。

が、これも妹が自立して、自分の立場を得て立派に仕事をしているという、喜ばしい事なのだろうと思うことにした。

不意に拡声器から声が漏れる。

『アーチェル・アトーさんキュポア・アップルトンさん至急校長室まで出頭してください。繰り返します……』

「キュポア……」

「分かっておるわい！ 姉様。この忙しい時に……全く！」

アーチェルが校長室のドアをノックする。

「どうぞ」

中から声がする。

「失礼します」

アーチェルが声をかけ中に入る。

中にはアシュマとミス・ケリー・サトウがそこに居た。

「アーチェル・アトー、キュポア・アップルトン、出頭いたしました」

アーチェルがはきとして言う。

「宜しい」

ミス・ケリー・サトウが言う。

「先ずは座って」

「はい」

アーチェルとキュポアは、何を言われるのかと、戦々恐々としていた。

特にキュポアなどは、この手の席に呼ばれる事などなかったので、緊張の度合いがはたから見ても分かる程だった。

「ミス・キュポア。そんなに緊張しなくて大丈夫なのですよ。とって食おうというのではありませんから」

「ひっ、はっ、はい！」

「話と言うのは他でもありません。ミス・キュポア。あなたに帰国命令が届いています」

「きっ？ 帰国命令！？ わらわはそのような話聞いておらんぞよ！？」

「これ、キュポア。言葉使い」

アーチェルが注意を促した。

「で、帰国命令とはどういうことなのですか？ 校長先生」

アーチェルが重ねて言った。

「それが、直ちに帰国せよと言う事しか伝えてこなくて、こちらも困惑している所なのです。それで、アーチェルさんにもお越し頂いたと言う事です」

「そうでしたか。それでしたら本国に確認を取ってみます。少しの間失礼します」

「姉様！ わらわは帰国なんぞ絶対に嫌だからな！ 折角スコラが面白くなってきたというに、このままでは帰れん。それに、今わらが抜ければ学園祭の準備に滞りが出来てしまう」

「分かりました。キュポア。少し落ち着きなさい」

そういつてアーチェルは携帯端末を取り出して、エースティーへの直通回線にコールした。

数コールの後、

『はい、エースティーです』

エースティー・アップルトン、レキシタニア王が出た。

「兄様。わたくしです。アーチェルです」

『おお、アーチェル。スコラに戻って数日も経っていないと言うのに、もうホームシックかい？ 戻って来なければいつでも戻っておいで』

「有難う御座います。兄様。でも今日はキュポアのことでお話ですが……」

『キュポアの事？ ああ、帰国命令の事かな？』

「そうです。何故今になって急に？」

『見合いをさせようと思っている』

「見合いを？」

「何じゃと！？ 見合い？ 姉様、代わってたも！」

「これ！ キュポア！ はしたない！」

キュポアはアーチェルの携帯端末をもぎ取った。

「兄様！ キュポアじゃ。見合いとはなんじゃ？ わらわはそんな話聞いてないぞえ！」

『それはそうだ。これから話そうかと思っていたところだからの』
「兄様！ わらわは見合いなぞせぬぞ！ それに今わらわが抜けければ、学園祭の作業に支障が出る！ 見合いなどに出ている暇は無いのじゃ！」

『何を馬鹿な事を言っている。帰ってきなさい。スコラの仕事なぞ、どうせ大した事は無いのだろう？ 他の人に変わってもらえ。いいか必ず帰ってきなさい』

「わらわはなあ、わらわの仕事を……そんな風に……大した事無いだなんて……」

キュポアは言葉が詰まって泣きべそをかきそうになった。

それを見かねてアシユマが

「ちよっと端末を貸しなさい」

と、キュポアから携帯端末を借り受けた。

「義兄上、ちよっと宜しいか？」

『おお、アシユマ殿、丁度良かった。アシユマ殿からも、キュポアを説得してはいただけまいか？』

「それは御免蒙る。諫めるのは義兄上。キュポアの気持ちも立場も理解しようとせず、頭ごなしに決め付けるのはどうかと思う。仮にそんな状況で見合いなどしても破談になるのは見えている。ここはキュポアの気持ちを汲んで暫く様子を見ては如何か？」

『う……しかし、この縁談そうそう無いのだ。何せ見合いの相手はシュンマ・イーハニア殿。イーハンの皇太子なのだ』

「どこの皇太子であろうと関係あるまい。無理に見合いするのは良くないといっている。キュポアに訊いてみるか？」

『是非にも』

「キュポア、見合いの相手は、シュンマ・イーハニア。イーハンの皇太子だそうだ。見合いしてみるか？」

「誰であろうと、見合いなどせんわ!」

「見合いなどせんそうだ」

『この縁談は、我が国の繁栄に、必要不可欠なものなのだ。是非にも見合いを成功させねばならん。そのところを分かって欲しい』
「政略結婚ではないか? それでは。キュポアの幸せはどうなる? レキソタニアの人間の口から出る言葉とは思えん。俺はそのような見合いは賛成しかねる」

『これは我が王家の問題だ。他家の人間に口を挟んでもらいたくない』

「キュポアは俺の大切な義妹だ!^{いもうと} 関係なくは無い! キュポアは帰さん! 以上だ。何か話す事は?」

『……話しにならん。これで切る』

「わかった。声を荒げてすまなかった。キュポアのためだ。済まぬ事をした」

『いや、いい。私も少し考え違いをしていたのかも知れん。アリアに何と言えばいいのやら……』

「義兄上は義姉上より、少し自立なされるが良からう。それは置いておいて、ではこれにて」

『うむ』

そう言っって携帯は切れた。

「怪獣」。お主はほんつと、頼りになるのう……」

キュポアが感激してみせる。

「キュポア。でも、この縁談悪くない可能性だっであつたかも知れんぞ? お前好みの良い男で、優しい人だったらどうする?」

「そ・そんな事有り得んわい!」

「そうか」

キュポア達は、校長室を辞去し、それぞれの仕事に戻って行った。キュポアは、相変わらず壁を切り刻んで教室へと搬入する仕事に

没入していたし、アーチエルは衣装を作り続けた。

衣装といってもアーチエル達の衣装ばかり作ってあれば良いものではない。

アーチエル達とお客に、かしづくメイドたちの衣装も、作らなければならぬ。

が、時間的に間に合わない。

エミルがミカに相談する。

「そうねえ。これは困ったわねえ。どこからか調達しましょう」

ミカが言った。

「どうやって、調達するのよ？」

「あのう……それだったら私の国に侍従用の古着が余っていますが？ 大量に」

アーチエルがおずおずと二人に言う。

「それ、ナイス！ アーちゃん！ ……でも、後五日でどうやって運んでくるの？」

「それなら……」

アーチエルは、校庭の角に置いてあるサイコ・フライヤー黒龍に赴き、コクレト軍曹のところへ行った。

黒龍のハッチを開く。

アリサがアーチエルを、

「アーチエルちゃま、いらっちゃい」

たどたどしい言葉で出迎えた。

「はい、アリサちゃん、こんばんわ」

コクレト軍曹がやってきて、

「アーチエル様！ 如何なさいましたので?!」

慌ててやって来た。

「アリシアナさん、お願いがあるの。大変な仕事よ？」

「はっ！ アーチエル様の為ならば、如何なる事もこの命に代えて

も」

「そんな大げさじゃないわ。ある荷物をここへ持ってきて欲しいの。向うで一泊して一日半後にここに帰ってきて」

「はっ！ 了解いたしました！」

アーチエルは大まかな事をアリシアナに伝えた後、

「では宜しくね」

そう言って、事を頼んだ。

黒龍号は、早速発進しノリトレアに向かった。

アーチエルはそれを見送った。

キュポアは今日運ばれてきた『壁』を、補強する為の材木の品定めをするため、資材室へと赴いた。

夜も更け、資材室は真っ暗だった。

消灯時間も過ぎている。

勿論、外出禁止の時間の九時は、とっくに過ぎている。

「ぶるっ。冷えるのう。……何か出ないだろうなあ……」

キュポアは自分の両肩を抱きながら、いつもの豪快ぶりとは裏腹に、弱々しい乙女のように震えながら、資材室へと入って行った。

それを好色の眼差しで、見つめる者達がいた。

キュポアは、資材にマジックで、自分のクラスの名前を書いて押えていく。

キュポアが次々と資材を抑えていくと、後ろから不意に抱きつかれた。

「きゃあっ！！」

「『きゃあ』だってよ。いつもは男勝りな事ばっか言って、お高く留まっているのによ」

すると、四〇五人の男達が、どこからとも無く現れた。

「お、おぬしらは……」

そう、この男たちは、以前キュポアの身体が目的で大道具係に名

乗りを上げた、生徒達だった。

「お主ら、言うに事欠いて、この所業はなんじゃ!? 恥かしいとは思わんのか!？」

「うるせえ! 俺はなあ、お前のその高慢ちきな所が前から気に食わなかったのよ!」

「なら、何故わらわに近付いた!？」

「そのお高く留まっている姫様が、ひいひい言っている所を見てみたかったのよ」

「鬼畜が!」

キュポアが自分を押さえつけてる男の足を思いつき踏んだ。

「いでっ!」

その男は足を抱えてキュポアを取り逃がしてしまった。

「何してやがる、早く取り押さえろ!」

キュポアは、すばしっこく逃げたが、所詮は女の足、直ぐに追いつかれ周りを囲まれてしまった。

「あ……」

「この野郎! 手間取らせやがって」

キュポアはまた後ろから、抱きつかれてしまった。

「そのまま抑えているよ。大人しくさせてやる」

その男は、キュポアの腹に何と膝蹴りを加えた。

「ぐっ、かはっ……」

キュポアはぐったりとして意識を失いかけた。

「……………怪……………獣……………」

キュポアは呟きながら見たものは、リーダー格の男が、若い男に腕を極められて、次に投げ飛ばされた所だった。

その若い男は、次々と男達を投げ飛ばすと、こういった。

「貴様ら二度とこう言う事をしてしろ! 次は五体満足で外に出れると思うなよ!」

と、決めて見せた。

若い男はキュポアを背負い、資材質から出て行こうとした。

「まだ……じゃ、仕入れなければならぬ資材が……たんとある……」

「それはまた明日。今はゆっくり休む事。良いね？」

「怪獣……助けてたも……」

「怪獣？」

キュポアは此処で、気を失ってしまった。

気を失う時に、何か良い香りの香水のような物を嗅いだ。

次にキュポアが目覚めたのは保健室のベッドの上だった。

午前三時を回っている。

キュポアが目覚めた時、アーチェルが

「良かった。良かった……」

両手で顔を覆って泣き始めた。

見ると黒龍号の面子が皆揃っていた。

「全く、危なっかしい奴だ。自分が女だってことを忘れておる」

そう酷評したのはリィナだ。

だが、

「兎に角無事でよかった」

とも言った。

少し涙ぐんでいるようだ。

「皆、相すまぬ。全てはわらわの油断が招いた事。迷惑をお掛けした。ところで『あのお方』は？」

「『あのお方』？」

アシュマが怪訝な顔をして訊く。

「わらわをここまで運んでくれたお方じゃ。礼が言いたい」

「いない」

「え？」

「我々が、連絡を受けて此処にきたときには、すでに居なかった。保健の先生も見た事の無い生徒だったそうだ」

「そうであるか」

「今日は俺がついててやるから、皆戻ってくれ」
アシュマが言う。

「いや、独りでも大丈夫じゃ。迷惑をかけてすまなかった」

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃ」

「そうか。ではみんな、行こう」

皆保健室から出て行こうとする。

「あれは……何の香りだったんだろう……？」

キュポアは意味深に独りごちた。

次の日キュポアは、資材置き場にて、男連中を連れて（アルミナも混じっていたが）壁の補強材を運ばせていた。

キュポアは専ら指揮役である。

（そういえば昨日、ここであの人に助けられたのう。顔もうろ覚えじゃ。分かる手がかりとしてはあの香り……良い香りであったわ。

……せめて礼でも言いたかったが、もう逢えんかのう）

資材が教室に運ばれてきた。

男連中総出で運ばせている為、指揮役のキュポアは、てんてこ舞いだ。

「そうら、そこどけえ！ 資材が通るぞえ！ ぶつかって怪我しても、しらんぞえ！」

しかし、指揮に熱中するあまり本人が人とぶつかってしまった。

その時に香る花の香り。

あの香りだ。

後ろを振り返ってみる。

そこには優しい顔をした青年が立っていた。

年の頃は十八〜九位であろうか？

風貌がどこと無くアシュマの面影を漂わせていた。

しかしアシュマほど暗い影は刷いていない。

「あ、お……お主……昨日の……？」

「やあ、また逢いましたね。お嬢さん」

「い、いや、……その……昨日は何だ……その、礼も言えず……まあ、済まなんだ！ いずれ、ちゃんとした礼はするから、せめてクラスと名前だけでも教えてたも」

「魔法剣士学科クラスの八。名前は、ハルマ・イコナと言います。女みたいな名前でしょう？」

「い、いや、わらわは優しそうな名前が良いと思うぞ？ そ、そう。わらわの名前は、キュポア・アップルトン。一般魔法学科、クラスの六じゃ」

「！ アップルトンといえばあのレキシタニアの？」

「いや、それは気にせんでくれ。ここにいる間はただのキュポアじゃ、たはは」

「キュポア！ 何そこでナンパしてんだよ！ これどこに運びや良いんだよ！」

オルバニアンが叫んだ。

「な、ナンパとは、な、なんじゃい！ しとらんわい！ そんな事……。どこか適当な所において置けばよい！ 後で選別するに」

「ああ、さいでつか」

「じゃあ、僕はこれで……」

「ま、まって……姉様！ ミカ！ ちょっと来てたも」
キュポアはこの青年に何か高貴なものを感じ取った。

「なあに？ キュポア？」

「どうしたのキュポアちゃん？」

「こちらはハルマ・イコナ氏。わらわの恩人じゃ」

「じゃあ、昨日キュポアを助けて頂いた……？」

「いや、そんな助けただなんて。僕はそんな大した事はしていませんよ」

「姉様、ミカ、このお人、足りない男子のホスト役になりえんかの

う？ どこか貴公子然として、使えると思うのだが？」

「そうね……そう言われて見ればどこと無く気品が見受けられるわ」と、言ったのはミカだ。

「畏れながら、どこかの国の尊いお方のご子息であられますか？」と、アーチェルが訊いた。

「いいえ」

「そんなことは、どうでも良からう？ 眼目は使えるのか？ 使えるのか？ どっちなんじゃ？」

「この方なら、良さそうだわ。落ち着いて鷹揚おうようとしているし。早速衣装合わせをして見ましょう？」

衣装合わせしてみて、ハルマはその貴公子ぶりを遺憾無く發揮した。

スーツを合わせてみると、きりっとした美青年となった。

その姿に、キュポアは目が離せなくなっていた。

その様を見ていたサクラコははっとなり、

「畏れ多くもあなた様は……」

そう言いかけたが、ハルマが指を口にあて

「誰ぞと間違えているようだ。僕はハルマ・イコナ。良いですねサクラコ嬢」

と、言った。

ハルマは良い男だったので、次々と女子が群がり、ハルマの周りに人だかりが出来ていた。

それを見ていて、キュポアは面白くなく、

「がー！ーっ！！ お前ら仕事はどうした！？ 働け働け！ 散れ散れ！」

女子どもを蹴散らしてしまった。

「ミカよ。ハルマは、当日までこちらの力仕事で使うが良いか？」

「まあ、いいでしょ。ハルマ君それで良いでしょ？」

「ええ、構いません」

「と、ところで……ハルマぐらいの器量だったら……ほ、他の女子が放って置かないでじゃろうに……今までどうしていたのじゃ？」

キュポアが疑問に思う。

「器量が良いかは別にして、女子が放って置くも何も、昨日編入されたばかりでしたからね。僕は」

「そ、そうか……」

キュポアは、何故かその言葉に安心感を覚えた。

「じゃ、じゃあ早く着替えて、仕事を手伝え。おっと、結構、汚れるからな。自分の部屋に戻って体操着などに着替えて来ると良い」

「はい、分かりました。キュポアさん」

そう言われた時、キュポアは多少の動揺をし、なぐりで指をしたたかに打った。

「~~~~~!!!!!!」

「どうしました？ キュポア嬢」

「なんでもない。なぐりで指を打っただけじゃ」

「そうですか。そうだお昼ご一緒にしませんか？ ここの学食、まだよく分からないので、教えてください」

「そ、そうじゃな。お、教えて進ぜよう……」

何故かキュポアが耳まで真っ赤になって答えた。

ジャージー姿で現れたハルマは早速キュポアの元に行き、

「キュポアの親方、あっしは何をいたしやしよう？」

と、おどけて訊いてきた。

「ん！ おめえは俺っちの元で俺っちを手伝っている。良いな？」

「へえ！」

などとおどけていた。

「みんなあ、今日中に壁と土台の固定をしてしまうのじゃ！ 気合入れていけ！」

キュポアは叫んだ。

大道具関係は順調に転がり始めた、と、ミカは見ていた。

後は家具類の調達だが、それもノリトレアから調達済みである。
後は並べるだけだ。

逆に衣装係に一抹の不安が隠せないでいた。

メイドとフットマン衣装が足りないのである。

今はアーチエルが衣装を調達中との事だが……。

それまでは無駄な戦力を割きたくなかったので、ミカは賭けに出るつもりで全員をホスト・ホステス役の服を作らせていた。

衣装と言ってもアーチエルやサクラコ、キュポアなどは自前のドレスを改良するだけでよかった。

問題なのはリィナとミカでそれぞれアーチエルとサクラコのお古を改良していた。

男子ではレンヌが民族衣装に身を包み、後は皆スーツの仕立てに女子総出で頑張っていた。

そのお陰でどうやら七割がた完成に近付いていた。

残り四日半。何とか全てが整いそうだった。

「キュポアさん。丁度区切りが良いですし、お腹がすいたので食堂行きませんか？」

「うむ。そうじゃのう。いこか」

キュポアは、食券の券売機に行き、好きなメニューの食券を買うと、それを食堂のおばちゃんに渡し、暫く待っていると、そのメニューが出来てくる所までを、ハルマに教えていた。

ハルマもそれを真似て買ってきた。

きつねうどんであった。

「おぬし、もうちょっと豪勢なものを買えば良いのに」

ハルマはそんな事、聞こえもしないようで、

「見てください！ 買いましたよ。買いました！ 僕にも出来た！」

「うんうん、わかった、わかった。後ろが支えているからな。こっちにおいで」

キュポアたちは料理受け取り口から離れて行った。

「僕、感激だあ」

「おまえよっぱどのボンボンだのう。故郷^{くに}はどこじゃ？」

「イーハンです。イーハンの貧乏御家人の三男坊です」

「それで、こう言う物に慣れていない訳か。納得じゃ」

「貧乏御家人の三男坊で、は国王様に謁見できるはずも無く、庭に野菜を植えて野良仕事。時には口入屋に行って危ない仕事も致しました」

「ぐすっ」

「父は毎日飲んだくれ、母に当たる始末。こんな暮らしから抜け出せないものかと思い、一念発起してスコラに留学したわけです」

「貧乏御家人がよくスコラに入学できたのう？」

「奨学金制度を使いました」

「そうか。ぐすっ。お主、苦勞しておるのじゃのう……ぐすっ。それできつねうどんか。さっきはそれとは理由も知らず、相すまなんだ。ううっ」

「そんな、キュポアさん、泣かなくても……」

「いやな。わらわも似た様な境遇ゆえ辛さが分かるのじゃ。貧しい国故な、わらわも野良仕事をしたモノよ」

「そうでしたか。さ。食べましょう？冷めまする」

「うう……そうであるな」

ハルマは口は悪いがこのキュポアと言う少女に好感を持ち始めていた。

反応が素直なのだ。

そういうキュポアもこの青年に心惹かれつつあった。

どこか、優しい時のアシユマを髣髴させるモノがあったからだ。

そしてキュポアは心の片隅に棘が刺さるのを感じていた。

一方、食堂の片隅で食事を採っている一組のカップルがあった。

リイナとレンヌである。

二人は重苦しい雰囲気の中、無言で食事をしていた。

この重苦しい雰囲気に耐えられなくなったかのように、レンヌが口を開いた。

「何か言えよ、リイナ。何か言いたいことがあるんじゃないのか？
それで僕の事を誘ったんだろ？」

「それはそっちなんじゃないの？ レンヌ？」

「なにを？ そっちが僕を誘ったから、何か話があるのかと思っ
てきてみれば、この振る舞い、許されざるモノがあるぞ！」

「何を言うか！ こっちはお前に気を使って話す場を与えてやった
というに、この分からず屋！」

「分からず屋はそっちじゃないか！ 僕のこの気持ちを弄んで！」

「何よ、私の気持ちも知らないで！ 私はあなたの言葉を待ってい
るのに！ ……ばか」

リイナは涙を流して席を立った。

「リイ……」

レンヌは席を立つタイミングを見失って、その場で中腰になっ
ているしかなかった。

リイナは普段立ち入り禁止になっている屋上で、一人手すりに頬
杖付いて涙を流していた。

「レンヌの馬鹿。こんなに好きなのに、なんで他の女に優しくす
るのよ！ 私と言う者がありながら……ばか。馬鹿馬鹿！」

「リイナの馬鹿」

自室でレンヌは呟いていた。

「君の事だけが、こんなに好きなのに、どうして分かってくれない
んだ……」

「それでね、メイドとフットマンの衣装が着くのが明日の朝なの」
アーチェルがアシュマに向かって言った。

「残り三日だな。大丈夫か？」

「大丈夫だと思います」

「メイドのマナーは？」

「『今』みんなに覚えてもらっています。」

アシュマとアーチェルが立ち入り禁止の屋上に来て二人して弁当箱を開いていた。

もちろんアーチェルお手製のものだ。

アシュマは、あっという間に平らげた。

「成る程。時間は無駄にしないわけだ」

「その通り」

「じゃあ、アーチェルなんかはマナーのチェックに、早く帰らなければならぬわけだ」

「もう、久しぶりの二人っきりなのに意地悪う」

ちゅっ♪

「じゃあ、わたし行くね？」

「ああ」

アシュマは視線を転じ……

「リイナか？」

アシュマの視線は遙か向うのリイナに向いた。

「リイナ」

アシュマは後ろからリイナの名を呼んだ。

リイナは振り返ったが、未だ涙を流していた。
それを隠そうともせず。

「リイナ……どうした？」

「アシュマか……なんでもない、帰る」

「なんでもないで済むか」

帰りかけるリィナの手首を掴んだ。

「あっ！」

掴んだリィナの手首はこんなに細くて華奢だったろうか？

「何を泣いていた？」

「何でもない」

「何でもないわけ無いだろ」

「痛い、離して！」

痛い？

たったこれだけの力で掴んだだけで？

アシュマは少し疑問に思った。

しかし、次の言葉がアシュマにそのことを忘れさせる。

「レンヌがいけないのよ」

「え？」

「……でって約束したのに」

「え？」

ぼそぼそ喋るリィナの言葉は、何を言ったのかアシュマには聞き取れなかった。

「教室に帰る」

「そうか。無理はするな」

「……………」

アシュマは夜の巡回に出ていた。

昨日の今日と言うこともありえる。

アルステインもいる。

用心に越した事は無い。

案の定、アルステインのサイコ・フライヤー『紅龍』の周りに黒い人影が群がっていた。

警備のものは今はいない。

どこへ行ったものか。

剣戟の音が聞こえる。

『紅龍』の中からだ。

(アルスティーンが襲われている!?)

外にいる黒い人影がアシュマに向かって突進してきた。

アシュマは居合い宜しく胴体を陶物斬りにした。

「!？」

アシュマは斬った感触からこれは人間ではないと推察した。

「マシンナリービーイングか」

アシュマはそう断じた。

敵の数は外にいる分だけで凡そ二十。

アシュマは相手が人間で無いと知るや、敵を斬って斬って斬り捲った

相手を袈裟に斬り次の者は逆袈裟に斬り次の者は頭蓋を拝み打ちに斬り割り……。

粗方外にいる敵を葬ると、次はサイコ・フライヤー『紅龍』の内部に侵入した敵を掃討する番だった。

アシュマは後部ハッチから内部へと侵入して行った。

中では団子状態で警護の者と黒い人影の者が剣戟を繰り返していた。

「アシュマ・アトーであるっ！ 不埒を働く奴はどいつだっ！」

劣勢気味だった警護の者を無視して、黒い人影の者はアシュマに襲い掛かる気配を見せた。

中にいる賊は凡そ十体。

賊が動き出す前にアシュマは動き出した。

胴を存分になぎ払い、次に頭蓋を断ち割り、逆袈裟に切り上げて、袈裟に斬り……。

賊は見る見るうちに数を減らし残るは一体となり、じりじりと包囲の網により追い詰められて行った。

アシュマは、ふと賊の虚を突き、頭の頂点から臍の下までを斬り割っていた。

「アルステイン！ 無事かッ!?」

「大じよぶですよ」

「王妃も無事か？」

「大丈夫よアシュマ。でもあなたに王妃と呼ばれるのは少し違和感があるわね」

エファール王妃がそう言った。

「じゃあ、このサイコフ라이어から『脱出』しよう」

「『脱出』？ あなたが全て倒したじゃない？」

「相手はマシンナリービーイングだ。自爆する恐れもある。みんな俺の側に来い。俺の念導境界面ならちよつとやそつとの爆発など屁でもない」

が、マシンナリービーイングどもは爆発する気配は見せず、無事アルステイン王とエファール王妃は脱出できた。

「現場検証が必要だな……また、オロのところにでも頼むか」

「鑑識要員なら、うちの鑑識が資材運搬船と共にやって来ていますよ？」

「また、先読みのアルステインか……」

「オロの所だけに任せるの嫌だったんですよ。何か隠匿されそうな気がする」

早速アルステイン配下の鑑識がやって来て、現場検証を始めた。まだ、もぞもぞとうごめく、マシンナリービーイングなどもいたが、概ね現場検証は終わった。

第三節 学園祭 Ⅱ当日Ⅱ

「まあ。一昨日について、今晚も？」

ミス・ケリー・サトウは驚いた。

「ええ。つきましては校長に、マシンナリービーイングの解剖に、立ち会っていただきたく……」

そうアシュマは言った。

「こんなおばさんが立ち会っても、何か分かるものなのかしらね？」

「何か分かるかも知りませんよ？ とりあえず行きましょう」

「ええ」

アルステインの資材運搬船の中は、もちろん資材の運搬をする船なのだが、司令部や兵士の待機所、武器庫などがあり、資材運搬船とは仮の姿、アルステイン直属の動く作戦発令所がその正体だった。

もちろん鑑識課も備えており、いま司法解剖を行うところであった。

「彼、大丈夫かしら？」

と、案じたのはエファールで、『彼』と言うのはこれから執刀を始める法医学者に発した言葉である。

なにせ、自爆を起こしかねないマシンナリービーイングと聞いたからである。

「大丈夫だ。彼は特級念者で魔導石を持っており、尚且つシールドの魔法も掛けている様だからな」

「そうなの？ 良かった」

エファールが安堵の表情を浮かべる。

『アルステイン陛下。これから始めます』

「うむ。始めてくれ」

執刀医のメスが走る。

執刀医とアシュマ、アルステイン、エフアール、ミス・ケリー・サトウとは厚さ五センチの超硬質ガラスで隔てられていた。

『陛下、矢張り腹の中に爆弾がありました』

「そうか。……何故爆発しなかったのか？」

『信管につながる導線が断ち切られています』

「それにしても他のマシンナリービーイングが爆発しなかったのが解せん。そのところはどうか？ アシュマ君？」

「基本的に頭蓋を断ち割るか、胴体を両断するように心がけたからな。それが上手く働いたのかも知れん。念のために全マシンナリービーイングの腹の中の爆弾を取り除く事をお勧めする」

「わかった。アシュマ君」

早速それは行われ三十体のマシンナリービーイングから爆弾が取り除かれた。

『へ、陛下……』

「なんだ？」

「こ、ここに……こ、刻印が……」

「刻印？ どんな？」

「メ……メイド・イン……オロ・エバス……」

「なんだと!？」

オロ・エバス。

それは先の七賢人紛争で直接七賢人に対抗した大富豪。

全世界の五パーセントもの資産を有しているとも言われ、アルステインの具体的作戦行動を、資金的、政治的に支援した人物である。

いわばアルステインの盟友の筈。

それが何故アルステインの暗殺などを画策したか？

「これは、一昨日のゴキブリもオロの画策か？」

「しかし、何故……」

アルステインが指の爪を噛んでいた。

「その癖はお止めなさい」

エフアールが言った。

「これは、オロに、直接訊かないといけないな」

「デリケートな問題よ？ ヨデイ。細心の注意を払ってね？」

「分かっているよ、エフアール。……アシュオンはもうお眠かな？」

「ええ。眠っているわ。さっきの戦いでも眠っていたわ。たいしたものよ」

「そうか」

息子の前では子煩悩な所を見せる、アルステイーンとエフアールであった。

アルステイーンは、警備の者、七人の死傷者を出した惨劇のあった、『紅龍』で自分の携帯端末でオロに連絡を入れた。

オロ直通の番号だ。

『はい、オロだ。誰だ？ 私は寝起きで機嫌が悪い』

「僕も機嫌が悪い。何故僕の命を狙った？」

『アルステイーンか？ 何の話だ？ 私は知らんぞ？ そんな戯言で、私の眠りを妨げるのなら切るぞ』

「僕を殺しにやって来たマシンナリービーイングに、メイド・イン・オロ・エバスの刻印があったよ」

『下らんな。そんな刻印、幾らでも、でっち上げる事が出来るだろう？ そこまで頭が回らなかったか？ 剃刀アルステイーンも切れが鈍ったか？』

「……信用して良いんだな？」

『何を馬鹿な事を』

「わかった」

アルステイーンは携帯端末を切った。

「いいのか？ 信用して？」

アシュマが言った。

「ああ……。今は信じるしかないと思う……」

「そうか。で、オロで無いとしたら、どこの勢力だと思う？」

「可能性があるとしたら、アヘイビア」

「目的は？」

「ノリトレアとオロ・エバス国を戦わせ、国力を削り、漁夫の利を得る、と、言ったところですかね？」

「成る程ね」

「アシュマ君は、どう思う？」

「俺か？ 俺はオロが臭いと思っている」

「そうですか」

「とりあえず、今日はもう寝ろ。夜も更けた」

「分かりました」

「何かあったら連絡くれ」

「オルバニアンとアルミナさんには、連絡しておきましょう」

「そうだな。アーチエルには知らせないでおこう。余計な心配をかけたくない」

「分かりました」

朝、サイコ・フライヤー、黒龍が戻ってきた。

ミカのクラスの生徒が、早速、メイドとフットマンの服を、受け取りに行く。

「凄いよ、これ！ 殆ど新品よ」

「ああ、これなら私にぴったり」

「凄いわね二百着ぐらいあるかしら？」

「とりあえず被服室に持って行きましょう？」

女子たちが騒ぐ。

男達は、その剣幕におされ気味だった。

ミカのクラスの女子たちは、二百着近いメイド服を持って行った。メイド役と言っても、精々十二〜三人ほどの人間が着る程度なの

だ。

大抵の体型ならば、合う物があつた。

しかし二百着ものメイド服をよくもまあ、集めてあるというか取つてあるというか、どういう事かとミカは訊いてみたくなった。

「アーちゃん、この大量のメイド服は一体何？」

「うーん、ここ十年ぐらいで、うちのメイドを辞めていった人達のものかしら。辞めたっていつでも、大抵はお嫁さんになって、辞めていく人が殆どね。後は年齡的にお仕事がつらくなった人の物とか」

「ふーん。面白い例では？」

「武道に目覚めて、武者修行に出ちゃった人とか？ それは男の人だけ」

「ははは……名前は？」

「ティマルメ・ナギタ……」

「よく覚えてるわね」

「記憶力が良いのは、私のとりえですもの」

兎にも角にもメイドとフットマンの洋服は揃つた。

今日はシャンデリアを飾る予定だった。

これも、ノリトレアの中央大塔跡地から持って来た物だった。

これは全くミカの先見の明で、これを抑えていたわけであった。キュポアが何かを口やかましく言っていた。

「そこ！ 角が当たっておるぞ」
だの

「そこ、ゆっくり曲がれ」

だのと、キュポアが号令を取る。

「全く、うちの男どもは……」

キュポアがぼやいていた。

「アタシヤ女なのに」

アルミナが、これまた、ぼやいていた。

全重量百五十キロのシャンデリアだ。

男手八人で持ち上げている。

シャンデリアを滑車で、ゆっくり……ゆっくりと吊るして行く。
そして固定。

「ふうふう、これで一仕事終わったわい」

キュポアが一息つく。

「キュポアさん、やりましたね」

「おお、ハルマか。学園に入りたてなのに良く頑張ってくれた。礼を言う。有難う」

「でも大道具係はまだ家具の搬入が……」

「それも午後で終わるじゃろう。したら大道具係で、前祝じゃ」

「良いんですか？ そんなことをして」

「悪いことではあるまい？ 皆にそれなりの重労働を強いたのじゃ。指揮者たる者これをねぎらうのが務めじゃろう？」

「まあ、そうですね」

「ただしアルコールは抜きじゃぞ？ わらわが呑めんな」

「ははは。そうですね」

ハルマは、笑いながらキュポアに、微笑を向けた。

キュポアはそれを見て、急に照れて、赤くなって明後日の方を見た。

そして、

「ハ、ハルマ。あとで、前祝の飲み物を一緒に買いに行くぞ。つ、付いて参れ」

そう言った。

キュポアは、何故か、アシュマの微笑と、ハルマの微笑を、重ね合わせて見ていた。

全然違うタイプなのである。

ハルマは春の日のような、暖かくまさに陽の人物である。

アシュマはどこかに、影のある陰の人物。

それなのである。

「はい」

今もハルマはキュポアに微笑を向けている。

キュポアは目の置き所がなくて、キヨロキヨロと視線を泳がせていた。

「そ、その前に昼ごはんじゃ！ ハルマ、ついて参れ」

「はい、キュポア様」

アーチェルとアシュマは、珍しく食堂に来ていた。

「気分転換もたまには良いだろ？ アーチェルの負担も減るし」

「あら？ わたくしはお弁当作り如きじゃ、音を上げません事よ？」

「そうか？」

アシュマが受け取り口から食事を受け取る。

「うそ。ほんのちよつと助かつちやった。御免ね、アシュマさま。

気を使わせちゃって。有難う」

「いや……」

アシュマが照れて視線をめぐらせるとキュポアを見つけた。

見慣れない青年と一緒に食事を採っている。

「キュポアが、男と話しながら、飯食ってる」

「え？」

「あそこ」

「あ、本当……あら、ハルマ君だわ」

「ハルマ？」

「ええ、あの方が、キュポアを助けてくれたお方。邪魔しちや悪いわ。どこか、離れた席に着きましょ？」

しかし折り悪く、座れそうな席が見当たらず、席は全て埋まってしまっていた。

「仕方ない。キュポアのところに、合い席させてもらおう」

そしてアシュマとアーチェルはキュポアとハルマの席へ来た。

「キュポア、お楽しみの所御免なさい。どこも席が一杯なの。合い

席させて？」

「ね、姉様……」

「ええ、良いですよ」

答えたのはハルマだった。

「じゃあ、失礼して」

「じゃあ、俺も失敬」

アーチェルはキュポアの隣に、アシュマはハルマの隣に座ってしまった。

「怪獣……」

キュポアはそう言ったきり、どこかばつが悪そうにして俯いてしまった。

「あら、キュポア急にどうしたの？ 喋らなくなって。さっきまでは、あんなに楽しそうにしていたのに」

「べ、別にわらわの事はどうでもよかる？ いつもみたいに怪獣と仲良く話しておれば、良いではないか！」

「あら？ ご機嫌斜めみたいね。お邪魔だったかしら。やっぱり」

（邪魔じゃわい）

「あの宜しいですか？」

ハルマが口を開く。

「なあに？ ハルマ君」

「『怪獣』と言うのはこのお方のことでしょうか？」

「こつ、こらハルマ、何て事を言うのじゃ！」

キュポアが慌てる。

「ハルマ君と言ったかな？」

アシュマが口を開く。

「はい」

「いかにも俺が『怪獣』だ。これで満足したかな？」

アシュマが少しおどけながら答えた。

「はい。なぜ怪獣なんてあだ名なんですか？」

「それは、それ、そこにいるキュポアが……」

「わあああああああああっ!!」

いきなりキュポアが大声を出した。

周りは何事かとざわついて、こちらを見る

「こ、これ! キュポア。はしたない」

アーチェルが恥かしがり、キュポアを叱って、俯いてしまった。

「まあ、いい。とり合えず飯を食おう」

「ええ」

アーチェルは言ったがキュポアは、アシュマとハルマを交互に見ては溜息を漏らし俯いて食事には殆ど手を付けなかった。

いや、手を付けられなかった。

結論から言ってしまうと、キュポアはハルマに好意を抱き始めていた。

そこへアシュマが登場した。

以前恋焦がれた男である。

二人を並べて、キュポアはどういう反応をして良いのか、分からなくなったのである。

「キュポアさん、少しでも食べましょう? 午後だって、それなり

に忙しいですから」

「わ、分かっておるわい!」

「あ……」

「え……」

キュポアの意外な剣幕にハルマは圧倒され、キュポアはそれを悔いた。

「す、済まなかった。わらわを氣遣ったの言葉じゃったな。……ごめんなさい」

「いえ、こちらこそ差し出がましい口ぶり、どうぞお許し下さい」
ハルマは頭を下げた。

「あ、頭を上げてたも。悪いのはわらわのほうじゃて。そなたに罪は無い」

そんなやり取りを聞いているうちに、アシュマとアーチェルのほ

うが、先に食べ終わってしまい、
「ご馳走様。御免なさいね。変に割り込んじゃったりして。ではご
ゆっくり」

アーチェルが、そう言って二人は消えた。

「キュポア、あの人に恋してますわね」

アーチェルが断じた

「そうなのか？」

アシュマが訊く

「一目瞭然ですわ」

アーチェルは、何を言っているのかこの人は。
と、思いながら言った。

誰が見ても先程の態度は、そうであろうとそう思っていた。

「鈍感でいらっしゃるのね？」

アーチェルが少しおどけてみせた。

「そうか」

アシュマも少し得心がいったところが有るのか、

「薄桃色の気の色と言うのは人が恋するときの色だったか……気が
付かなかった」

アシュマは言った。

「私の気の色は？」

アーチェルが訊いた。

「濃い桃色だ」

「嬉しい？」

「ああ」

「私も嬉しい……」

アーチェルは手を握ってきた。

いまだに恋人気分の夫婦であった。

午後、細かい家具類や観葉植物などの搬入が行われた。

これの陣頭指揮を執ったのはミカだ。

全体的な雰囲気を決める大切な仕事だ。

「そのソファはこっちに置いて」

とか

「そのテーブルはこっちに置いて」

などと、指揮を執っている。

大体のレイアウトも決まったようだ。

ミカのクラスの教室は退廃的な気だるさが漂う中世の王宮のような趣となった。

「みんな、手を止めて！」

ミカが叫ぶ。

裁縫係などアーチエル達が、手を止める。

「大道具係がこれで前半の仕事を終わりました！ 裁縫係や食品係の皆はまだまだ仕事が残ってますが、とりあえず、おめでとうと言うことで、乾杯をしたいと思います。皆さん飲み物を取ってください

……………」

皆は、キュポアとハルマが買って来た、ソフトドリンクを手にした。

「それでは、これから気を引き締めて、頑張っていきましょう！

乾杯！」

「乾杯！」

皆は仕事の一区切りに安堵し、これからの仕事の追い込みに闘志を燃やすのであった。

茶葉も来た。

菓子も揃った。

ティーカップなどのティーセットも揃った。

衣装も揃った。

後は立ち振る舞いの練習だがこれも何とかなりそうだ。
前評判も高い。

そして、スコラ学園祭初日……。

「「「いらっしやいませー!!」」」

メイドが左右に並び客を圧倒する。

そしてその奥には煌びやかに装飾された美男美女がいた。

「どの、プリンス、プリンセスをご所望ですか？」

「プ・プリンセス・アーチェル・アトーを」

「畏まりました」

アーチェルを指名したその青年は見た目は爽やかそうな好青年だった。

そんな青年でも、

「お待たせいたしました。アトーです」

と、言われると、憧れの君を目の前にして頭の中が真っ白になり、

「きよ、今日は良い天気ですね」

などと、明後日の話題を振る始末。

が、アーチェルはそんな話題でも

「ええ。ほんとうに良い天気ですね。こんな日はお外でお茶でもしたらおいしく頂けそうですね。そうそう、何かお飲みになりますか？」

そう返してくれる。

嬉しい限りだ。

「じゃ、じゃあアールヌー・ティーとレア・チーズケーキを」

「どの、プリンス、プリンセスをご所望ですか？」

「あ、あの、プリンス・レンヌ様を」

女性陣四〇五人が押しかけた。

「じゃあ、向うのカーペットで車座になって、お話しをしようじゃないませんか」

レンヌは、向こうのカーペットに行き、車座となって、女性陣の輪の真ん中であって、話を始めた。

それを見ていたリイナは面白くなかった。

「どの、プリンス、プリンセスをご所望ですか？」

「プ・プリンセス、リイナを……」

「……ほう、私を所望と申すか。殊勝な奴よ」

こちらのほうも複数人が車座になり話に花が咲いた。

それがわざわざレンヌの隣だ。

明らかにレンヌを意識しての事である。

レンヌは少し『むっ』としたがそれを無視してホスト役に徹していた。

リイナはそれに少し悲しくなったが、そんな事は少しもおくびに出さず、ホステス役を勤め上げた。

キュポアは、それを快く見てはいなかった。

まるで、冷たい戦いのようだと、思っていた。

「なに、わらわを所望とか」

「はい、ミス・キュポアお願いいたします」

「よし、ちっと揉んでやるかのう」

学院内ではアーチエルが居なくなつた後、リイナと並んで人気を二分していたのがキュポアであった。

しかし当の本人は、そんな事はつゆ知らず、のっしのっしと歩い

て行った。

「おぬしらか？ わらわと話したいと言うのは？」

「はい、キュポア様」

「キュポア様は、どなたかと、お付き合いをしていたり、しているのでしょうか？」

「バカ！ お前直球過ぎ！」

「よいよい。ハッキリしているのは、わらわの好む所。何でも訊くが良い」

「好きな方はおられるんですか？」

「ううっ。それは辛い質問じゃのう……」

そう言って視線がなぜか、ハルマのほうへ向く。

「どなたか居られるんですか？」

「それはわらわのプライベートに属する所じゃ。言うに言えん」

「おい、キュポア様ハッキリ答えないってことは、好きな方が居るってことだぜ」

「ううう。おれのキュポア様があ」

「まあ、まてまて、好きなお方と言うのはおらん！ この三日間は、わらわは皆のキュポア・アップルトンなるぞ！」

その、キュポアの視線が泳いだ先にいた、ハルマ・イコナは、

「きゃあ！ あの、お美しい方は誰？」

「あんな綺麗なお方スコラに居たかしら？」

「なんていうお名前なのかしら？」

「ハルマ・イコナと言うらしいわ」

「まあ、お名前までお美しいわ……」

「あの方を指名しましょう」

「そうしましょう……」

……と、皆の人気をさらい始めていた。

「えっ？ わたくしですか？」

「ええ。お願いします。ハルマ様」

オルバニアンや、ジーク、ミカやサクラコも指名され、概ね滑り出しは順調のようだった。

ミカはジークと婚約しているのだが、それを知っているのは、ごく僅かなものだけだったので、口説きに口説かれまくった。

相手が平民出だと言うところに、つけ込まれたのことだった。だが、そこはそれ、上手くのらりくらりとかわしてしまった。

アシュマが来た。

審査員として採点に来たのだ。

「なんだ、随分と退廃的だなあ。健全な運営を、しているんだろうなあ？ サケは駄目だろう？」

そう言いながら採点ボードに何かを書いていく。

「アシュマさま、それ採点ですの？」

アーチェルが受ける

「そうだよ、アーチェル」

「点数甘くしていただけませんか？」

「だーめ」

「皆でサービスしますから」

「なんだか、いかがわしいな。俺に色仕掛けは通用しません」

「もう！」

「何だ？ 『色仕掛け』の意味が分かっているのか？」

「いえ？ 何でしょう？」

「うん、知らなくて宜しい。ではな」

「アシュマさま、明日はフリーなんでしょう？」

「ああ」

「それでしたら遊びに来てくださいな」

「分かった」

アシュマは、

(中身はキャバクラとなんら変わらん)
そう思った。

こうして、怒濤の一日目が終わった。

「ふう。疲れたわあ」

ミカが漏らした。

「誰よこんな企画考えた人は？」

「あんたよあんた」

エミルがミカに言う。

「ミカではないが、ほんと疲れたのう。客商売は大変と言うが、その通りじゃのう」

キュポアも漏らす。

「校長の採点の時間が一番緊張したぜ」

オルバニアンが言う。

「緊張って顔？ 女の子に囲まれて、へらへらしてただけじゃない？」

アルミナがやかみ半分、揶揄して言った。

「自分だって『メイドさんは、ご指名できないんでしょうか？』って訊かれて、その気になつたくせに」

「それ、明日からOKにするわ。お客さんの要望第一なもの」

「かーっ何でもありになってきたな？ ミカ」

その時、

『アーチェル・アトーさん、キュポア・アップルトンさん。至急校長室まで出頭してください。繰り返しです……』

放送が入った。

「またか？ 今度は何ぞえ？」

キュポアがげんなりとして、悪態をついた。

「まあまあ、キュポア。とりあえず、行って見ましょう？」
アーチエルが妹を取り成した。

コンコンと、アーチエルが校長室のドアをノックする。

「アーチエル・アトー、キュポア・アップルトン出頭いたしました」
『お入りなさい』

中から声がした。

「失礼します」

中へ入ると、校長、ミス・ケリー・サトウとアシュマがいた。

（姉様これはまた見合い話かろう？）

キュポアは声をひそめてアーチエルに尋ねた。

「これ。はしたない」

アーチエルは妹を窘めた。

「そう、その通り。見合いの話した」

アシュマが言った。

「地獄耳は健在じゃあ」

キュポアは言った。

「義兄上と電話がつながっておる。とって話すが良い」

「……なんで、携帯端末を使わんのじゃ？」

「話上そういうわけにも行くまい？」

「エースティー兄様？　キュポアじゃが？」

『おお、キュポアか。実は残念な事があつてのう』

「残念？」

『うむ。先方から、見合いの話を、一時見合わせて欲しいとの通達があった』

「おお、それは残念じゃのう！！」

キュポアは言ったが、内心は小躍りするくらい嬉しかった。

『何でもはやり病にかかったらしくてのう。静養までに三月ほど掛かるそうだ』

「それはそれは。まことに残念！　兄様、くれぐれも、お体を労わってください、とお伝え下さい」

『うむ。伝えておこう……お前喜んで無いか？　キュポア』

「そんなわけなからう！？」　兄様」

『では、そんな訳で宜しく頼むぞ。見合いの話しが、流れたわけではないからな。キュポア』

「んが！！」

『『んが！！』とは何だ？　『んが！！』とは。まあいい。お前も、身体に気を付けるのだぞ？　アーチエルに代わってくれ』

「はい、姉様。兄様からじゃ」

「はい、アーチエルです」

『エースティーだ。息災か？　と言ってもほんの四〇五日程度で息災か？　無いもんだ。キュポアは皆と打ち解けているか？　息災か？　我俣放題してないか？』

アーチエルは思った。

この兄は、一番末の妹の事を案じており、可愛く思っていることを。

また心配もしていることを。

「兄様。大丈夫に御座いますよ。万事宜しくやっております。ご安心を」

『そうか……。お前にも苦勞を掛ける。済まなんだ』

「いえ、何の事がありましたら。苦勞など致しておりますせぬ」

『そうか。以上だ。では切るぞ？』

「はい」

こうして、兄エースティーとの会話を終え、アーチエルとキュポアは校長室から辞去してきた。

アーチエル達は自分たちの部屋へと帰って行った。

学園祭初日は午後六時で終了した。

皆、クタクタで誰も食事を作る気が起きなかった。

なので、皆で食堂に行こうということになった。

「はぁ、疲れたよ」

「そうよねえ。ミカさんの場合、全体見ながら接客もしなきゃならなかったもんねえ」

サクラコがねぎらう。

「よし。今日はワタクシが皆に奢っちゃうわ！ 何でも好きな物を選んで頂戴！」

「やった！ サクラコ様！ 太っ腹！」

「エミル！ アンタはそんなところばかり……」

「ミカよ。それは言いっこ無しじゃ」

キュポアが閉めた。

「なんじゃ、リィナ。お主、静かじゃのう」

「私は元々無口だ。ほっとけ」

「昼間のアレか？」

昼間のアレとは、勿論レンヌとリィナの双方で、密かに、冷たい戦いをしていたことである。

周りの人間は気が付いていなかったようだが、キュポアには分かった。

「昼間のアレとは何だ？ キュポア」

「………いや、いい。何でもない」

「気持ち悪いな、途中で止められると……言え、何だ？」

「ならば言おう。昼間、喧嘩してたであろう。お前、レンヌと」

「何のことだ？ 知らんぞ？ 私は」

「そうやって意地を張る」

「いや、もう、レンヌの事なんかどうでも良いのだ。だから……」

そう言ったのは食堂の出入り口で、何とその言葉を、丁度食堂から出てきたレンヌに聞かれてしまった。

「！！」

暫くレンヌは立ち尽くしていた。

「レ、レンヌ……」

リイナも驚愕の表情でレンヌを見ていた。

「ふ」

諦めにも似た表情を見せて、レンヌ王子はそこから歩き去ってしまった。

「あら、レンヌ王子？」

アーチエルがその名を呼んだが、レンヌはぴくりともせずにとぼとぼと歩いて行った。

「レンヌ……」

リイナは呟いて茫然自失となっていた。

「馬鹿！ 何をしておる！ 追いかけんか！！ レンヌを！！」

キュポアが叫んだ。

それに弾かれるようにリイナが走った。

「レンヌ！」

リイナが走りながら叫ぶ。

レンヌが走り出す

「レンヌ待つて！！」

リイナが全力で走り出す。

リイナが全速力で走れば、レンヌなど直ぐに追いつく。

案の定直ぐに追いついた。

だが、そこでレンヌはリイナに、氷のように冷たい言葉を発した。

「僕の事なんか『どうでも良い』んだろ？ なら追いかけてくるなよ！」

「レンヌ、聞いて！ あれは本心じゃないのよ！」

「どうだかね。何気ない一言に、人は本心をもらす事だってあるからね。それに、僕ももう君の事なんか『どうでも良く』なったよ」

「御免なさい。御免なさい！ 御免なさい！！ もう二度といわないから！！」

「言う、言わないの話じゃないんだよ。気持ちの問題なんだ。さよな……」

「待てい！！ その言葉は吐くなあ！！」

キュポアが割り込んだ。

「その決定的な言葉は出すでない！ きっと後悔するぞ！！」

「キュポアさん……」

「キュポア……」

「お主ら、別れ別れになる事が本心なのか？ そんなに別れたいのか？」

「……………」

「……………」

「そうではあるまい。もっと自分の気持ちに素直になれ。そしてもっと相手を信頼してやれ。レンヌ、これからわたたちは食事じゃ。ちと付き合え」

「でも、僕は今出てきたばかりで」

「『チョコパへ』でも食うていたら良いじゃろう」

『おおくく』

周りにどよめきが起こる。

レンヌとリィナは、真っ赤になって、食堂のほうへ歩いていく。

「流石、名奉行」

ハルマが言った。

「ハルマ！ 何でお主、こんな所に……いるのじゃ……？」

そう言ってキュポアは照れた。

何故自分でも照れるのか、分からなかった。

リィナとレンヌは、皆より少し離れたところで、話をしていた。リィナとレンヌの話は、上手く行っているようで、時々笑うことさえ見てとれた。

上手い具合にいつもの取り巻き連中がいない事が幸いした。

久しぶりで自然体で笑うリィナとレンヌがいた。

問題（？）なのはむしろ、キュポアで眼の前にハルマが座り、一

緒に食事を探る形となった事だ。

キュポアとハルマの会話は最初、ちぐはぐで支離滅裂なものだった。

それを見かねた姉が、

「キュポア、そんなに慌てなくても、ハルマ様はちゃんと話を聞いてくださいますよ」

そう言ってくれた。

「わ、わらわは焦ってなぞ、いないぞえ。さ、さて、おほん！ ハルマ殿。出身地はどちらだったかな？」

「イーハンですよ。キュポア様」

ハルマはあくまでも、優しく、にこやかに、答えてくれた。

キュポアはそれだけで、嬉しくて嬉しくて、天にも昇る気持ちになった。

ハルマのほうも、こうも自分の話に目を輝かして聞き入っているキュポアに、好感を持った。

「じゃあ、また明日の！」

キュポア達とハルマ達が別れる。

皆、明日の為に自室に戻って、身体を休める。

アーチェルは、先程のキュポアとハルマの会話を横目で見ていて、改めて妹がハルマに恋をしていると再確認した。

姉の自分が言うのもなんだが、キュポアは男性に対する免疫が殆ど無いといっていい。

また、恋に恋する年齢でもある。

アシユマに対する、失恋の傷も癒えていないと言えば、そうかもしれない。

恋をするのが悪いというのではない。

キュポアが恋をするのに、相応しい相手かどうか見極めたい、と思っただけだ。

でなければ、キュポアはまた恋で失敗し、心に深い傷を作るだろう。

アーチェルは、それだけは避けたいと思っていた。

「それにしても今日は大変だったなあ。中には、付き合ってくれて言う人も、でてくるんだもん」

ミカが漏らした。

「それぐらい計算に入っていたのでは、なかったのか？」
リイナがベッドの上から言ってきた。

「それはそうだけど、あんなにしつこいとは思ってなかったのよ。その他は、高貴な人のように振舞うってのは難しいって事ね」

「そうだな、それは同感だ」

「なんじゃ？ わらわ達への当て付けか？」

キュポアが言った。

「いえ、そんな事無いのよ？ キュポアちゃん。」

「そうである。わらわたちとて苦労しておるのじゃ」

「でも私も緊張しちゃった」

「そうなの？ アーちゃん」

ミカが訊いた。

「うん、やっぱり人の前だと緊張しちゃうよ」

「アーちゃんでもそうなんだ」

「うん。ふあ……あふ。もう寝ましょう？ また明日があるから」

「そうね。寝ましょう」

こうして激務の一日目が終わった。

何事もなく……。

学園祭二日目。

「」「いらっしやいませー！！」「」

今日も今日とてメイドたちが客を出迎える。

今日は昨日以上に盛況だ。

だが一つ誤算があったのが、このロイヤル喫茶、回転率が悪いのだ。

また、好みで集客がバラける事も計算外の一つであった。

最早、人妻であるアーチエルが矢張り人気の大半を占めていた。

その他は横並び。

その、アーチエルの人気が裏目に出て他の女子の目当ての客が店内に入りきらないと言う事態に追い込まれた。

これではいかんと思ったミカは、急遽ローテーションを設定し、その時間だけアーチエルを店に出す事にした。

勿論他の皆にも休み時間を与えローテーションを組んだ。

「と、言うわけで、アーちゃんにはフリータイムが出来ました。次の時間は一時からだからそれまでに帰ってきてね？ お食事も済ませてきていいわ」

「先に御免なさい」

「いえ、いいのよ気にしないで。さ、だんなさまと学園祭を楽しんで」

「うん、有難う」

アーチエルは服を制服に着替えて教室の外に出てきた。

男子はと言うと、これも横並び。

だが、女性の扱いが丁寧と言うか、まめと言うか、ハルマが女子のリピーターを増やしつつあった。

アーチエルはアシュマを探していた。

アシュマは直ぐに見付かった。

廊下の端からこちらに向かってやってくる。

ただし、アシュマの取り巻き達が取り巻いていたが。

しかし、アーチェルはそんな事お構い無しに、輪の外から、

「だんな様」

と、呼んだ。

「アーチェル」

アシュマが言って二人は合流した。

すると、取り巻きたちは白けて、皆散り散りになってしまった。

「アシュマさま、もう採点は終わったの？」

「ああ、やっと今終わったところだよ。アーチェルこそどうしたんだい？　こんな所にいて良いのかい？」

「ええ。こうした方が却って回転率が上がるんですって。何か不思議」

「そうか。じゃあざっと見て回ろうか」

「はい。アシュマさま。お勧めってどこがあります？」

「ああ、先ずは露店だな」

「ろてん？」

「ああ。露店」

二人は校庭に出てきた。

確かに露店が、並んでいる。

露店と言うより屋台街に近い。

「お昼だ。お腹空いたろう？　ここで食べてしまおう」

「はい。……どれもいい香りがします。どこのを食べましょう？」

「ははは。ここの屋台街は、少しずつ取って行って、まとめて食べるんだよ。先ずはあのハルマキを打っている店に行つて……」

実際それを買ってみせるアシュマ。

「次にあそこの串焼き屋に行つて……」

二人で料理を買ってきて、ベンチに座る、アシュマとアーチェル。

「……で、ここで食べるわけだ。どうだい？　楽しいだろう？」

「はぐはぐ……んぐんぐ……はい！」

「美味しいかい？」

「はい」

その時、校庭の向こう側から、屋台などを壊しながら押し進んで来る者がいた。

「アシュマ・アトーはいるかッ！ ……ええいッ邪魔だ！！」

何か気に入らない事でもあるのか、その男は、屋台を次々と潰しながらやって来た。

「何が気に入らないのかは知らんが、生徒の屋台に手を出すのだけは止めていただくよう」

ゆつくりとアシュマは立ち上がった。

「誰だ貴様は？」

「ご所望のアシュマ・アトーだ。お前こそ誰だ？」

「ティマルメ・ナギタ……」

アーチェルが呟いた。

「知っている男か？ アーチェル」

「はい。以前家の屋敷で働いていた侍従です。武術に何か得るところがあったのか、国を出奔、以来行方知れずで……」

「行方知れずだあ？ 俺の事を知らんのかあ？ 俺はなあ今年のイルドリア武道大会で優勝しただけでなくドラスティス共和国主催の武芸大会でも優勝を果たしたティマルメ・ナギタその人だあ！ 覚えてるか！」

「忘れたな。そのアンタが俺に一体何の用だ？」

「ティマルメ・ナギタだ！ アシュマ・アトー！ お前に勝負を申し込む！」

「断わる」

「怖気づいたか、アシュマ・アトー！！」

「日と場所柄をわきまえろ」

「なんだと？」

「今日は学園祭だ。刃傷沙汰は御免蒙る」

「何が学園祭だ！ ふざけるな！」

「きやあッ！」

ティマルメ・ナギタは近くにいた女学生を捕まえ、脇差を抜いた。
「これならどうだ!？」

「見下げ果てた奴だ。そうまでして俺と戦いたいのか? 何故だ?」

「勿論、仕官のためだ」

「仕官? たかがそんな事の為に俺と戦うというのか?」

「そうだ」

「下らん」

アシュマは吐き捨てた。

「なんだと、下らんだと!？」

「ああ、下らんな」

「なにいつ!？」

ティマルメ・ナギタは脇差を女生徒に引き寄せた。

「いやあっ!!」

「それでも、俺と戦わぬつもりかッ!」

「仕方あるまい。その代わり女生徒は放せ」

「アシュマさま!!」

アーチェルが叫び声を上げる。

「アーチェルよ。あの生徒を見離すわけにも行くまい?」

「それはそうですが……」

「お前、女生徒を、放してこっちに来い!」

アシュマはティマルメ・ナギタに言い放った。

「そうだ、そう来なくてはな」

「俺はお前みたいな輩が一番嫌いだ」

「そうかい。褒め言葉だねえ」

アーチェルが数間離れて付いてくる。

「アーチェル、この男の剣士としての命を絶つ。構わないな?」

「わたくしも先程から吐き気がしておりました。どうぞご随意に」

「忝い」

「何だこの女は?」

ティマルメ・ナギタは不審に思った。

アシュマをして「忝い」と、言わしめた存在。

この女は一体何者なのか？

「貴方、主の顔も忘れたの？」

アーチェルが言った。

「何のことだ？」

「救われん奴だ」

アシュマが言った。

ただ広い、校庭の真ん中で、二人の剣士が立っていた。

すでに全校に、これまでの経緯が伝わっており、皆、アシュマを応援していた。

その中でこの人だけはこの対決を問題視していた。

ミス・ケリー・サトウ校長である。

校長は二人の対決を止めたが、これを止めることは出来なかった。

校長は、せめて、警察と救急車を呼んでおく事しか出来なかった。

「舞台は揃ったぜ。アシュマ・アトー。さあ、殺り合おうじゃねえか」

ティマルメ・ナギタは言った。

「……………」

「さて勝負だ抜きな」

「……………」

アシュマは鬼虎を抜いて峰に返し、珍しく刀を肩に構えた。

対してティマルメ・ナギタは正眼の構え。

二人とも微動だにしなかった。

いや、ティマルメ・ナギタは、足の爪先で地面を咬む様に、少し

ずつ前へ進んでいた。

（中々どうして出来る。二大武道大会に優勝しただけの事はあるな）
アシュマは相手が侮れない男と見て、気を引き締めた。

ティマルメ・ナギタは、徐々に間合いを詰めながら、正眼から上段へと、構えを移して行った。

気が充溢して行ったのか、ティマルメ・ナギタは、アシュマに上

段から斬りつけた。

アシュマは、ティマルメ・ナギタの刀を弾き、横から車に薙いだ。ティマルメ・ナギタは下から突いて来た。

アシュマはそれを摺り寄せ、かわし、鏢迫り合いになった。

これをティマルメ・ナギタは嫌い、離れ際に一手、小手を狙って咬まして来た。

アシュマはそれを読んで、鬼虎を弾いてそれをかわすと、片手打ちにティマルメ・ナギタの右手親指に、渾身の一撃を咬ました。ごきっ！

不気味な音が響いて、ティマルメ・ナギタの親指の骨は粉々に碎けた。

「うっ、ぎゃああああっ！！」

ティマルメ・ナギタは、大声で喚いて、その場にうずくまった。

「二大会優勝だけでも、仕官の口は幾らでもあったろうに。その指ではもう刀をまともに扱えんであろう。何処か、穏やかなところで、ひっそりと暮らすがいい」

アシュマが言って後ろを振り向いた時、

「おのれアシュマ・アトー！！」

ティマルメ・ナギタが左手一本でアシュマ目掛けて突いて来た。

「馬鹿が！」

アシュマは振り向きざま鬼虎を一閃させ、今度はティマルメ・ナギタの左手の親指の骨を砕いてしまった。

学園中が湧いた。

ティマルメ・ナギタは屈辱に塗れ、いつかこの借りを返すと心に誓った。

ティマルメ・ナギタは救急車に運び込まれてスコラから出て行った。

アシュマは

「ふう」

そう言って鬼虎を納めた。

「『ふう』ではありません『ふう』では。アシュマ先生、事の顛末を始めから終わりまで教えてください。ゆつくりと。校長室で」

ミス・ケリー・サトウが、厳しそうな目でこちらを睨んでいた。しまった。

と、思ったがもう遅い。

アシュマは素直に校長室に赴こうと思った。

「あ、アシュマさま、わたくしも聴取に……」

そうアーチェルがいい掛けたが、

「いいよ。大丈夫」

アシュマはそう言った。

「でも……」

「アーチェル。時間は？」

見ると時計は一時五分前まで迫っていた。

「時間など関係ありません」

「大丈夫だから行っておいで」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ」

「分かりました」

彼女はまるでシンデレラだった。

ただ違ったのは、彼女はガラスの靴を履いていない事だった。

アシュマは、無事一時間程で開放された。

警察も交えて事情聴取されたが、人を殺していない事、尋常な勝負であった事、相手は人質をとるような卑劣漢であった事などが考慮され、尚且つ生徒達の証言も概ねその通りであった為、アシュマにはお咎め無しと言う事になった。

アシュマが校長室を出てきたとき、校長室の前には、アーチェルが不安げにドアの前に立っていた。

「アシュマさま。大丈夫でしたか？」

「それは、こっちの台詞だよ。アーチエル、こんな時間にここにいて、店は大丈夫なのかい？」

「ええ、私はまた休み時間。今度は三時までに戻ってくればいいの」「忙しいシンデレラだね。アーチエルは」

「まあ」

アーチエルは頬を赤らめた。

「今度はどこに行こうか？」

「どこが宜しゅう御座いますか？」

「そうだなあ……」

二人は校内を歩いて見回った。

レンヌとリイナはローテーション休みに入った。

ミカが気を利かせて二人を一緒に休ましたのだが、一向に話が弾まなかった。

早速レンヌ親衛隊がやって来てレンヌを取り巻いてしまった。

ここで、いつものレンヌなら、

『いやあ、リイナ御免』

そう言っつて、なし崩しに、女子たちに連れて行かれてしまうのだが、今日は、

「御免なさい。皆さん。今はプライベートなので、そっとしておいて下さいませんか？」

そう言った。

取り巻き連中は、このレンヌの初めての反応にたじろぎ、レンヌが歩いていくのを見送るしかなかった。

レンヌはこの連中さえいなかったら、リイナともこんなこじれる事などなかったのに、

と思っていた。

いや、それ以前に己の不甲斐なさを、恥じていた。

不意にリイナが手を握ってきた。

レンヌがリイナを見ると俯いていた。
だが、どこか嬉しそうだった。

「リイナ」

レンヌがリイナの名を呼んだ。

「なあに？ レンヌ？」

機嫌は良さそうだ。

そんな時、今度はリイナ親衛隊がやって来た。

すぐさまリイナを取り巻き、レンヌを蚊帳の外にしてしまった。

だがリイナは、

「今は、私は、プライベートの時間だ！ 下がれ下郎ども」
そう言った。

『下郎ども』の言葉にレンヌは、はらはらしたが、その男連中は、
「はい、リイナ女王様、何かあればご用命下さい。あなた様の下僕
たる我等が、直ぐにも馳せ参じましょう」

「わかった。では散れ！」

「ははっ」

「随分と手なずけているんだね？」

「レンヌ、違うのよ。彼等が好きでああやって遊んでるだけ。あた
しには関係ないわ。私にはレンヌ、貴方だけ。だから独りにしない
でね？」

少し、レンヌは照れ

「分かってる。リイナ。君は僕のものだ。決して独りにはしない」
そう言ってレンヌはリイナの手を取った。

「屋台外に行ってみよう！ きっと珍品、珍味に出会えるよ？」

「うん」

二人は手に手を取って、小走りに屋台外へと向かった。

こんなに二人の気持ちが繋がったのは、久しぶりであった。

リイナは泣きそうになっていた。

いや、泣いていた。

それは自分でも気付いていなかった。

リイナはただ、今この瞬間、幸せを感じていただけだった。

「リイナ？ どうしたの？」

「なあに？ レンヌ？」

「そんなに沢山涙を流して……僕が何かしたかい？」

「本当だわ。こんなに涙が。ううんレンヌは何もしていない……いや、したわ」

「僕は君に何をしたんだい？」

「私を幸せな気持ちにしてくれた」

「……え？ え？？」

「好きよ」

耳元でレンヌに囁き、そこにキスをし、二人は屋台街へと行った。

今度はキュポアが、ハルマとローテーション休息に、入っていた。

キュポアは、ハルマに何を話して良いか、分からなかった。

そして、ただもじもじとするばかりであった。

「温かいですね」

ハルマは言った。

「へ？」

キュポアは、あまりの話の唐突さに、迂闊にも頓狂な声を上げてしまった。

そしてそれを恥じた。

「な、何が温かいのじゃ？」

「この陽気です。もう、晩秋に入ろうというのに、春の日の様な穏やかさではありませんか？」

「そ、そうじゃのう……」

キュポアはそう言ったが、

（温かいのはそなたの笑顔じゃ）

無意識にそう思った。

「外へ出てみましょうか。屋台街があるという話ですから。そこで

食事をしませんか？」

「おお。それは良いのう。わらわはそのような食べ物を、一度食してみたかったと思っていたところじゃ。行ってみようぞ」

「はい、キュポア様」

「よせよせ。『様』付けは。姉様ではないが、わらわは『様』を付けられるような柄じゃない。口はこのように生まれついてのモノじゃから、直すのは大変じゃが、中身はおぬしと同じ一人の人間なのじゃ。だから『様』付けはなしじゃ。良いな？　ハルマ」

「分かりました。キュポアさん」

ハルマはそう言って、キュポアに向かって微笑して見せた。

すると、キュポアは胸の動悸が激しくなり、顔が真っ赤になるほどのぼせ上がるのが自分で分かった。

「おや？　お顔が真っ赤ですよ？　キュポアさん」

「お主、結構意地悪いぞよ？　顔なんぞ真っ赤な事あるかあ。早くしないと、置いてゆくぞ」

キュポアはそう言って、早足に校庭に出て行った

「ああ、キュポアさん、待ってください。置いてゆかないで下さい」「しらんわい」

キュポアは今、ほのかな幸福感を味わっていた。

今やっと初めて、供の者を従えて、アルスティーンは学園祭視察に赴いた。

勿論王妃エファールも一緒だ。

校庭にある自国のサイコ・フライヤー『紅龍』から真っ直ぐ屋台街へ行く。

鼻をくすぐる芳醇な香り。

なんとも食欲をそそる。

王は迷わず、あるの屋台へと向かった。

王妃も香りに釣られて後続く。

垂れ幕には古代イーハン語で『たこ焼き』と書いてあった。

「ヨデイ、これは何て読むのかしら？ 古代イーハン語っぽいけど……」

エフアール王妃は、ヨデイことアルステイーンに尋ねた。

「これは『タコヤキ』と読みます。おいしいですよ？ 食べてみます？」

「ええ、是非。でも毒とか入っていないかしら？」

「その心配は無し。誰も、今、このタイミングで、僕たちがタコヤキを食べようなんて、わかる人はいません」

「それもそうね。幾らかしら？」

「金五百になります」

「あら、ちよっと割高ね……まあいいわ。二つ頂戴」

「へい、毎度！」

アルステイーンは、包みを二つ受け取った。

「どこで食べましょう？ ベンチが一杯だわ」

エフアールが訊いてきた。

「立ったまま食べましょう。それも乙なものですよ」

「そういうもののなの？」

「ええ。そういうものです」

この後王妃と王は、『ヤキソバ』と『オコノミヤキ』を食べて小休止しようとした。

「どこで休みましょうかね？」

「アーチェル達のロイヤル喫茶にしない？ どれだけロイヤルかこの眼で見えてあげるわ」

アルステイーンとエフアールは、校内に入り、二階に上り階段の真正面の教室に来た。

「ふむ。ここがエレガントでロイヤルな喫茶室か」

何故かアルステイーンが感慨深げに言う。

「いらっしやいま……!!」

アルステイン夫妻を見て、言葉を発しかけたメイドが、突然奥に入って行ってしまった。

中で、どうやらミカと話をしているらしい。

ミカは、普通に対応するよう、メイドの子に指示し、自分は椅子に控えて待っていた。

「「いらっしやいませー」」

案内のメイドたちが一斉に声を上げる。

「どのプリンス・プリンセスをご所望ですか？」

「では、プリンセス・サクラコを所望する」

「あら？ 貴方は、手つきり全員をご所望するかと、思ったけれど？」

エファールに揶揄された。

「それは気が付かなかった。プリンセス・ミカ、それは可能なのかな？」

「ほかにお客様も居りますれば、それはご遠慮願います」

「相分かった。では当初の予定通り、プリンセス・サクラコを所望しよう」

「陛下。ありがたき幸せ。これに勝る喜びは御座いませんわ」

サクラコがそう言う。

「クイーン・エファール。どのプリンスをご所望ですか？」

ミカが訊いた。

「そうね。ちよつと毛色の違う、可愛い子がいるじゃない？ そうね、あの子にするわ。えーと？」

「プリンス・ハルマに御座いますね？」

「ハルマと言うの。そう、その子にして頂戴」

「クイーンにご所望とあつては、このハルマ・イコナ、感謝の極みに御座います」

「あら？ 可愛い事言うじゃない？ こっちにいらっしやいな。あそこのテーブルでお話しましょ？」

「はい」

「ねえ、ハルマ君、あなたその顔だもの。相当浮名を流したんでしようね？ 一体何人の女の子を泣かしてきたのかしらね？」

「いえ、そんな浮名を流してきただなんて。僕はこれまで女性の方とお付き合いました事なんか無いんですよ」

「また、そんな事を言ってお姉さんに嘘を吐く気？ こんな綺麗なブルーの髪の毛をして……うちのヨディにそっくりな色ね」

「ヨディ？」

「ああ、アルステインの事よ。そういえば顔もどこか似ているよな？」

「あつ、ああ、その……気のせいですよ、気のせい」

「そうね、何かの間違いよね。あのアホ面亭主より、あなたのほうがよっぽど知性的。お姉さん、ホントにあなたのこと食べたくなっちゃった」

「それは困りましたねえ。食べられたら僕は無くなってしまいます。そうすると、僕を慕うご婦人方が嘆かれます」

「ほら御覧なさい。浮名を流しているんじゃない」

「それより、何かお茶でも飲みませんか？ クイーン・エファール」

「そうやってはぐらかす。女の扱い方もお上手ね。そうね。お茶は何があるの」

「お勧めはイーハン・ティーですね」

「そう、じゃあそれをお願いするわ」

二人は仲良く歓談しそしてそれを終えた。

アルステインもサクラコとの歓談を終え帰る仕度をした。

その時にハルマと目が合った。

アルステインは、なぜか、他人のような気がしなかった。

ハルマが会釈をする。

アルステインも頭を頷かせる。

二人はそこから出て行った。

「エファールさん随分とあの子にご執心でしたね。心密かに愛人に

したりして？」

「あら、ヨデイ、妬いているの？ 可愛い所あるじゃない？ でも大丈夫よ。おんなじタイプの人間は二人と要らないわ」

「同じタイプの人間？」

「あの子、根はあなたと同じよ。表面は柔らかく見せているけれど、中身は鋭利な刃物。溢れ出る英気を必死に隠している」

「だからですかね？ 他人の気がしなかったのは」

「そうなの？」

「ええ、そうです。髪の毛も同じ色だし」

「目元なんてあなたそっくりよ」

「まさか……」

アルステインは何か思うところがあるらしい。

「ま、そんな事はないでしょう」

そう言って二人は『紅龍』に乗って、ノリトレアに帰って行った。彼にも、待ったなしの政務がたまっているのだ。

ただ残念なのは、明日の表彰式に出られないことだった。

学園祭最終日。

この日は、学園祭の行事が、午後二時までとなっている。

その後、表彰式となる訳だ。

キュポアは、昨日のエフアールとハルマの歓談の辺りから、機嫌を害していた。

本人は気付いていないが、どうやら焼き餅らしい。

ハルマが指名されると、それを無意識に目で追い、はらはらするのだ。

ハルマが視線に気付くと、にっこりと微笑を返してくれる。それだけで、キュポアは幸福感に包まれた。

が、その直後女子たちと歓談するハルマを見ると、矢張り沈んでしまう自分を、そこに見た。

やがて全館の出店が終わる。

生徒は校庭に集まり、表彰式を受ける。

これには講師も含めて教員達、そして生徒の投票で決まる。表彰式が始まった。

校長である、ミス・ケリー・サトウが表彰をして行く。

三位は武器防具の修理を行ったクラス十八だった。

高い技能を買われてのことだった。

二位は演劇を行ったクラス十五だった。

高い演劇の評価を受けてのことだった。

そして一位にはミカのクラスのロイヤル喫茶が選ばれた。

発想の独自性と大規模な舞台装置、揃えられたホスト・ホステスの質の高さが評価されての事だった。

「やったあああっ!!」

ミカたちがはしゃぐ。

『では、代表者の方、前へ出てきてください』

ミカは表彰台へと赴き目録と栄誉の冠を手に入れた。

「今日はパーティーだよ!」

ミカが声高に言う。

「それより優勝商品は?」

「ああ、それなら、男子は魔導石製の『刀』で、女性陣は魔導石製のビスチェだよ」

「ビスチェ! 早く着けてみたいなあ」

「パーティーはアルコールOK?」

「それは駄目。ノンアルコールよ」

「どこでパーティーするの？」

「ひよこ亭！」

ミカが、クラスみんなの質問に、てきぱきとして答えて行く。

「アシュマさま。アシュマさまも一緒に優勝パーティーに行きませんか？」

「いいのか？行つて」

「OKよ！アシュマ先生。先生ならみんな大歓迎」

ミカが太鼓判を押した。

「じゃあ、行くか」

「やったあ」

アーチェルがアシュマの腕を取る。

「ハルマ、おぬしも行くよな？」

「ですが、幾らスカウト制度で学園祭に参加できたといつても、元々クラスも違いますし、矢張り気が引けます」

「ばかな事を抜かすな。今日はわらわに付き合え！いいな？」

ハルマはくすりと笑つて、

「はい、畏まりました。王女様」

そう言った。

「アシュマ先生、記念撮影するの。撮つて下さい」

ミカが写真機を持ってやって来た。

「ああ、いいよ。じゃあ全員並んで」

校舎をバックに、ミカのクラスの面々は揃つて並んだ。

リイナがレンヌの手を握つてくる。

レンヌが、リイナに微笑みかける。

リイナの至福の時だ。

キュポアもさり気無くハルマに手をくつつける。

キュポアはそれでもう、鼓動が早くなるのが分かった。

ハルマはそんな、もどかしい接触の仕方をしてくる、キュポアの手を握った。

キュポアはもう本当に心臓が破裂しそうなほど鼓動が早くなった。

「じゃあ撮るぞ……撮ったぞ」

あと、アシユマは撮影の終了を告げた。

「えー！ なに？ それ」

「タイミングわかんないよ」

生徒からブーイングの嵐だった。

「分かった分かった。ちゃんと撮るから。で、なんて言えば良いんだ？」

「『一たす一は』」

「『一たす一は』？ そんなんで、いいのか？」

「いいから。やって、先生」

「わかった。じゃあ、撮るぞ。『一たす一は』？」

「にい」

カシャッ！

ここに、今年の学園祭は、問題は無いとはいえなかったが、一応平和裏に終わった。

第四節 期末試験

アシユマは非常勤講師だ。月の内十日をスコラで過ごし、月の内二十日をレキシタニアで暮らす。

レキシタニアでは弟子たちが待っている。

稽古をつけてやらねばならない。

夕べの内に、黒龍号に乗り、レキシタニアに戻って行った。

アーチェルはその際、寂しい想いを隠してアシユマに、

「ご無事で」

言って送り出した。

「大丈夫だよ。すぐに戻ってくる」

アシユマとアーチェルは口付けを交わして別れた。

アシユマは、レキシタニアの人々に、今回の学園祭の事を話そうと思っていた。

早速学園祭の後片付けが待っていた。

予定日数は二日。

キュポアたちは、室内装飾に手間をかけたため、その分手間がかかる事となった。

ここでもキュポアが陣頭指揮に立ち、解体、運搬、破棄などを手際よく終わらせて行った。

あの大装飾の壁や柱シャンデリアなどが綺麗に片付いてゆく。

当初、二日目の夜遅くまで掛かるのではないかと言う大方の予想を裏切って、二日目の午前中、それも早い時間に片付け終わってしまった。

学園祭が終わると、学園内は期末試験ムードで一色になる。

キュポアはアーチエルに付いて、アーチエルの勉強の邪魔にならない程度に、勉強を見てもらっていた。

その他は、リイナとも勉強をし合っていた。

このリイナ、成績は中々優秀で、いつもトップ・テンに名前を連ねている。

キュポアは焦っていた。

これまで、みんなに追いついていない分の勉強に追いつこうとして、これまでに無く必死になっていた。

そして、此処にもう一人、勉強に勤しむ人間がいた。
レンヌである。

彼女であるリイナに、見劣りしないように必死なのである。

元々、頭の回転が速い方の人間である。

物覚えはよかった。

勉強で苦労するような事はなかった。

問題は実技である。

実技は二つある。

そのうち一つは魔法、若しくは召喚魔法系の実技である。

決め手となるのは、彼の持っている召喚魔法に掛かっていた。

実技でも見せる、彼の召喚魔法は、あらゆる召喚魔法の内でも、最強のものと謳われていた。

禁呪である。

だが、最強なのは禁呪の方で、通常の四行詩版では、大した威力をなさないといわれている。

しかしここ数百年間、その呪文を行使したという記録はなく、幻の呪文とされてきた。

その呪文、ヘブンズ・ソードと言った。

なぜ、そのような高等呪文を、レンヌが知っているのかと言うと、これは、アデュニ家代々に伝わってきた物で、次第に只の名文と化し、一体、何の魔導石と組み合わせれば召喚できるのか、はたまたこれは召喚魔法なのか、と言われて来た、曰くつきの呪文であった。

以前レンヌは、ヘブンズソードのことにについて、アシュマに尋ねた事があった。

これは一体どういう呪文なのかと。

すると、アシュマはそれは召喚魔法で、聖の（白）魔導石と共に使用するものと、教えてくれた。

今なら、自信を持って使える。

レンヌはそう思った。

しかし、我々の前には、如何なる召喚魔法なのか、不明である事には、代わりは無い……。

アシュマはスコラでの出来事を、義父エドスや、義兄エースティーなどに話しをし、食事中に場を沸かせた。

その後二十日間を、レキシタニアで門下生に稽古をつけながら、門下生にも話をし、その場を矢張り沸かせた。

そして、スコラでの期末試験の試験官を務めるため、黒龍号に乗りスコラに向かった。

試験第一日目、筆記試験。

これは、アーチェル以下リイナ、レンヌは完璧だった。キュポアもそこそこの手ごたえを感じさせた。

試験二日目、三日目は筆記試験で特に問題はなかった。

試験第四日目魔法、召喚魔法、実技試験。

去年はアーチェルが、新しい魔法ヒーリングスフィアを発表し、試験官の皆を驚かせていた。

今年は、どんな新しい魔法を携えてくるのかと思ったら、今年は召喚魔法で実技試験に臨むという。

残念半分、期待半分、といった所だろうか。

そしてアーチェルの発表の番になった。

予め傷ついた者を五名ほど用意しておいたので、何らかの回復系の呪文である事が予想された。

試験官にはアシュマも加わっている。

アーチエルは緊張した。

「えー、今回私が発表するのは『フェアリー』と言う召喚魔法です」試験官がざわついた。

誰もそんな召喚魔法を知らなかったからである。

アシュマを除いては。

アーチエルは、そんなアシュマの澄ました顔に、緊張感を募らせたが、

「では、行きます」

早速呪文詠唱を始めた。

幸を授ける黄金こがねの泉。

泉の主、羽持つ者よ、

羽は金色こんじき、黄金こがね色。

傷つく者に幸を授けん。

今こそ汝の癒しを我に。

フェアリー！

すると、絵に描いたような正に妖精が現れ、早速怪我人を癒し始めた。

「このフェアリーはパーティー内に怪我人などがいれば、全員が癒されるまでその処置をし続けるところがその特徴です。よって魔法を唱えられない者でも、その効果を享受出来るところにその意義があります」

アーチエルはそう言った。

ミス・ケリー・サトウ以下教員たちはまたもざわついた。

勿論賞賛の声である。

ミス・ケリーが、

「今年も素晴らしい成果ね。来年も期待しているわ」
そう言った。

「有難う御座います。もういいわよアルニカルティ」
アルニカルティと呼ばれた妖精は、皆に、ウィンクすると光の粒
となって消えてしまった。

「じゃあ、もう宜しいわよ、アーチェルさん」

「はい、失礼します」

アーチェルはそう言って、部屋を出掛かった。

アシュマとふと眼が合う。

そこには優しく見つめる、アシュマの視線があった。

キュポアの実技試験の番だった。

何と、キュポアは姉と同じく召喚魔法で挑むという。

大方の教師は、精々普通の召喚魔法を、行使するものだと思っ
ていたし、それで合格点をあげようと思っていた。

が、キュポアも、教師達を驚かす内容を、ひれき披瀝して見せた。

「わらわは……わたくしが召喚するのは、ガーディアンと言う召喚
魔法です」

これにはアシュマも面食らった。

何せ、アシュマも初耳の召喚魔法だったからだ。

「これについて、お願いがあります」

「何ですか？ ミス・キュポア」

ミス・ケリー・サトウが対応した。

「つきましては、どなたか、召喚魔法でドラゴンなどを、召喚して
いただけ無いでしょうか？」

キュポアが請うてきた。

「ならば自分が」

言って来たのは何とアシュマだった。

「ふ、怪獣か。相手にとって不足は無い……」

キュポアは不敵にも、微笑を作って見せた。
先に呪文を詠唱し始めたのはアシュマだった。

全てを憎しむその牙よ。

汝の牙で敵を滅ぼせ。

全てを憎しむその爪よ。

汝の爪で敵を滅ぼせ

我は今より汝の主。

出でよ竜王、

ティアマツト!!

「いけないわ! よりにもよって六行詩のティアマツトだなんて!」
そう叫んだのは召喚士教諭のスチナ・アガネだった。

そのティアマツトは一对の角が有って大きく前部に湾曲しており、
牙は大きく何者をも噛み砕くが如く交差しており、眼は相手を威嚇
するよう爛々と燃えていた。

その腕は荒縄をよじったが如く隆々としており、爪は、何者をも
切り裂く威力を秘めていた。

足は、どっしりとしており、多少の攻撃では揺るがない事を示し
ていた。

翼は一对、翼竜を思わせるその翼は、禍々しく大きく広がり、暗
黒龍の名に恥じない様を湛えていた。

対してキュポアは、少し怯んだものの、召喚を始めた。

私の盾なるその胸よ。

我を見事に守って見せん。

私の武器たるその腕よ。

私の敵を打ち滅ぼさん。

出でよ闘神、

ガーディアン!

キュポアが、呪文の詠唱を終えると、眩い光がキュポアを包み、光の巨人がそこに現れた。

光の巨人は、猛ダツシュで、ティアマットに迫り、喉元にチョップをかました。

『ぐっ!』

(思ったより速くて重い攻撃だ)

アシュマは、相手が強敵であることを、今の一撃で悟った。

ガーディアンは、ティアマットの両方の首筋に、チョップを打ってきた。

(い、いかん。このまま攻撃を食らい続けていたら、意識を持っていられる)

ティアマットは、起死回生と言わんばかりに、尻尾を振り回してきた。

何とそれを、光の巨人は受け止め、逆にティアマットを振り回し放り投げた。

ティアマットは背中から落ちたようで、一時的に呼吸が止まり、何も出来ないでいた。

(い、いかん)

そうアシュマは思ったが、時すでもう遅く、光の巨人は腕を交差させて、手刀の部分から(後で分かった事だが)なんと重粒子ビームを発射させ、ティアマットの頭部を破壊した。

アシュマにしてみれば、たまったものではなからう。

臨死体件をしたようなものだからだ。

アシュマの気絶は、ほんの十数秒で、審査席に戻ってきた。

ただ、頭を左右に振ったり手で頭を叩いてみたりはした。

「か・か・か、怪獣に勝ったわい! ひゅー! これほど嬉しい事は無いぞ!」

「そのとおりだな。キュポア。俺は何もさせてもらえなかったよ。俺の個人点では満点をやろう」

「やったあ！」

「しかし、ガーディアンとは恐れ入った。一体どこでそんな呪文を？」

「何のことは無い。我が家に伝わる口伝のお呪いじゃ」

「おまじない……」

「そうじゃ」

キュポアは何処か得意満面だった。

「キュポアさん、下がって宜しい」

「はい」

キュポアは上機嫌で帰って行った。

暫くして今度はレンヌの番になった。

「失礼します」

一礼して、部屋に入ってくると、

「僕はヘブズ・ソードを召喚します」

そう言い切った。

ここでも教師達はざわめいた。

この世で、最強と謳われた、伝説の召喚魔法である。

どんな物かと皆眼を見張った。

レンヌは呪文詠唱を始めた。

秘めたる聖剣、内より溢れん！

愛するものを、護る為

両の手、両の目聖剣掴まん！

出でよ聖剣、汝の敵を切り刻まん！

ヘブズソード！！

すると、四本の巨大な剣が出現してぐるぐると回り始めた。

「これだけでは真価を量りかねますな」

アシュマに視線が集中した。

「いや、さっきから頭痛がするので……」

それは当然と皆が認めた。

先ほど、自分の分身である、ティアマットの頭部を、破壊されたばかりである。

その頭痛たるや相当のものだろう。

「どうでしょう、皆さん、キュポア嬢またお越しいただいては？」

「おお、それはいい。最強クラスの対戦が眺められますな。」

暫く後、キュポアが、緊張した面持ちで入ってきた。

「キュ、キュポア・アップルトン、は、入りますっ！！」

先生方から笑いが起こる。

「さ、先程の召喚魔法演舞で、何かいけない事をしたんでしょかッ！？」

半分涙声になっている。

「キュポア様。そんなに緊張することではありませんよ。アシュマ先生の代役です」

ミス・ケリー・サトウが優しく言った。

「本当でしょうか」

キュポアは、今にも泣き出しそうな表情をしている。

「大丈夫だ。キュポア。本当に俺の代役を勤めてもらおう。それだけだ」

「なんじゃ、それだけか。さてはわらわのガーディアン of 凄さを認めて、また見てみたいと言うところじゃな？」

「さて、今度は上手く行くかな？」

アシュマが行った。

「で、対戦相手は誰じゃあ？」

キュポアが息巻く。

「僕です。キュポアさん」

レンヌが名乗り出てきた。

「レンヌではないか。これは全く手加減せんと、ほんとリィナに済

まない事をしてしまうのう」

「手加減無用に願います。でないと怪我をするのは、リィナさんの方ですよ？」

「なんじゃと？ 言いおったな？ 怪獣！ 試合はいつからじゃ？」

「いつにてもどうぞ？」

「そうか！ 行くぞ！！！」

我の盾なるその胸よ。

我を見事に守って見せん。

我の武器たるその腕よ。

我の敵を打ち滅ぼさん。

出でよ闘神、

ガーディアン！

リィナが呪文を唱えると同時にレンヌは、

秘めたる聖剣、内より溢れん！

愛するものを、護る為

両の手、両の目聖剣掴まん！

出でよ聖剣、汝の敵を切り刻まん！

ヘブンズソード！！

レンヌも召喚魔法を唱え終わっていた。

キュポアは相変わらず光の巨人を召喚していた。

対するレンヌは巨大な剣を召喚していた。

大きさは光の巨人の背丈と同じ程度であろうか。

四十メートルは軽く行く。

リィナは心の中で

（あれも召喚魔法なのか？）

と、思った。

凡そ召喚魔法と言うのは、召喚『獣』を召喚して戦うものだと言っているから、違和感を拭えない。

「アンサラー！ エクスキャリバー！！」

言って巨大な剣の一本が光の巨人に襲ってきた。

間一髪のところ、光の巨人が攻撃を避けたのも束の間、

「アンサラー！ デュランダル！！」

二本目が攻撃を開始してきた。

勿論、一本目の剣も攻撃を続行しているので、キュポアは何もさせられていない。

避けるので精一杯だ。

そしてレンヌが、

「アンサラー！ ソード・オブ・クサナギ！！」

そう言った所で、三本目の剣が上から降って来て、光の巨人の頭の上で止まった。

光の巨人は、その場に固まったままだ。

そしてキュポアが、呪文の詠唱をやめる。

光の巨人は、まさしく光の粒となって、消えて行く。

「はあ、上には上がいるものじゃ」

「いえ。そんな事は有りませんよ。アシュマ先生のティアマットを倒したんでしょう？ 大したものですよ」

レンヌが言った。

「そうかのう。画期的な召喚魔法だと思ったんだがのう」

そうして二人は部屋から出てきた。

「レン……ヌ」

廊下で順番を待っていたリイナが、レンヌに言葉を掛けようとした。

が、当のレンヌは、お喋りに夢中で、リイナの事など眼中に無い。

しかもその相手が、キュポアと来ている。

一瞬でぶち切れた。

レンヌは結局女なら誰でも良いのか？

キュポアもキュポアだ。

レンヌと自分の関係を知らぬわけでもあるまいに、人の男とあんなに楽しげに……。

結局、裏切ったのは、レンヌのほうなのだ。

「レンヌッ!!」

リィナは怒りの全てをぶちまけて、レンヌの名を呼んだ。

その一言で、全てを悟ったキュポアが、場を取り成そうとした。

「いや、これは違うぞ、リィナ。これは、今の召喚士進級試験での感想をだな、二人で……」

「ほおう? 『二人で』と来たか。その後は何が続くんのだ? キュポア。人の男を取ってそんなに楽しいか?」

「どうしたんだ急に!?! 最近のリィナ少し変だぞ!?! どうしたんだ!?! 一体?」

「一番何も分かってない奴が、何を言う!?! お前は時に私を天国へと連れて行く代わりに、次の瞬間には地獄へと突き落とす。これほど苦しい事があるか? これがどれだけ孤独感にさいなまれるか分かるか?」

「……………」

レンヌは呆気にとられて、二の句が継げなかった。

「……………レンヌの馬鹿!! どうしてここで否定してくれないの!?! なんで『お前は俺の物だ』って言うてくれないの? わたし、こんなんじゃ、ホントに独りぼっちになっちゃう……」

他の生徒が見ている前で、リィナは臆面もなく泣き出しその場に崩れ落ちてしまった。

アシュマがやって来て、リィナを抱き上げて、保健室へ連れて行った。

勿論、レンヌとキュポアも一緒だ。

保険医の先生に後の事を頼んで、アシュマは試験会場へと戻って行った。

暫くして、アシュマが全試験を見終えて保健室へと戻ってきた。

「アシュマまで来たのかッ！ 私は重病人ではない！ 帰ってくれっ！」

彼女が言うのも無理は無い。

彼女の周りには、レンヌ、キュポア、アーチェル、ミカ、サクラコ、エミル、ジーク、オルバニアンにアルミナ果てはハルマと、狭い病室に皆勢ぞろいだ。

そこへきてアシュマの登場である。

もう、恥かしいを通り越して、呆れているのかも知れない。

しかしアシュマは、聞いている状況から、ある事を想定していた。「アーチェル、校長先生に言って、除霊室を貸してもらうように頼んできなさい」

「！ じゃあ、もしかしてリイナは……！！！」

「可能性の一つだ。潰しておいて損は無い」

「分かりました」

「さて、アシュマ！ 私がスペルフantomに取り憑かれているとでも言うのか！？ 有り得ん！」

「リイナ、可能性の一つだ。気にするな」

「しかし……」

「あとは先生が見ていてあげるから。さあ、帰った帰った」

「ちえっ。なんだよ、折角心配してきてみりゃ、先生面しやがって」
オルバニアンが憤慨していた。

「まあまあ」

アルミナがいなす。

そして他の生徒を返した後、レンヌを呼び止める。

「レンヌ、お前は一緒に来なさい」

「は、はい」

除霊室の鍵が来た。

例によってミス・ケリー・サトウ校長と一緒に来る。

「何でも、ミス・リイナが、スペル・ファントムに掛かっていると？」

校長は決めて掛かった

「いえ、校長。まだそれと決まったわけでは……ただ最近リイナ的情绪が不安定だったものですから、もしかしてと思い……」

「そうでしたか……」

「では、始めます。向うの部屋へ」

「分かりました」

この除霊室は、丁度録音スタジオのような構成になっていて、一つの部屋をガラスで区切っていた。

レンヌとアーチェルとミス・ケリー・サトウがその一部始終を見守っている。

アシュマがリイナの眉間を突いて、

「さあ、リラックスして」

と、言った。

アシュマが呪文を唱え始める。

「出でよ、悪霊。この悪しき者よ。

出てゆくべし。愛しい者から、我が子から

出てゆくべし。敬いし者から、我が父母から

時を刻んで汝を癒さん

スペルファントム・チェック！」

暫くするとリイナの体が、ぼうつと光り始めそれと共に黒い影がリイナの上に覆い被さった。

「矢張りそうか……」

アシュマは呟くと、

「聖なる契約を交わし者達よ、
聴けよ、汝らの魂は救われん。
見よ、汝らの肉体は癒されん。
聖なる癒し、神の御手。
ヒーリングオール!!」

アシユマは、呪文を呟き、悪霊の退路を断った
悪霊は苦しげだ。

前回の通り悪霊の足元を断ち斬りそして十字に刻んだ。
悪霊は更に苦しみ悶えた。

アシユマは止めと言わんばかりに、気弾を悪霊にぶつけた。
悪霊はべつとりとエクトプラズム状になって壁にぶち当たった。

次にリイナが目覚めたのは、自分のベッドの上だった。

「私は……」

ぼんやりとして思い出せない。

アシユマに眉間を突かれたところまでは、思い出せる。

その後が、どうも思い出せない。

ふわふわと宙に浮いている気分だ。

「くっ……!!」

リイナは、起き上がろうとした。

が、身体が言う事を聞かない。

「駄目よ。無理しちゃ。リイナ」

「アーチェルか……」

「アシユマさま曰く、大量に気が抜けたのと同じ現象だそうよ。だから、安静にしてなさいって。試験の事なら大丈夫だって。後で特別に梓を取ってくれるって」

「そうか、済まん。手間をかける」

「リイナ……その、済まなかったな。別にレンヌを取ろうとした訳

ではないのじゃ。許してたも」

キュポアが不安な面持ちでリイナの顔を覗く。

「分かっている。そう、分かっているはずなのに……。レンヌには……悪い事をしたな。もう、私達の関係も終わりかも知れん」

「そんな事無いよ!!」

レンヌの声が聞こえる。

レンヌも居たのだ。

慌てて、起きようとするが、貧血のようになって、またベッドに仰向けになる。

キュポアと変わってレンヌが梯子を上ってリイナの顔を覗く。

「僕たちの関係は、そんな、脆いものだったのかい？ リイナはそれで言いかい？ 僕は嫌だ！ 別れたくないよ！ リイナ!!」

そう言っ、レンヌはリイナの手を握り締めた。

すると、見る見るうちにリイナの顔がくしゃくしゃになり声を上げて泣き始めた。

見るとレンヌもぼろぼろと一緒に泣いていた。

涙声で、レンヌが、

「好きだ、リイナ」

そう言っ、リイナも

「私もよ、レンヌ、大好き」

そう言っ二人はキスをした。

アーチェルはそれを見てどぎまぎした。

さて、実技演習だが、補修として水トカゲの巣に赴き、水トカゲのウロコを持ってくる様、命を受けていた。

これには、最低一人の合格者と共に洞窟へと赴かなければならぬい。

そして今年の補修者はリイナと何とハルマであった。

リイナにはレンヌが、ハルマにはキュポアが付いた。

リイナはともかくとして、キュポアはハルマがそんな補修を受けなければならぬような生徒にはとても思えなかった。

現場監督として、一緒について行くアシュマも、同じ思いであった。

アシュマは、人の無意識に行う身のこなしなどを見て、この人間は出来るか出来ないかを判断する。

勿論その身体の運用を極めるのは、頭と言う事になるから、その人間の頭の良し悪しなどもそこで判断する。

そこで、アシュマはハルマをどう判断したかと、言うとかかなりの出来る奴で頭の回転も速い。

それを、故意に隠している。

今年から実技試験を一本に絞った。

どの教科の教師からも平等に判断を下せるからだ。

そしてハルマの順番に來たわけだが、どうも煮え切らない。

『魔法実技』にするのか、『召喚魔法実技』にするのか、『武術実技』にするのか判然としない。

いい加減、校長があきれ返ってこの実技試験を不合格にしてしまった。

これは開校以来、前代未聞の事で、恥ずべき事とされた。

これは余談だが、これによって、俄かに出来つつあったハルマ親衛隊は、その恥ずべき行動に呆れ、解隊を宣言した。

だがアシュマだけは、前述の理由から、この男の正体はもつと得体の知れないものとして映った。

真綿に包まれた剃刀の刃。

これが、青年ハルマの正体ではないかと思っている。

「さて、補習授業だが、これからこの水トカゲの洞窟に入ってもらい、水トカゲのウロコを取って來てもらう。勿論床に落ちているものを持ってきても構わない。むしろそちらを推奨する。水トカゲは大人しい生き物だが、いついかなる事が起こるかわからん。念には念をだ。さあ、いくぞ」

「さあ、いくぞって先生も入るんですか？」

ハルマが言った。

「うむ。いくが。なにか？」

「いえ、べつに」

何故かやりにくそうにしていた。

「……………わかった。入り口で待つことにする」

「え？」

「何で？」

「どうして？」

リイナやキュポア、そしてレンヌが驚いた。

「何かあったら、叫べ。直ぐに飛んで行く」

「それはそうじやろうが……」

そう言いかけて、ハルマの方を見た。

ハルマは変わらず柔らかい笑みで、キュポアを見た。

キュポアは顔を少し赤らめて、顔を俯かせる。

キュポアは、未だに何故ハルマが不合格なのか、腑に落ちなかった。

筆記試験の成績も合格ギリギリでの点数ばかりであった。

そしてまるで、自分は凡人で、人の目に付くに足りない人間ですよ、と言っているような感じなのだ。

アシュマもその辺は分かっていて、逆にハルマに対して警戒感を持っていた。

キュポアは、ハルマはそんな人じゃないと信じていた。

キュポアは、いつの間にかハルマに、淡い恋心を抱いていたのであろう。

どうしてもハルマのそんな成績が、信じられなかった。

「じゃ、じゃあ、わらわ達は行って来るぞ」

「うむ」

アシユマとキュポアのやり取りで、補習授業は始まった。

キュポアがそんなに恐怖感を感じないでいられるのは、近くにハルマがいたからであろう。

洞窟の中は鍾乳洞になっており、かなり広い造りになっている。

内部は紺碧の色合いで、統一されていた。

眼の前には二十メートル級の水トカゲが眠っていた。

まるで、召喚獣だ。

眼の前には、美しい紺碧の色の、水トカゲのウロコが、幾らでも落ちていた。

「さあ、拾ってお仕舞いじゃ。リイナ、ハルマ、拾うのじゃ」

キュポアがそう促した。

ハルマとリイナはウロコを拾うと

「さ、ウロコも拾いましたし帰りましょうか？」

ハルマが言った。

「ガオオオン！！」

突然、水トカゲが大きな唸り声を上げて、リイナ達に襲い掛かってきた。

それも一匹ではない。

五〜六匹が一斉にである。

「きゃああっ！」

リイナは、あまりの突然の出来事に、対応できないでいる。

「いけない！」

レンヌが叫ぶ。

そして、

「秘めたる聖剣、内より溢れん！

愛するものを、護る為

六つの星に、六つの剣、

額に印を表す時に、

両の手、両の目聖剣掴まん！

出でよ聖剣、汝の敵を切り刻まん！
ヘブンズソード！！」

そう唱えた。

「アンサラー！ エクスキャリバー！！」

そうレンヌが言うとそのうちの剣の一本が水トカゲに向けて突進した。

そして、首を貫き絶命させてしまった。

「レンヌ……」

レンヌが、自分の窮地を救ってくれた。

不謹慎にも戦闘中に、リィナはそのことに感動せずにはいられなかった。

「きゃああ！！」

今度は、キュポアが悲鳴を上げた。

水トカゲが、キュポアにかぶりつこうと、したからである。

同時にキュポアは失神してしまった。

そこへアシュマが来たがそれより早くハルマが呪文を詠唱していた。

「我は禁忌を見た者、犯したもの。

我が憎しみは、汝の快樂。

我の癒しは、汝の死のみ。

黒く塗りこめ我が魂。

今、その力を汝らに示せん。

全てを吸い込め。

ブラックホール！！」

「ブラックホールだと！？ 禁呪ではないか！」

アシュマはそう叫んだ。

水トカゲは高重力の玉に包み込まれ、ダメージを食らっていた。
高重力の範囲内に入るということは、その重力の中心に向かって力が働くという事であり、自らの質量で押し潰されるという事である。

この呪文は、一般的にはあまり知られていない呪文で、系統は暗黒に属していた。

この呪文は質量を持つものなら、何にでも有効で、強力な呪文であった。

ただ難点なのは、この呪文は制御が難しく、よほど熟達した魔道士でないと、目標物に当てられないという欠点を持っていた。

そのため、禁呪と言う事になり、扱うのもタブー視されてきた。

（後になって解った事だが）、何と言っても原理があ**の**バヴェルの『漆黒の門、裁きの扉』と同じものであったからだ。

そしてこの呪文の発展型が、例の殻兵器、エンジェルに繋がるのだ。

それを、あ**の**ハルマと言う青年は使用してきた。

何の躊躇ためらいもなく。

「キュポアさん！　しっかりして！　キュポアさん！」

ハルマは、気を失ってしまったキュポアに、対し呼びかけた。

水トカゲは、粗方レンヌのヘブンス・ソードで、倒してしまっていた。

「キュポアさん！」

ハルマはまだ呼びかけ続けていた。

「あ……………」

キュポアは覚醒した。

「よかった！　キュポアさん！　よかった！」

ハルマは思わずキュポアを抱擁した。

「う……、怪獣。そんな、ぎゅ、するでない。皆が見ておろう」

「キュポア、俺はここだが？」

アシユマはキュポアの横に、立て膝していた。

「済みません。キュポアさん。つい抱きしめてしまいました……」
「ハ、ハ、ハルマ！ お主、何をしておるのじゃ！？ は、はよう
離れんか！！」

「はい、済みません。……でもキュポアさん。僕は『怪獣』じゃ、
ありませんよ」

「な、何を言っておる？ 早く課題を済ませて帰ろうぞ」

「怪獣……アシュマ先生なんかじゃ……」

「だから、ウロコは拾ったか？」

「話をそらさないで下さい！」

「痴話喧嘩はその位にしておけ。ハルマ。聞きたい事がある。後で
職員室まで、来るように。そしてレンヌも一緒に来なさい」

アシュマが言った。

そして、

「俺はちよつと調べる事があるから、先に帰っていなさい」

そう言った。

なぜか、キュポアの元気が無い。

先ほどハルマと会話してからだ。

（これで、嫌われてしまったな。……なぜ残念がるんだろう？ こ
んな気持ちは怪獣に対して、恋心を抱いて以来かの。……まさか、
わらわはハルマに恋をしていたのかの？ それも、もう関係ないわ
いの）

とぼとぼと洞窟を出てくると、後ろからハルマが近付き、

（『怪獣』先生には負けませんからね）

耳元で密かにキュポアに告げた。

ハルマのアシュマへの、宣戦布告とも取れるこの言葉は、初めの
内キュポアには理解がつかなかった。

だが、ハルマが

「さあ」

そう言っ手て手を差し伸べた時に、始めてその意味を理解し、キュ
ポアの恋も終わりを告げていない事が分かった。

リイナもレンヌと腕組みをし寄り添っている。

「レンヌ。有難う。助けてくれて。月並みな言い方で御免なさいね」
「い、いや、僕は……リイナが無事でさえいてくれたら……その、
なんと言って良いか、その……」

その頃、洞窟内で、アシュマはあるものを捜していた。

それは、普段あんなに大人しい水トカゲを、あそこまで凶暴化させたモノがある筈と睨んで、その証拠となるものを捜していた。

暫く調べていると、あるものを見つけた。

それは麻醉銃の弾の様な物だ。

注射のようになっていた。

勿論これに何かしら、興奮剤を注入しておいても構わないわけだ。

それにドラゴンのような大型で、硬いうろこを持つ生き物に対して有効なように、やや大型で硬い針を持っていた。

それを慎重にハンカチで手に持つと洞窟を出て行こうとした。

その時

『それを置いて行け!』

洞窟中に声が響き渡った。

「それを聞いたら余計に持って帰りたくなった。そういうお前は誰なんだ?」

『それを置いて行け! さもないと命の保障は出来ないぞ!』

「勝手にしろ。俺は帰る。貴様などに付き合っている暇は無い」

『なに? 我を無視して帰るとは! それだけで万死に値する!』

「鬱陶しい奴」

『おのれ!』

その男(?)はアシュマの前に出てきた。

それは一見したらロボットと思うほどの鋭角的なデザインの身体を持ったマシンナリービーイングだった。

マシンナリービーイングかどうかはアシュマの思い込みで、本当にロボットなのかもしれないなかった。

ただ分かるのは、念導境界面を相手が持っていることだった。それにしても見づらい。

全身が鏡のように磨かれていて、体中が刃物のように研ぎ澄まされていた。

光が反射して眼を射抜く。

『いくぞ！』

そのマシンナリービーイング（？）は手刀で突いて来た。

アシュマは何か感じるものがあり、鞘ごと抜いてそれを捌いた。

（これは守りに入ると負ける！）

そう感じたアシュマは、鬼虎を水平に抜き、そして斬り付けた。マシンナリービーイングは、それを右の肘から先で受け止めた。そうしておいてマシンナリービーイングは脚を蹴り上げた。

アシュマはそれをかわしたが、革のジャケットを少し切り裂かれた。

（矢張りそうだ。全身が刃物なのだ。これは時間が長引けば、こちらが不利になる）

アシュマはそう思い、鬼虎に気を集め始めた。

マシンナリービーイングは右腕を振り回してきた。

アシュマは左手に持った鞘でそれを受けた。

すると、手首を軸に隠していた刃が、くるりくるりとせり出し、アシュマの即頭部を狙った。

危うくシュマは頭をかめ難を逃れたが、今度はマシンナリービーイングの左手の手刀が襲ってきた。

アシュマはそれを鬼虎で弾いた。

（守勢に回っては駄目だ。攻勢に出ねば！）

アシュマは、弾いた鬼虎をそのままに、袈裟に相手を打っていた。が、

（硬い！）

アシュマは唸った。

『ふふふ。驚いているようだな。そう、鬼虎のモース硬度は十三、五。それに対しわれの身体はモース硬度十五。鬼虎では斬れぬ』
そう言った時、マシンナリービーイングの表面にひびが走った。

『なっ！ これは……』

「驚いているようだな。確かに鬼虎の硬度は十三、五かも知れん。が、我が気、我が念を加えたとき鬼虎の硬度は倍加する。尤もその程度は俺も知らんがな。お前の身体如きに斬れぬ鬼虎ではない」

『おのれ！』

マシンナリービーイングは真正面から突っ込んできた。

アシュマから見れば無防備に見えた。

アシュマはマシンナリービーイングを頭から真っ向唐竹割りに相手を斬っていた。

「こ奴、一体どこの勢力のものだ？」

そんな事を独りごちながら、アシュマは証拠の弾を持って洞窟から出て行った。

洞窟から抜け出したところで、アシュマは携帯端末を手にし、アルステインにコールした。

『はい、アルステイン』

「アシュマだ」

『げ！ アシュマ君？』

「『げ！』とは何だ？ 『げ！』とは」

『だって、アシュマ君の持ってくる話って、ろくな例が無いんだもの』

「まあ、そういうな。鑑識を貸してくれ」

『鑑識？ また何かあったんですかあ？』

「あったな。生徒が襲われた。水とかげに興奮剤のようなものを撃った奴がいる。それを調べていたら、ロボットやら、マシンナリ

ービーイングのような奴に、襲われた。そして証拠の弾は、今、俺が手にしている」

『そうですか。分かりました。鑑識の人間を送りましょう。尤もすでに『敵』に証拠を回収されてしまうかもしれませんね』

「その『敵』だ。問題なのは。全く正体が分からん。七賢人の生き残りか？」

『それだったら世界中に、ごまんといますよ。七賢人は組織名ですからね。頂点の七人がいなくなれば、エレベーター式に、次の七人が現れます。まあ、表向きはあまり知られていませんが、公益法人でもあり、宗教法人でもありますからね』

アシユマは十数秒間何かを考えていたが、不意に

「アルステイン、アベニ爺を貸してくれないか？」

そう言った。

『貸して上げてても良いですけど、今、爺はぎっくり腰で動けませんよ？』

「寄る年波には勝てんか。じゃあ、誰か使える者を……」

『それじゃあ、ムラサキ嬢を』

「ムラサキ？ 俺が捕まえた、あのムラサキか？」

『ああ、そのムラサキ嬢ですよ。可愛くなりましたよ』

「使えるのか？」

『アベニ爺のお墨付き。太鼓判を押していましたよ』

「わかった。こっちに寄越してもらおう」

『何をさせるんですか？』

「素行調査だな」

アシユマは、校長室で、ミス・ケリー・サトウと二人っきりになつて、報告を始めた。

尤も、盗聴器を仕掛けられたら、意味を成さないが……。

アシユマはまず、水トカゲに襲われたこと、またそのように仕組

んだ者がいること、最後に自分が襲われたことを報告した。

その上で、ノリトレアの鑑識班がここスコラにくる事。

そして捜査の為に、少女が一人派遣されてくる事。

以上の事を報告した上で、ハルマとレンヌの所業を報告した。

先ず二人とも知人友人を助ける為に禁呪を使ったこと。

特にハルマは『魔法もろくに使えない』というので、今回の補習授業に出させたわけだが、蓋を開けてみれば禁呪も禁呪、最もタブー視されている『ブラック・ホール』を使って見せた。

これは、試験を冒涇しただけでなく、その禁呪の特性から、ともすれば仲間を犠牲にしていたかもしれないという事で、嚴重注意を校長に喚起した。

また、レンヌも同様に、咄嗟とはいえヘブンズ・ソードの禁呪版を使用した事に対するこれまた嚴重注意を、校長に喚起した。

その暫くして呼び出された生徒達、即ちレンヌとハルマだが反応が全く違った。

校長とアシュマを眼の前にして、頭を垂れているレンヌと、何事にも動じず穏やかにニコニコしているハルマがそこにいた。

専ら、小言役は校長先生がして、アシュマは相手をただ見つめていた。

特にハルマの気の色を見ていた。

動揺の様子は全く見られない。

却ってそちらの方が、アシュマにとっては不気味だった。

「はあ、はあ、はあ。アシュマ先生？　こんなものでしょうか？」

校長は大分力説したらしく、肩で息をしていた。

「は？　……そうですね」

「また聞いてなかったのですね。あなたにも問題ありますよ。アシュマ先生。では裁定はどうしますか？」

「レンヌ君の反省の度合いがはっきり見て取れます。ヘブンズ・ソードは、使い方を誤りさえしなければ安全な召喚魔法です。その点から鑑みて、三日ほど私に付いて、ヘブンズソードの使用方法を学

ばせます」

ホッと一息つくレンヌ。

「だがそれ以外は、誰とも口を利いてはいけないし、部屋で謹慎だ。
「それは今からですか？」

「明日の朝からで良い。さて、問題なのはハルマ君、君だ。何故魔法が出来ないと嘘を吐いた？」

「じゃあ、あの試験会場で、ブラック・ホールを披露して、会場に大混乱を起こせと？」

「ブラックホールは、ある種究極に近い魔法だ。そこに至るまでには相当な魔法の鍛錬と知識量が必要だ。発表するのはブラックホールでなくともよからう？」

「では、次からはそうします」

「先生、裁定は？」

ミス・ケリーが聞いてきた。

「キュポア嬢との交際、永久禁止」

そう言った時、初めてハルマに動揺の『色』が見えた。

それはかなりショックだったらしく暫く動揺していた。

これはどういう風に、解釈して良いものかと思案していた時、

「アシュマ先生ふざけていないで、真剣に答えてください」

ミス・ケリーに叱られた。

「そうですねあ各科目の減点三十点。赤点ラインを超えたものはその科目に対するレポートを提出。俺も目を通させてもらうからな。期限は冬休み明けまで。いい加減なレポートを提出してみろ？二度とキュポアに会えないようにしてやる。覚悟しておけよ？」

「それって、殆ど全部の教科じゃあ……」

ハルマは形ばかり嘆いて見せた。

「本性出して頑張るしかないなあ。それとブラックホールは禁止。使ったら即退学」

「はい、分かりました」

「しかし、そうまでして、おのれを隠さなければならぬ理由と言

うのは、何だ？」

「……………」

ハルマは何も言えずただ沈黙を守るのみであった。

「ハルマどうじゃった？」

キュポアが心配げにハルマに結果を聞く。

「全科目減点三十点です」

「それでは、全科目落第ではないか！ 怪獣め何を考えているのじゃ！？ ちょっと言ってくる！！」

「キュポアさん、待ってください。それではキュポアさんに害が及びます。そうなるのは僕の翻意ではありません。どうかここは僕の顔に免じて、許してくださいませんかでしょうか？」

そう言った、ハルマの顔は、どこことなく寂しげでキュポアの胸を、くすぐるモノがあった。

「分かった。そなたはわらわの命を救ってくれた。せめてわらわからの褒美じゃ。受け取れ」

そう言ってキュポアはハルマの頬にキスをした。

ハルマはきよとした顔でその場を動けなかった。

リイナもレンヌをこちらにむかしてキスをした。

「矢張り、私の危ない時に助けてくれるのね。嬉しい」

そう言ってリイナは下に俯いてしまった。

夜もとつぷりと暮れた。

両カップルはそれぞれ彼女たちを寮まで送った。

キュポアとハルマはどこことなく硬い。

先程のキスの後、ハルマは何を語ってよいのか、分からなくなっていたからだ。

そして、とうとう頓珍漢な事を聞いてしまった。

「キュポアさんは、僕の事が好きなのですか？」
と。

キュポアは真顔になり、（と、言っても暗くてよく分からなかったが）そして真っ赤になって言った。

「好きでもない奴に、こんな事をするわけがなろう……」
と。

「有難うキュポアさん」

ハルマは後ろからキュポアを抱きしめた。

キュポアは余りの事に、心臓の鼓動が早くなるのが分かった。
ハルマは感動した様子だった。

それが分かったと、キュポアは暫く、なすがままにしておこうと思
った。

スコラにサイコ・フライヤーが来た。

ノリトレアの鑑識班が乗っていた。

ハッチが開く。

早速鑑識班長とその護衛班長、そしてムラサキが出頭した。

「キララ・ムラサキ、以下四十五名出頭いたしました」

「キララ？」

「さも、名前があったのかって言う顔を、していますね」

「ああ。それでは概要を説明する」

「『ああ』の一言で澄ますんですか？」

「『ああ、おどろいた』。これで良いか？」

「ぶう」

ムラサキは気分を害したようだ。

アシユマは概要を説明しだした。

先ず生徒が洞窟で水トカゲに襲われた事。

水トカゲは普段は大人しい生き物で、人為的に興奮させられた形
跡がある事。

その証拠は自分の手元にある事。

また、水トカゲの試験は、当日職員会議で決められていて、外部には漏れた形跡が無い事。

内部犯なら、背後に何らかの組織が背後に関わっていないか、等を留意する事。

つまり、教職員について、極秘裏に素行調査をしてもらう事。

また、その証拠を押さえ様とした時に、ロボットだかマシンナリービーイングだかに、襲われているので危険に留意する事。

以上を伝えた。

「部下を使います」

ムラサキが言った。

「うむ。分かった」

アシュマが応じる。

「あの、何か仰っていただけたら、頑張れるような気がするんですけど……」

ムラサキは目を伏せて言った。

「どうやら、アシュマに気があるようだ。」

「死ぬな。どんな事があっても五体満足で生きて帰れ。任務など二の次だ」

「でもこの任務は主命で、どんな事があっても、全うせよと……」

「アベニかそれともアルステインか？」

「いえ、直属の上司です。あ……怒らないで下さい。決して悪い人じゃありませんから。何でも真面目にとっちゃう人なので」

「お前も、そうだな」

「あら、そんな」

「兎に角死ぬな。これだけは言ったぞ？」

「はい」

成績発表である。

職員室の前の廊下に、上位二十名までが発表される。

上位二十名までに一度でもランクインしたものは各国の防衛省や、良質なギルドからのお声が掛かる。

だから、みな必死で勉強をする。

中には、とある国の将軍格にまで出世した者がいるそうだ。

そろそろ、各国もこの『魔導法術』なるものの威力を認め始める頃だろう。

これから先はスコラ同窓生同士で戦う時代が来るだろう。

アーチェルや、キュポアはまだこの事態に気付いてはいなかった。ともあれ、成績発表である。

一位は何とレンヌであった。

召喚魔法ヘブンス・ソードが認められたのである。

二位はアーチェル。

何と筆記試験でケアレスミスを犯していたのである。

二点差に泣いた結果となった。

ジーク十二位、ミカは十六位。

そしてリイナとキュポアは？

彼女等の成績は？

リイナは八位、そしてキュポアは何と二十位。

何とかギリギリセーフといった所か。

実は成績二十位以内に入ると報奨金が出る。

一位は金二十万。

そこから順位が下がるにつれ金一万ずつ下がっていく。

キュポアは金一万になるわけだ。

だがキュポアにとってこの金一万は貴重だ。何せ数少ない現金収入のチャンスなのである。

ところで、アーチェルはこれで単位を二十コマ取った事になる。

あと二十コマで卒業の権利を得る事が出来る。

約一年半。早いものだと思っていた。

上手くすれば再来年の卒業式に出れそうだ。

アシュマは早めに、レキシタニアに帰ってきていた。

どうせ今は試験休みだ。

タイン祭から年末年始を、ミカの家で執り行うわけだから。

一日足が出る。

それは大目に見てもらった。

と、言うわけでアシュマの道場は、十二月の二十三日が、道場納めとなる。

今まで、アシュマがいなかった分だけ、ぼへっつと練習をしていた者は、アシュマが来ると直ぐに看破されてしまう。

そういう生徒には、アシュマが念入りに鍛え上げてやる。

そういう生徒の中には、アンの尻ばかり追いかけて、口説き始める生徒もいた。

アンも口説かれて悪い気はしないのだが、アシュマに操を立てているので、そういうことは一蹴されてしまう。

そこでそんな生徒を見つけると、これも念入りに稽古をつけられる。

ま、アシュマの場合は、意地悪くは無いので最後はみな笑って稽古場を出る。

だが、アシュマの道場が、盛況で活気付いているのは、古参の人間の叱咤激励であったり、根気強い指導の賜物であったりする。

そして今日も稽古が始まる。

基礎の足腰を鍛錬する稽古、形稽古、組み稽古。

その度にアシュマは見えて周り、その人物の悪い癖を矯正して行った。

時には、アシュマ自体が、組み稽古の相手をしてやった。

して、今日がその道場納め。

「なに？　よい猪しの肉が手に入ったとな？」

アシュマは言った。

「はい、でも保存するにも大きすぎて……」

アンが応える。

「ならば今夜は猪ナベにしよう」

「それでも余ります。多分。」

「道場の皆で食おう。それでは少ないか？」

「大丈夫かと思えます。旦那さま」

「そうか。皆聞いてくれ。猪肉が手に入ったそうだ。うち一人では手に余るらしい。猪ナベにしようかと思っている。ちよいと寒いが外でやる。参加のものは済まんが家から鍋持参でもう一回戻って来てくれ！」

アシュマはどれどれとその猪肉を見に行った。

それは体長二メートルはあろうかと言う大猪三頭の死骸だった。

「『ガンロク』だな？」

「はい、午前中に。『お師匠によろしく』って」

「それだけか？」

「はい」

「正式に弟子にしてやるから道場に来い……って伝えたか？」

「伝えましたが、逃げるように去っていきました」

「気の良い奴なのになあ。なあ、アン。あんなのが旦那さまだと、優しくしてくれるぞ？　きつと」

「そうでしょうね。きつと。でももう少しこのままでいさせてください。アシュマさまへの想いが深く沈んでゆくまで」

「そうか。……さて、さばくか」

「その、さばくの、俺にやらしてクンろ」

「ガンロク！」

「ガンロクさん！」

「さばくの忘れとったでな」

ガンロクの巨体はここに死んでる猪よりも大きい。

見たところ二メートル二十センチはあるだろうか？

大きな図体に似合わず目元が優しく、気だての優しい青年だった。時折道場にやってきては、アシュマと対戦し負けて戻る。

来るたび来るたび手筋の悪い所をアシュマが直してやった。

また、その度に自分で何かを工夫してくるものだから、我流だが、かなりの腕になっていた。

他の道場だと免許皆伝と言うところだろう。

アシュマの道場は、目録や免許などと言う概念が無いから、いたっていい加減なのだが、ガンロクには、近々何かしらのものを与えようと思っていた。

そのガンロクが、長さが小刀ほどもある大鉈で、器用に肉を捌いていく。

大タライ六つ分、山盛りの猪肉が取れた。

「じゃ、俺は、これで」

「さて、ガンロクお前も一緒に食ってゆけ」

「ンだども、俺」

「お前の隣に、アンを付けてやる」

「これ、旦那さま！」

「いいんだ、俺、さっきの話、聞いちゃっただ。アンさんがアシュマセンセのこと忘れるまで、待ってるだ」

「そう……」

なぜかアンは、寂しそうな返事をした……。

猪ナベパーティーは盛況を催した。

アシュマも大いに、吞んで食べた。

甘辛のミソナベで正解だったように思う。

また、肉が、口の中でとろけそうなのである。

ミソと言う調味料はイーハン原産で、シヨウユと一緒にいまや世界中に売られている。

イーハンの貴重な外貨取得手段だった。

それよりなにより、アシュマがこれらの調味料を甚く^{いた}気に入っていた。

いわば、故郷の味なのである。

肉じゃが、味噌汁、煮っ転がし、……。

時にはアシュマ自ら台所に立って、アンに造り方を教える。

勿論、アーチェルにも、叩き込んだ。

結局ガンロクは、アンの隣で、酌を受けて照れて小さくなっていた。

アシュマは、前王エドスとも、飲み交わしていた。

そして、アーチェルやキュポアも、楽しく元気にやっていることを告げた。

その夜は皆で食し呑み、大いに楽しんだ。

その夜の内に黒龍号は一路スコラへと飛んだ。

アーチェル達を回収するためである。

朝方には黒龍号はスコラの校庭に下りた。

「アシュマさまあ」

アーチェルが手を振っている。

勿論アシュマに聞こえる筈もなく、見える筈も無い。

アリシアナは、黒龍号を庭の真ん中に着けた。

ハッチが開く。

アーチェルが真っ先に飛んで行って、アシュマに抱き付く。

「アシュマさま」

一言言って、軽く口付けを交わす。

「お邪魔しますあす。今年も宜しくお願いしまあす」

ミカが言った。

「ミカさん、おかしいわ。お邪魔するのはこちらの方。今年も宜しくお願いしますね？」

「あら、でも送っていただけなんですもの。宜しくお願いしなくちゃ」

そこへ、

「済みません。公務です。間、通って構いませんか？」

少女が言ってきた。

ムラサキである。

アーチェルは、

「あら？」

見た事があるような顔をする。

ムラサキかアシュマのところに報告に来た。

「何か出たか？」

「スチナ・アガネと言う召喚士教諭が、最近やたら羽振りが良いです。男遊びも激しいです。下手すると使われるだけ使われて、殺される可能性も有ります。水トカゲを凶暴化させたのは別に実行犯がいるのでしょうか。この手の弾は手に入れるのが特殊らしく、調べればどこから入手したか分かるそうです。ロボットだかマシンナリービーイングだかの破片は見付かりませんでした」

「この件はアルステインに報告したか？」

「はい」

「で、奴の見解は？」

「多分自分の失脚だろうと言っておられました」

「何故そんな事を？」

「多分、スコラの権益を一手に握る為だと思う、と仰っていました」

「誰が？」

「それは、口をつぐんでおられました」

「オロか……」

「は？」

「いや、何でもない。スチナ・アガネ召喚士教諭の身边をよく洗うように。いざと言うときには命を助けてやって欲しい。あれでも哀れな女なのだ。彼女は」

「分かりました。命に代えても」

「分かっておらんな。命に代えなくて良い。ただ全力を出せば良い。死ぬな」

「それ程までに私の命を……分かりました。私が、命に代えてもお守りするの、アシユマ様の危難の時だけです」

「何でそうなる？」

そしてムラサキは去り、黒龍号は一路、イーハンへ向かった。

この年末年始をミカの家で祝うためだ。

第五節 マスケド

イーハンへ向かう途中、ノリトレアの『紅龍』とランデブーする。このノリトレアの『紅龍』、アルステイーンの専用機である。

このクラスでは最高の速度と最強の攻撃力を誇る。

なにせ、戦艦クラスの魔導石ユニット一単位を導入し、六人の超特級念導力者六人を配し、攻撃、防御、推進をこなしていた。

武装は艦首主砲、百センチ念導式プラズマキャノン×二門、回転式レールキャノン二門六基。

速度は音速三を軽く超える。

電算化も進み、この紅龍は単体で艦隊の旗艦能力も備える事が出来た。

『アシュマ君いますかあ？』

「なにやらアルステイーン様より、連絡がは言っているぞえ？」

そう応えたのはキュポアだ。

通信席に陣取っている。

アシュマがインカムを取る。

「何だ、アルステイーン？」

『今年も、宜しくお願ひしますねえ』

「それは、ミカに言え。俺だって、宜しくと言う立場だ」

「私が何でしょう？」

ミカが来た。

「アルステイーンの挨拶だ」

「え？ そんな私、大したこと出来ませんし、家はぼろ家で、汚いのに、何のお構いも出来ず……」

インカムからミカの声は拾えたらしく、

『ミカさん大丈夫ですよ。今年と来年も宜しく〜』

それにしても今年のラインナップも見事なものだった。

男性陣はアシュマ、アルステイーン、オルバニアン、レンヌ、ハ

ルマ、ジーク、ダン・コクレト、そして生まれたてのアシユオン王子
女性陣はアーチェル、ミカ、キュポア、リイナ、アルミナ、アン、
アリシアナ・コクレト、アリサ・コクレト、エファール、そしてサ
クラコ。

今年も大所帯だった。

今年は、ミカの家の敷地内にある、森の一部が切り拓かれていた。
どうやらそこに着陸しろと言うことだった。

事前に二機着陸する旨を伝えていたので、かなりの広さが切り開
かれていた。

無事に着陸する、二機のサイコ・フライヤー。

そしてミカは一目散家へ向かった。

『おどさくん、おがさくん帰って来ただよ』

その頃になって、一行はミカの家に着く。

『はい、はい、はい。今年も待ってただよ。どうぞ入っておくんな
まし』

『ミカさんのお母さん今年も宜しくお願いします』

驚くべきことに、アーチェルがイーハン語を使ってきた。

この日の為に、勉強してきたらしい。

日常会話ぐらいなら、大丈夫だそう。

『あんれま。お姫さん、喋れるのけ？』

『多少は……』

そう言って、照れた。

そこへミカの父親がやって来て、

『どうも、姫様もはるばる遠路を通って、こげな、ぼろ家によくお
いでなさった』

そう言った。

『いいえ、おじ様もご健勝で何よりです。それに今は王女ではなく
一人の人妻と相成りました。今後とも宜しくお願いいたします』

『ひよっ！ お姫様が喋った！ いやいやいや、目出度えこって。恐悦至極たあ、この事だあ。先ずは上がってくんろ』

そう言って、ミカの父親は頭を垂れた。

『はい』

『今年も邪魔するぜ』

そう言って上がろうとしたのはオルバニアンだった。

一緒に標準語で

「お邪魔します」

アルミナが上がっていった。

『まった。わっば』

『わっばって俺のことか？』

オルバニアンが言う。

『そうだ。聞けばお前え、ノリトレアの王子様ちゅう話でねえか。それを仮にも人様の家に上がりこむ時に『今年も邪魔するぜ』ちゅうのは、どういうこっただ？ 人様の家に上がるときにこそ、その人の人となりがわかるちゅうもんだべ。違うか？』

『わかった。済まなかった』

『んだ。人間素直なのが一番ええだ』

「また、叱られて、オルバニアン。アタシ恥かしいよ」

そう言って二人は上がって行った。

『ご主人』

そう言ったのはアルステインだ。

『へえっ！ アルステイン様』

『上がるがよいかな？』

『へえっ！ もってえねえこって』

『親父！ さっきとえらい変わりようじゃねえか！』

オルバニアンが怒る。

『あつたり前だ！ おめえにやもつと人生修行をせねばな。尤もそれをいうのは悪たれじゃがな』

アシュマが扉の向うでびくっ！ と肩を震わす。

「今年も宜しく願います」

エファールも続けて言う。

アシュオンを抱いている。

『おお、御后様。可愛い赤子を抱いていらっしやいますな』

「はい。アシュオンちゃん。良い子でちゅねえ」

次に登場したるは、レンヌとリイナのカップルだ。

「よろしく頼むぞ」

と、リイナが言えば、

「リイナそんな良い方良くないよ。よろしく頼みます。ご主人殿
レンヌがフォローする始末。」

『わっば。こちらのお方は何と言ってる？』

オルバニアンを捕まえて、

『宜しく願いますってさ』

オルバニアンはそう答える。

次は、ハルマとキュポアのカップルだ。

「主人、宜しく願いますぞえ」

キュポアが言うと、

『宜しく願います』

ハルマが言った。

『へえ。よろすく』

「流石、ハルマ。イーハン出身じゃのう」

「お褒めに預かり光栄の至り。くすっ」

『おめえさん確か……どっかであったことねえだか？』

ミカの父親が訊いて来た

『さあ？ 初対面ですよ。おじさん』

『ふっふむ………』

主人は納得していないようだった。

『よ、宜しく願います。お、お義父さん！』

ぎこちなく挨拶したのはジークだった。

イーハン語も何とか覚えてきたらしい。

『う、うむ……』

ミカの父親も、何を言って良いのか、分からないらしい。

『あら、いらっしゃい。シーク君。まあまあ、ますます男っぷりが上がってえ』

などとミカの母親は喜んだ。

そして、次に来たのがサクラコだった。

『ご主人。宜しく願いますわ』

『も、もしかして、サクラコ・セタ様でねえか？』

『その通りよ』

『へへっ！ セタ様にはご機嫌麗しく、恐悦至極に存じますだ』

『堅苦しい挨拶は嫌。今日はプライベートで来たのよ。そんな恐縮がらないで』

『へへっ！』

とはいっても、サクラコはこの国の家老の娘である。

ノブ（ミカの父親）にとっては、一番の雲上人であった。

この時点では……。

「お邪魔します」

そう言って入ってきたのは、アンだった。

『お、お女中殿。去年は家の『かかあ』が大変世話になったって言うていたでよ。先ずは上がってくんろ』

「大人数で済みません」

そう言って眼の前に来たのは、アリシアナ・コクレトとその家族である。

『あんれまあ、めんこいこだなあ』

ミカの父親が目細めたのは、アリシアナの娘アリサである。

「『めんこい』ってなに？」

アリサが訊く。

「かわいいって事だよ。アリサ」

答えたのはアシュマだった。

『この悪たれ。また来たか』

『今年もご厄介になります』

『ああ、厄介だ！』

『おどさん！ アシユマ先生ば、もう、アーちゃんのご主人だがんね。言葉遣いさ気いつけねば、駄目だがんね！』

ミカが釘を刺して行った。

『……ま、あがれ』

『……はい』

『しっかし今年は大騒ぎだあ。アルステイーン、ノリトレア国王様を始め、サクラコ・セタ国家老ご令嬢、アーチェル様に、キュポア王女、挙句の果てにはレンヌ・アールヌー国王子まで……ここでテロでもされたらと思うと、ちびってまうでよ』

と、本音を漏らした。

今日はタイン祭イヴである。

タイン教の開祖タインの生まれた日の前日である。

タイン教を奉じる国ならば、この日とその翌日の聖誕祭の日は大変神聖なものである。

が、この国はどちらかというと、なぜかその前日に祝い事をし、七面鳥の代わりに鶏を食し、子供がいる家では、プレゼントを子供が寝た後、枕元に忍ばせておく。

また、恋人同士は愛を確かめ合う日でもあった。

イーハンのタイン祭は凡そ、そのようなものと、ミカが皆に言い渡した。

タインを奉じ、タイン祭を奉じる国の連中……特にコクレト一家などは、目を白黒させて聞いていた。

普通タインを奉ずる国は、その日には教会で賛美歌を歌ったり、家で静かに祈りを捧げたりするものだからだ。

けっして、祭りと言うことはなかった。

が、この国はそういうのではなく、一種の娯楽の日にしてしま

った。

元々この国は、古くから、他国から色んな物を吸収しては、都合よく自分のものにしてしまう寛容さがあった。

それがこう言う形で出たのだろう。

それが証拠に、デコレーションケーキまで出る。

キュポアやリイナ、アリサなどは喜んだ。

尤もリイナは喜んだ後で、しまったという顔になり、さも自分は興味が無いぞと言う態度をとった。

「乾杯！」

宴は始まった。

皆楽しそうだ。

アン特製の、チキンのもも肉の照り焼きを、皆かぶりついていた。ケーキもある。

他には、アンが腕によりをかけて作った、料理群がある。

ご馳走だ。

キュポアは、無遠慮に、ケーキを大きく切り取って、ケーキにかぶりついていた。

「うーうーん！ 満足じゃあ」

キュポアが、満足げな声をあげる。

「これ、キュポア。あなた一人で食べるのではないのだから、もう少し遠慮なさい」

アーチェルが、妹に注意した。

「じゃが、姉様。遠慮せよといっても、わらわ以外に食べる者は、アリサぐらいなものじゃろう？ 残すほうが勿体無いというもの。ならば大目に取ってもよかろう？」

「おっと、俺もケーキ食うぜ！」

とは、オルバニアン。

彼は大の甘党だった。

「あつ、それならアタシも」

アルミナも名乗りを上げた。

リイナは焦った。

このまま名乗りを上げなかったら、ケーキに有り付けないかも知れない。

仕方なく、おずおずと手を上げ、名乗り出ようかというとき、

「アリサも！ アリサも！」

最終兵器が名乗りを上げた。

これの前後で名乗りを上げるのには、相当の勇気が要った。

「リイナはいらないのですか？ 確かリイナも甘党だったはず」

助け舟を出したのは、レンヌだった。

「しょ、しょうがないわね。私も消費を手伝ってあげるわ」

本当は嬉しいくせに、素直じゃないリイナである。

レンヌもそこ辺は分かかっていて、何も言わない。

キュポアは、さっき大量に自分の分を取ったので、今回は振り分けられなかった。

「えゝ、なぜじゃあ？」

「さつき、あんなに食べておいて、当然です」

アーチエルが諫める。

「えゝ、もっと食べたいゝ」

「我儕言わないの」

「ゝゝゝ」

「キュポアさん、良かったら僕の分を、差し上げましょうか」

「本当かハルマ！ お主本当に良いやつだのう……い、いや、その好意に甘えるわけには……いや、しかし……」

「ゆっくり考えておいてください」

大人たちは晩酌に入った。

子供たちは……と言っても、もう十ゝ四、五歳にまで達した二人

はケーキとお茶に興じていた。

（結局、キュポアはハルマの分を貰いリィナはケーキにありつけた）

コクレトの一家はアリサが寝てしまったので辞去した。

サイコフライヤー黒龍号に帰るのだ。

『しかし、あのだらしなさそうな青年が、いまや一国の王様とは、ほんに御見逸れしましただ』

ミカの父親が、アルステインに言った言葉だ。

聞き様によつては、かなり無礼な言葉である。

そこら辺は今日は、無礼講と言う暗黙の了解があった。

『そこら辺の事は、どうぞお気遣いなく』

『お二人目は、いつ作るのです？』

『そこは后と相談しないと、なんとも』

『何て言つてゐるの？ ヨデイ』

エファールが訊いた。

「ん？ 二人目はいつ作るのかつて？」

「あらやくだらお父さんたら、もう」

『で、悪たれ。お前のところはいつ作るだ？ あんまりつくらねえ』

と、奥方様が寂しがるべ。それが、男の甲斐性ちゅうもんだ』

『ミカさんのお父様、私はアシュマさまさえいけば寂しい事は何もありません。ご心配には及びません。有難う御座います』

『まっこと、良く出来た嫁さんだあ。おめえにや勿体無いくらいだあ』

結局これが言いたかつたらしい。

アシュマは、

『はあ』

そうとしか言い様がなかった。

晩酌の輪の中にはハルマも入っていた。

彼の年齢は十九だそうで、この世界では完璧に成人扱いとなっている。

ミカの父親は、そのハルマを捕まえては、『おめさん、たしかどつかで……………』記憶の糸を手繰っていた。

そのミカの父親も酔いつぶれ、会もお開きとなった。アルステイン一家も紅龍号へ暇する。

大人たちは布団を敷きに、二階へ上がる。今年も部屋を区切っている襖を取っ払い、横に広いぶち抜き部屋を作った。

だが今年は、アーチエルとアシュマは黒龍号へ戻った。今日がタイン祭と言うこともあるが、アーチエルがスコラに復帰してからと言うものの、暫くアーチエルは『抱かれて』いないのだ。そういう訳で、アーチエルは、アシュマと二人きりになれる黒龍号のベッドを、選んだのである。

「そう、臍下丹田に気を練って……」
「こうですか？」

アシュマは気の練り方をレンヌに教えていた。召喚魔法ヘブンス・ソードの取り扱いの為である。ヘブンス・ソードは見た目が派手な通り、気の消費量も桁違いに多い。

それで、現行空間では不安定な召喚となる。なので気の安定した供給量の方法を学ばせているのである。これを学ばないと、一気に気を浪費し、下手をしたら命に関わる危険な召喚魔法なのである。

「すうーっ……………ふうーっ」

「そう、鼻から吸って、口からゆっくりと出すような感じで……」
キュポアもレクチャーを受けていた。

キュポアの召喚魔法『ガーディアン』も念を大量に必要とする。
現行のままではこの空間内で行動できるのは精々三分が限度となる。

それを何とかして伸ばそうという試みだ。

それを面白くない眼で見ていた者が約二名

一人はリィナだ。

恋人が、親友と一緒に稽古しているだけなのに、それを見ているだけで、嫉妬してしまう、自分に嫌気も差してはいたが。

素直に、自分も輪の中にはいれば、良いものを。

あのハルマのように、と思う。

こう言うときの、ハルマの感情表現はストレートそのもので、自分もトレーニングの輪にすぐさま入る。

非常に素直だ。

いや、アシュマに言わせれば、素直に見せているだけかもしれないと、少し斜に構えた見方をしてしまう。

端的に、言ってしまうと『怪しい』のである。

何がと言うわけではないが、アシュマの勘がそのように告げているのである。

が、パーティーに害を及ぼす、というのではなさそうだ。

こう言うときの、アシュマの勘は鋭く、滅多に外さない。

ハルマには、もう一つの顔がある。

良くも悪くも、である。

アシュマはこう結論付けた。

ところで、リィナであるが、結局はトレーニングの輪の中に入
た。

一人だけ見ているのが、馬鹿らしくなったからである。

だが、トレーニングに入ってよかったと思った。

レンヌが自分に微笑んでくれたからだ。

すると、つい嬉しくてリイナも微笑みで返す。
更にレンヌが笑ってくれた。

リイナは嬉しくなって、トレーニングに身が入った。
珍しどころが、トレーニングに参加している。

アリシアナ・コクレトの娘、アリサだ。

「ちえーかたんでんにちからをこめて……ううん」

「そんなに力まなくて良いんだよ、アリサ」

アシュマはレクチャーしてやる。

アシュマは、こんな時は、老若男女を問わず、アドヴァイスをしてやる。

時に、こう言うトレーニングは、早ければ早いほど開眼する事が
ままある。

「アリサ、お腹の中から温かい物が、広がって行くイメージをする
んだ」

「温かいもの、温かいもの」

「そして段々掌に集まるようにイメージして」
なんとアリサの掌が淡く光り始めた。

「そのまま、そのまま……」

アシュマは適当な石ころを見つけに行った。
その間にも、アリサの掌は輝きを増している。

アシュマは饅頭より、二周りほど、大きい石を見つけてきた。

「さあ、アリサ、掌に集まった温かいものを、この石にぶつけてご
らん？ ゆっくりで良いからね？」

「うん」

素直な反応だ。

実に可愛い。

アリサは掌に集まった気を石ころにぶつけた。
それはかなり強力な念だったらしく、石ころは完全に粉碎されて
しまった。

それにビックリしたらしく、アリサは泣いてしまった。

アシュマは、アリサの手にヒーリングスフィアを掛けてやりながら、アリサをだっこしてあやした。

「諸君もここまで出来れば上出来だ」

そこで、気を吐いたのが何とハルマだった。

まるで、自分への疑念を晴らすかのように、ここでは積極的に行動していた。

全体から気が膨れ上がるのが、傍目で見ても分かる。

「ハルマ。凄いじゃないか。念の強さから言ったら、お前ほどの奴を見た事が無いぞ？」

「はは？　そうですか？　それ程でも……」

「いつもそのくらい素直に正体を表せてくれると、こちらとしてもやり易いんだがな？」

「は？」

「まあ、そのくらい念が強ければ、念導境界面で人を二三人囲えそうだな？」

「アシュマ先生。僕にはそこまでの力はありませんよ」

今、彼は『あるもの』を捜して大洋を航行していた。

彼は海へ艦隊を遣わし自ら指揮を執っていた。

正に海の上を行く船で航海していた。

（たまには海の上も航海してみるのも良いものだ）

彼はそんな事を思いながら、ブリッジにある、特設の自分の席に着いていた。

とある諸島に、彼の目指す、『あるもの』があったのだ。

彼は、いずれ、かつての旧友アルステイン・ノリトレアと、軍事的にぶつかる事を予測していた。

その時に、彼の親友アシュマ・アトーが、出てくることは必至。その時の備えとして、『それ』の力が、どうしても必要だったのだ。

「ビート・バーンズ諸島まで後二時間！」

「ようそろう」

そんな言葉が、ブリッジを飛び交う。

『それ』は、彼の覇道に必要なものだった。

果たして『それ』は、その諸島のどこにあるのか？

アルステインは、帰って仕事をすれば良いものを、紅龍号を仕事の場にしてあれやこれやと政務をこなしていた。

そして、普通の政務だけでない、裏の政争劇の指令もここから出していた。

そんな中に、一つさり気無い情報が紛れ込んでいた。

レキシタニアの後、アリア・アップルトンが、実兄オロ・エバスが病気を発症したため

急遽、実家のオロ・エバス国に舞い戻った。

と、言う事だった。

イーハンの国は、タイン祭が終わると、すぐさま正月ムードになる。

それは、この小さな島タマンもそうで、気分はもう正月だ。

その正月はあつという間にやってくる。

明日はもう正月だ。

即ち今日は大晦日になる……。

女連中が今晚の年越し蕎麦と明日の正月の為のお節を用意していた。

男連中はのへーっとして、まったりとしていた。

女連中が仕事を終えたとき、時は夕刻を迎えていた。

「あー。疲れしました。アシュマさま」

「おつかれ。アーチェル」

「私も疲れました。はあ」

「お疲れ。アン。アンが疲れるとは珍しい」

「家に帰ったら驚きなされ。料理のレパートリーが増えました」

「そうか。アーチェルは？」

「私も覚ええました。」

「そうか」

「男の方々はよう御座いますわね。まったりのほほんと」

アーチェルが皮肉を言った。

いや、アーチェルでなくとも、言いたくなるだろう。

「それが、このイーハンの部下が何やら耳打ちをしている。
仕来りだ」

アシュマが、言い訳がましく言った。

「本当にアーチェルの言う通りだよ、まったく」

アルミナまでもがぼやいた。

「ぼやかない。ぼやかない。仕来り仕来り」

「もう！ オルバニアン！」

アシュマ達はTVを見ながら蕎麦をすすった。

アルステイーンの部下が何やら耳打ちをしている。

「わかった。下がれ」

アルステイーンは言った。

そして、アルステイーンがアシュマのところにやって来て、小声でアシュマに囁いてきた。

「アシュマ君。僕等は、このままノリトレアに帰らなければ、ならなくなりましな

なきました」

「何か出来したか？」

「そうなるかもしれません。バカンスもこれで終わりです」

「何が起きた？」

「それは今は何とも」

「今直ぐ帰るのか？」

「今直ぐです」

「見送りは？」

「いりません」

「皆に何と言えど？」

「急用が出来たとでも」

「そうか。わかった。他に何かあるか」

「うゝゝゝん微妙ですね。この国を早く離れろ、といえどそうなの
ですけれど……まだ、はっきりとした要素も無いもので……」

「そうか」

アルステインとエフアールは、急用が出来たとミカの父親に断
りを入れると、ひっそりと誰にも悟られる事なく家を出た。

これが、驚くべき事態を告げる事になるうとは、誰も予測が付か
なかった。

この後、アーチェル達は、皆、晴着に着替えて去年と同じくジン
ジャへとお参りに行った。

このときアーチェルが、

「去年みたいな騒動は、無しですよ？ 旦那さま」

アシュマにそう言って、アシュマの腕に組み付いてきた。

「この俺も、そうそう騒動には巻き込まれたくはないでな。去年の
二の舞は御免だ」

そうやって、楽しく談笑するアシュマとアーチェルを見て、キュ
ポアは隣を歩くハルマを意識した。

何げにハルマを仰ぎ見ると、ハルマはにこやかに微笑して返して
くる。

キュポアはハルマの事が、好きになっていた。

これは最早ゆるぎない事実であった。

だがハルマはどうか？

キュポアのことは、好きなのだろうか？

今まで、無邪気に自分の感情のままに、ハルマに話をぶつけていたが、ハルマの気持ちはどうなのだろうか？

アシュマに、宣戦布告めいた言葉を吐いたハルマであるが、真意はどのようなだろう？

最近、よくそう思う。

脇を見ながら歩いているものだから、キュポアが階段につまづいた。

「あっ」

キュポアが、軽く悲鳴を上げた。
転びそうになった。

そこへ、ハルマがキュポアの腕を掴んだ。

「あ」

キュポアが短く言葉を発した。

「僕の大事にな方に、怪我をされては困りますからね」

（え？）

キュポアは我が耳を疑った。

ハルマは照れているようだった。

そのまま二人は腕を組み、二人とも照れながら歩いて行った。

ジンジャのケイダイに達し、トリイを潜り、ヤシロに向かう。

それほどケイダイは混んではない。

屋台などを眺めつつ賽銭箱を目指す。

鈴を鳴らし、二礼、二拍手、一礼。

キュポアは無意識に願った。

ハルマとの事を。

（どうぞ、ハルマと上手く行きますように）
と。

願った後で、

（わらわは一体何を考えておるのじゃ！？）

頭を左右にぶんぶん振った。

そういうハルマは一体何を考えているのだろうか？

しかし、それにしてもアシュマ（怪獣）への想いは、どうなったのだろうか？

キュポアは、あれほど怪獣に恋焦がれていたではないか？

キュポアは、ハルマを横目に仰ぎ見た。

ただ、ハルマは静かに祈っているのみだった。

キュポアたちが家に帰ってきた頃、大変な一報が入ってきた。

このイーハンで、クーデターが起こったのである。

「矢張りオムロでは止められなかったか」

ハルマは静かに呟いた。

その呟きを聞き得たのは、アシュマ唯一人だった。

この所、イーハンの政情は不安定で、軍部の動きが怪しいのは確かだった。

家老のシュニク・インジャが、先のバヴェル紛争のような事態に陥った時、対処が出来ない。

故に、軍備を増強するべきだと、主張した。

それに対してもう一人の家老、オムロ・セタ（サクラコの父親）はそのような軍備増強が却って戦乱を招く、と言って対立した。

軍部と強いつながりを持つシュニクは次期国王に当たる、シュンマ・イーハニアの従兄弟のイルコ・イーハニアを擁立し、ついに暴発、クーデターを起こした。

だが大方の見方では軍部の一部が暴発し、それが鎮圧されてお仕舞いのはずだった。

ここまで、クーデターを起こす規模の軍の出動は、予想していなかった。

だが、クーデターは成ってしまった。

後に分かる事だが、これはどこかの国の後押しがあって、成った

クーデターらしい事が分かった。

そして、次期国王のシュンマ・イーハニアは行方不明だった。

正月ムードも何もなくなった。

軍主導部の放送がどのチャンネルを見ても流れていた。

「あの狸め、これを掴んでいたか。なら我らも、一緒に連れて行けば良いものを」

アシュマは、アルステイーンを想い、苦笑を漏らした。

「アシュマさま。これからどう致しますか？」

アーチェルが不安顔で聞いてきた。

「基本的には我らに関係ないこと。と、言って、休み明けにスコラに戻るも、安全とはいえない」

「とは？」

「皆には言わなかったが、スコラにて、マシンナリービーイングなどによる小規模の小競り合いがあった。皆、オロ・エバス社製のマシンナリービーイングだ。このような国際関係が緊張している時、スコラに帰るのは得策でない。これから先は俺の勘だが、もしかしたら今回のクーデター、裏でオロが糸を引いている可能性があるかも知れんからな」

「まさか、そこまでは……」

「まあ、俺は今回の件、根は一つと見た」

「では、どうしたら？」

「ノリトレアに行こう」

「アシュマ先生、わたくしは、お父様の安否を確かめたく思うのですが……」

サクラコがアシュマに訴えた。

「止めておけ。わざわざ捕まりに行くようなものだ」

「ですが……」

「駄目だ」

アシュマが断じた。

『悪たれ。結局、お主どうするんだべ？』

『親父さん。ここで一晚休んだ後に、ノリトレアに行きます。それまで、ご迷惑をお掛けします。申し訳ありません』

『正月ぐらい、ゆっくりせい……とは、いわねえけんどもよ。明日の朝、去年食えなかった雑煮ぐらい食ってゆけ』

『造作を掛けます』

『ま、悪たれ、お前には朝までゆっくりサケを付き合ってもらうからの』

『はあ』

『今年も来ただあ。なんか大変な事になってるっしょ』
と、宮司がやって来た。

朝、皆は雑煮を食べて、それから出発の準備を始めた。
慌しい正月となり、皆、悲しい思いをした。

その時、畑の向うから大爆発の音が聞こえてきた。

「サイコ・フライヤーだ！ サイコ・フライヤーが落ちたぞ！！」
オルバニアンが指差した。

近くの林だ。

走って三分と掛からない。

サイコ・フライヤーが林に突っ込んでくすぶっていた。

「いかん！ このままでは中の乗務員が爆発に巻き込まれるぞ！」
アシュマが叫んで鬼虎片手にサイコ・フライヤーに乗り込んだ。

「誰がいるか！」

アシュマには念導境界面があるので炎も酸素も関係なかった。

『だれぞ、助けを……』

イーハン語だった。

そこにいたのは眉目秀麗な男子の主従であった。

『これは脚が挟まれておりますな』

アシュマが言った。

『暫しご辛抱あれ』

アシュマが言うと、鬼虎を閃かせ足を挟んでいるところのブロックを斬り飛ばしてしまった。

『さ、早く!』

アシュマが促すと

『相すまぬ』

その主従はサイコ・フライヤーから脱出した。

それと同時にサイコ・フライヤーは大爆発を起こし辺りに爆炎と爆風を巻き起こした。

そして周りを良く見ると、いつぞやのマシンナリービーイングが（と言っても外見は殆どロボットだが）皆を襲って攻撃を始めた。

その数凡そ三十。

だが、相手が悪かった。

オルバニアンの、七、六二ミリ念封弾バルカン砲が火を噴く。

アルミナとジークの豪剣が唸る。

ハルマの魔法、サンダー 스트ライクが敵を蹴散らす。

レンヌのヘブンスソードが、敵を切り裂く。

リイナのククリが敵を屠る。

粗方敵を蹴散らした折、その助けられた主従はハルマを見るなり、
「そなた！　今までどこへ行って……」

何かをいいかけた、美青年の主だが、丁度何かをはじけた音がけたたましかったので、そのやり取りは聞き取れなかった。

代わりにハルマがとった行動は、素早く近付き、

「私は故あって、今の名は、ハルマ・イコナと名乗っています。オムロの差し金とってください。『そちら』もシュニクの手のものから、逃れる為に、その『なり』をしているのでしょうか？　ここはお互い非干渉と言う事で」

「お主、母方の姓まで名乗って。……わかった。オムロの爺やの言う事だ。間違いあるまい。そういえば、あそこにいるのはオムロの娘ではないか？」

「ええ。サクラコ嬢。世間は狭いものです」

「では」

「ええ」

その光景を不審に思った、キュポアが近付いてきて、

「そなたたちは、何を話しているのだ？」

と、尋ねた。

「こちらのお方は？」

主が尋ねた。

「わらわか？ わらわはキュポア・アップルトン。しがない、貧乏王国の王女なんぞをしとる。身体の方は大丈夫かえ？」

「！ これはアップルトン王家の方とはつゆ知らず、ご無礼をば。私達はサリアナ・タウルとエスタ・ワナックス。とある主従であります。故あって身分を明かせませぬ。どうぞ、ご容赦を」
そう言った。

ちなみに、名前がノリトレアの最新鋭機エスタであるのとは、単なる偶然でしかない。

エスタと言うのはノリトリア、イーハン共に生えている花の名前で花言葉は『凛々しい君よ』と、言う事であるらしい。

「それはいい」

「この集団の代表はどなたですか？」

主従の主である、サリアナ・タウルが尋ねた。

「そうじゃのう。アシユマかのう？」

キュポア指差した。

「何と！ あなた様が、剣名高きアシユマ・アトー殿であるか？」

「剣名が高いかどうかは知らんが……アシユマ・アトーだ」

「ここで、あなた様に出会えるのは、何たる僥倖。是非私達も一緒に連れて行つては、もらえないだろうか？」

「我々はこれからノリトレアに赴くが、そなたらは何者だ？ マシンナリービーイング共に追われる身だ。只の主従とは思えんが？」

「それは……今は言えぬのだ。許してください」

「……はつきり言って、身の上も明かせないような輩とは、行動を

共にしたくない」

「アシュマさま！」

声をあげたのはアーチエルだった。

「難儀に会っている人を、見殺しにするのですか？ アシュマさまは？」

「時には、そういうことも、せねばならん事もあるう」

「まあ！ なんと言うことを。アシュマさまが、かような方とは知りませなんだ。良いでしょう、アシュマ様の言葉は無視して。サリアナ様。どうぞわたくし達と、おいでなさいな」

「あの、あなた様は？」

「アーチエル・アトー。アトーの妻に御座います」

「では、あなたが元アップルトン家の……」

主従の主はいつの間にか標準語で話していた。

「はい……皆さん異存は御座いませぬね？」

こうなったら、梃子てこでも、アーチエルは動かないことを、皆知っている。

アシュマはやれやれと言った風で、二人の随行を許すしかなかった。

ただ、今回のクーデター騒ぎと、二人は無関係で無いと思っていた。

『彼』は大洋を航海して、とある双環礁にたどり着いた。

「ここなのか？ 『バヴェル』があるのは？」

「はい。『大総統』」

何と、『彼』が捜していたのは『バヴェル』だった。

船は双環礁の中央で止まった。

水中探査船が下ろされて、水中に潜る。

水中に潜ってみると、上部は珊瑚に覆われているものの、明らかに上部が切られた円錐状の構造物が、寄り添うようにして立っている。

た。

この珊瑚礁は、寄り添ったバヴェルの上に、巣くった物だった。丁度、コクピットの辺りが珊瑚に覆われていて、いかにも邪魔だった。

珊瑚に覆われて見にくいのが、良く見てみると、片方のバヴェルには、小さな構造物が付属していた。

この辺りの珊瑚を爆破して、正体がなんなのか、探ってみる事にする。

爆破。

珊瑚が吹き飛ばされて行く。

構造物に被害は無い。

何か文字が刻印されている

それは『マスクド』と、読めた。

『マスクド』とは一体なんなのか……？

「『マスクド』！ 確か古代の文献にあったな？ あの鬼虎が、バヴェルの天敵ならば、『マスクド』はそれらから『バヴェル』を守護する存在だと。直ぐにでも引き上げろ！」

彼はそのことを知っていた。

彼は玩具を与えられた子供のように、はしゃいで見せた。

『マスクド』は直ぐに甲板に引き上げられた。

一つ一つがカプセル状になっていてそれが横に七つ連なっている。中は見えない。

彼は、実物を目の当たりにして、狂喜乱舞する。

これで彼は脅威となっていた鬼虎に、匹敵する力を手にする事が出来る。

彼は小躍りして喜んだ。

「早く……早く空けろ」

そう言われても、スタッフも今来たものを、どう扱ってよいのやら思案に暮れていた。

すると、カプセルと思しき物体が、ゴクンと音を立てて開き始め

た。

最初に姿を現したのは、牛頭牛足の筋骨逞しい男(?)だった。後の者も、次々と目を覚ました。

牛頭牛足の男が言った。

「お前が新しいマスターなのか？」
と。

すると『彼』はこういった。

「そうだ。私がお前たちの新しいマスター、オロ・エバスだ」と。

「マスクド。『鬼』の天敵と聞く。早速だが……」
オロが続けて言葉を繋ぐ……。

『まあた、こんなたら面倒もって来て、おめえは！』

ミカの父親が言った。

別に、アシュマが持ってきた面倒で無いのに、アシュマは、

『済みません親父さん』

そう謝った。

『……ま、しょうがあんめえ。世間じゃ『英雄』だの『武の覇王』だのと、言われているらしいから……が、調子に乗るでねえぞ。人間有頂天の時が一番危ねえ』

『肝に銘じます』

『じゃあ、おどさん、行って来るだあ』

ミカが言った。

『なんだと！？ おめえも行くってか！？ なんねえ！』

『だってそのほうが安全なんだあ。危ないのはおどさんの方だあ。』

隣村のサト叔父さんの所にでも隠れているが良いだあ』

『な？ なに？』

『じゃあ、行って来るわね。おどさん』

そうして、ミカは黒龍号に乗り込んだ。

「みんな、乗り込んだか？ 置いてけ堀の奴はいねえな？」

オルバニアンは念を押した。

「大丈夫よ。私で最後」

ミカが言った。

「よっしゃあ。発進するぜ。お姫さん半球板頼むぜ！」

「あの、オルバニアン様？ もうわたくし『姫』では御座いませんで……」

アーチェルが照れた。

「おっと、すまねえ。いつもの癖が出ちゃったい。んじゃあ、発進するぜ！ みんな座ってくれい！」

黒龍号は宙を浮き、天空へと、飛び立って行った。

「……と、言うわけだ。アルステイーン」

『良いですよ。アシュマ君。要は、かくまってくれ、と言うわけですね？』

通信機越しのアルステイーンの声は軽妙だ。

「まあ、有体に言えば、そうなるな」

『分かりました。おいでなさい』

「ついでと言ってはなんだが、人品卑しからぬ主従も、一緒にかくまって欲しい」

ここは、ノリトレア。

王宮市は、一年前のバヴェル紛争の惨禍より、復興しつつあった。ガルマインの権力の象徴に成り下がった五つの大塔は、平和の象徴と願いを込めて作られた、施政府宮へと生まれ変わった。

それは丸みのある形で、市民に親しみを持たせるデザインとなっていた。

アルステイーンは、その施政府宮に居を構えていた。

その施政府宮の格納庫に、黒龍号はあった。

アシユマ達一行は施政府宮横の官邸に住まうアルステイーンを訪ねた。

早速イーハン出身の主従二人が挨拶をした。

「お初にお目にかかります。サリアナ・タウルとエスタ・ワナックスと申します。アルステイーン陛下にはご機嫌麗しく存じ上げ奉ります」

「そなた達か。イーハンの主従と言うのは」

「ははっ」

「人品卑しからぬ主従と見た。タウル家と言うのは聞かないが、如何な家か？」

「はっ、卑しからぬとはありがたきお言葉。そうは言っても、蓋を開ければ、しがない貧乏御家人の出自。威張れたものでは御座いませぬ」

「そうか。そなた達もイーハンのクーデターに、巻き込まれた口と見える。どういう経緯で相成った？」

「貧乏ながらも我が家の大事。その件は平にご容赦を」

「そうか。相分かった」

そう言って屈託なくアルステイーンはその話題に蓋をした。

「アルステイーン。お前がいち早くノリトレアに戻ったのはイーハンのクーデターを察知したからだな？」

アシユマが切り出した。

「お察しの通りです。イーハンはノリトレアの隣国。ここが、右傾化した軍事政権に落ちるとノリトレアは喉元にナイフを突きつけられたのと同じになります。そして、事実そうなっていました。これでは何かあったときに下手に動きが取れません」

「何かあったときって何だよ？」

オルバニアンが聞いた。

「何かあった時は何かある時です」

「何だよそりゃあ？それにしてもクーデター起こすほど、イーハン
つて政情不安定だったか？」

「裏で糸を引いている人物がいるようでした」

サリアナ・タウルが言い出した。

「裏で？ 例えば？」

オルバニアンが返す。

「七賢人とか、それにまつわる者、若しくはそれに匹敵する力を持つもの」

「オロか！？」

「まっさかあ」

アルミナが言う。

「じゃあ、アヘイビアか？ ノーツ連邦か？ それは考えにくいぜ。
第一、今戦争し掛けておいて、得する事なんて、なにもないぜ？」

オルバニアンが反論する。

「じゃあ、オロだったの？ あの利益追求に命を燃やす拝金主義者
が、こんな極東の国のクーデターに加担するの？ 何の為に？」

アルミナが畳み掛ける。

「ううっ」

オルバニアンが言葉に詰まったとき、横合いからアルステイーン
が言葉を投げかけた。

「多分、狙いは私でしょう」と。

「オロが動けば、必ずと言って良いほど、オロの国と同じ技術立国の
ノリトレアと私が邪魔になるはず。また、さる情報では、オロは
何かを探しに、南海のビート・バーンズ諸島に自ら乗り出しています。
また、レキシタニアから、アリア王妃を密かに呼び戻しています。
これが何を表すのかは未だに分かりませんが、今、暗躍している
のはオロといえるでしょう」

「まさかレキシタニアも襲うのか？ そんな事は許されんぞ！」

キュポアが声高に叫んだ。

「それも視野に入れておかねばならんだろう」
アシュマが言った。

「何でじゃあ？」

「バヴェルだ」

「バヴェル？ まさかオロがバヴェルを見つけ出して動かそうというのかえ？」

「アリア王妃がいては、王族を人質にしてアーチエルを思うままに操るのは、憚られるだろう。その為にアリア王妃を自国に呼び戻したとしたら？」

「その為のビート・バーンズ諸島なのかえ？ ではバヴェルはそこに？」

「おそろく」

「では、すぐさまそこへ行って決着を付けてまいろうではないか？」

「お待ちなさい。敵もそこまでは読んでいるでしょう。何か隠し玉があると見たほうが良いでしょう」

アルステイーンはいつもより慎重に物事を言った。

「何を弱気な事を言っておる！？ もうよい！ ハルマ、供をせい！」

「駄目ですよ。キュポアさん。アルステイーン様の言うとおりです。ここは慎重に行かないと」

「お前まで、臆病風に吹かれたのか？ ハルマ！？」

「そうです。臆病風に吹かれました」

「言うな！ そんな事を言うお前を見とうない」

キュポアは眼を潤ませた。

その時、つと文官がアルステイーンの側に來て耳打ちをし、そして下がった。

「どうした？ アルステイーン」

アシュマが訊いた。

「いえ、何でもないです。ただの狼藉者です。皆さんの手を煩わすような事は、ありません」

が、外では大変な事になっていた。

牛頭牛足の魔人が配下の者を引き連れて槌を振るって辺りを破壊し暴れまわっていた。

「この時代にもっとマシな奴はおらんのかあ！　ワシのいた時代にはもっとマシな奴がおったぞう！　我らマスクドと対等に渡り合えるやつがな」

あたり構わず刀で斬り付けていたのは、絶世の美青年だった。

その青年は白銀色の髪の毛を持ち、その長さは貝殻骨の下端にまで届くほどの豊かな量でさらさらと流れていた。

酷薄で残忍そうな笑みを浮かべ、その瞳は蒼白く、氷のように冷たい色の視線を放ち、まるで殺人を娯楽か遊戯のように行っていた。

その美青年が牛頭牛足の魔人に向かってこう言った。

「ザザよ、そうは言うがこの時代で、我らに匹敵する戦士が、おるとも考えられんがな」

「ロシよ、それは全くもってその通りよ。我らの時代はもっと違った。常に死と隣り合わせだった。それが見よ。この腑抜けた様を。我等を見て、右往左往しているばかりではないか！！」

その美青年はロシと言った。

「ザザよ仕方あるまい。それがこの時代の人間なのだ」

今度は羊頭の魔人が牛頭の魔人に向かってそう言った。

「そう冷めた事を言うなミヤよ。一応この世界にも剣の達人と言う者がおるそうだぞ？」

ザザと言う魔人はミヤと呼ばれた羊頭の魔人にそう言った。

すると、横合いから猿頭の魔人が現れた。

「ザザよそれは本当か？」

どうやら皆の会話の中心にいる、ザザと呼ばれる牛頭の魔人が、この集団のリーダーのようだ。

先ほどザザに

「それは本当か？」

そう言って喜色を見せた猿頭の魔人はグチと言う。

そして、犬頭の魔人はザザに

「それならば、少し警戒をしたほうがよくは無いか？」

ザザに具申した。

「キキッ！ ザキが臆病風を吹かせたぞキキッ！！」

猿頭の魔人グチは街路樹の上から犬頭の魔人ザキを揶揄した。

「何を？ 言ったな？ このやろう！ 今日こそ決着を付けてやる

！ 降りて来い！」

「止めないか二人とも、みっともない」

そう言ったのは人間の女のなりをした者だった。

が、そうは言ってもかなりガタイの良い女だった。

この女はラキと言って鉄球使いの女だった。

そして、

「お頭、そろそろ潮時かと」

こう言ったのは矢張り女で、名をハヤと言った。

こちらの女は中々美形で、線が細く武器も細身の剣を遣っていた。

「今日は気分が良い。もう少し暴れてから行く」

「しかし当初の予定……アルステイーンの暗殺を謀らなければ。こ

れでは逃げられてしまう」

そう言ったのは、絶世の美青年のマスクド・ロシだった。

事実その通りで町は至る所で破壊され人は死に或いは重傷を負っ

ていた。

見ようによってはそこは戦場だったのかと思えるくらいの有様で

ある。

兵士は至る所で死に絶え、建物は焼け焦げ、半ば焦土と化していた。

アルステイーンの所には何度も何度も報告が入り、その度に兵力

を割くよう文官に命じていた。

「アルステイーンよ。外で何か起こっているのではないか？」

「何でもありませんよ。アシュマ君。君達はここでゆっくり寛いでください」

こう言うときの、アルステイーンは堂に入ったもので、本当に大丈夫な態度をとる。

それで周りの者は安心してしまう。

だが、アシュマにとってはアルステイーンのその態度が、却って不安を与える。

そして何度目かの文官がアルステイーンに耳打ちした時

『マスケド』と、という言葉聞いてしまった。

それが何なのかわからないが、何か不吉なことを連想させる、言葉に聞こえた。

「アルステイーン、外を『散歩』してくる」

アシュマは言い出した。

「いけません、アシュマ君。今、外に出ては」

「すまん、アルステイーン。いかねばならないようだ」

「いけません、アシュマ君、今、外には『マスケド』なるものがあるようです。かなり、強力無比な連中のようです」

「『マスケド』とは何者だ？」

そうアシュマは訊いた。

「よくは分かりません。でもオロがバヴェルに関して、調べている様でしたから、バヴェルに関係する者なのかも、しれないですけれど」

「と、なると、対極にある鬼虎に関係する者なのかもしれないではないか？ なれば、尚更だ」

「いけませんよ、アシュマ君、せめて、敵の正体が分かってから動いたほうが、良いですよ!!」

「分からないからこそ、早目にハッキリさせたほうがよからう。なればこそ俺は出る」

アーチエルは、アシュマにただならぬ危難が襲い掛かろうとしていることは、薄ぼんやりと分かった。

「アシュマさま。またお一人で危ない事をなさるのですね？　いくことはなりません！」

「話し合っている暇が無い。許せ、アーチエル」

アシュマは言って、アーチエルの眉間を人差し指と中指でトンと軽く叩いた。

アーチエルはその場で意識を失って崩れる所をアシュマが抱きとめた。

「だれか、アーチエルを」

そう言うとおルバニアンがアーチエルを引き受けた。

「何が起きているってんだ？　アシュマ？　助勢しようか？」

「いや、要らん。却って足手まといだ」

「ああ、さいでつか」

「行ってくる」

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黑

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウィング！！」

アシュマはウィングを唱えてテラスから飛び立ってしまった。

町は無残に焼かれ破壊され死体がそこらじゅうに転がっていた。そして尚も破壊は繰り返されていた。

アルステイーンの手のも、赤子の手を捻るが如くことごとくや

られて行った。

これ以上は看過できない状況だった。

「まてっ！！ それ以上の狼藉を働くならばこのアシュマ・アトーが許さん！！」

アシュマが名乗り、口上を上げた。

牛頭牛足の魔人ザザはアシュマを見上げこういった。

「ほう、この時代に『ウィング』を使える奴に出会うとは。者共、少しは楽しめそうだぞ？」

「お頭、奴の腰のものを……」

猿頭のグチが指を刺した。

「『鬼』……『鬼虎』か……者共、アルステインを殺るのは、また今度に致す。先にマスクドとしての使命を果たす。バヴェルの守護者としてアシュマ・アトーを退治する！ よいな？ 皆の者！」

「応！」

配下の者が返事をした。

彼らは、マスクドの使命として、アシュマを倒すという。

それは、鬼虎を持つが故の行動と聞こえた。

そしてそれは、アルステインを、亡き者にしようという事よりも、優先事項のこのようだ。

「その前に礼儀として、自己紹介をせねばならんな。我はザザ。第一のマスクド。このマスクドの頭を張っている」

「私はロシ。第二のマスクドをしている」

と、人間のなりをしたマスクドが言った。

「私はミヤ。第三のマスクドだ」

と、羊頭のマスクドが言った。

「俺はグチ。第四のマスクドだ」

と、猿頭のマスクドが言った。

「私はハヤ。第五のマスクドを、しています」

と、これは美形の女性のマスクドがそう言った。

「俺はザキ。第六のマスクドだ」

と、犬頭のマスクドがそう言った。

「アタイはラキ。第七のマスクドさ！」

と、体かなり鍛えられた大女のマスクドがそういった。

「さて。顔合わせも済んだし……殺るか」

そう言っただけで、自信の武器である大槌を構えた。

アシュマは地上に降りた。

アシュマは居合いの形をとった。

ザザは構えたがアシュマには隙だらけに見えた。

これが誘いなのか、そうではないのかは、アシュマには判別が付かなかった。

が、例え誘いでも乗ってやろうと思った。

アシュマは一足一刀の間合いから一気に生死の間仕切りを飛び越えて、居合いを抜きつけてきた。

アシュマの鬼虎はザザの身体を切り裂いてそれで終わりの筈だった。

が、アシュマの鬼虎はザザの身体に受け止められ、ビクともしなかった。

そして、ザザの大槌が振り下ろされる。

アシュマは咄嗟に体を外し槌の攻撃から身を守った。

槌は地面を深く抉り、周りにひび割れを起こした。

その時に、もう一度アシュマは、ザザの背中にもう一撃を、食らわせた。

が、鬼虎はザザの身体に、傷一つ付ける事が出来なかった。

そして間合いから、ぽーんと体を外し、再び構えなおした。

秘剣、裏・閃光一刀・崩しの構えだ。

「『鬼』を持つといっても、この程度の実力か。私の身体に傷一つ付けられんとはな」

まさしくその通りだった。

相手に傷一つ付けられ無いでは、勝ち様が無いのだ。

相手の身体に纏っている、念導境界面が強力すぎるのだと、アシ

ユマは判断した。

通常の鬼虎でも、傷付けられないほどの。

しかしアシユマは、鬼虎の切っ先に気を集めだした。

「む？」

ザザの牛面の顔の表情が俄かに変わった。

「こ奴、気を操れるか……まあ、よい。掛かって来い」

「ザザ。侮るな。そ奴、先程までと違うぞ」

そう言ったのは、第二のマスクド、ロシだった。

「大丈夫だ。この程度の気の集め方ならば、我の念導境界面は破れぬでな。さあ来い、小僧」

「試して見るか？」

アシユマが呟いた。

「何？」

「秘剣、裏・閃光一刀・崩し」

アシユマがぼそりと呟いた。

「多少、気が操れるからと言って、自惚れおって。後悔するなよ！
小僧！」

アシユマは何の前触れもなく、一気に間を詰めたかと思うと、ザザの虚を突いて再びザザの脇腹を斬った。

「無駄……」

と、言い掛けるザザの脇腹で、鬼虎が急激な気の放出をした。

それは火花を散らして鬼虎の切っ先三寸がザザの脇腹に食い込んだ一瞬でもあった。

「ぐおっ……」

ザザは信じられぬといった表情で自分の脇腹を見、そしてアシユマの第二撃を既すんでの所でかわした。

「『牛槌鬼』よ、汝の主が命ずる。汝の主の危難に際し、汝の力を以って汝の主を癒すべし」

ザザがそう言うと、すぐさまザザの傷口が塞がれて行った。

『鬼』の名を冠する武器を持っている。

あの『牛槌鬼』と言う武器の力かもしれないかった。

（『鬼』の力を持っている？）

だとすると、鬼虎と同様の修復システムがあるということか？

下手をすると、鬼虎と同様の、例の破壊システムも、持っているかもしれないとアシュマは思った。

ザザは、

「これが潮時のようだ。館に帰るぞ皆の者」

そう言った。

「ザザ様。アルステイン殺害の件は？」

ハヤが慌ててザザに言った。

「ザザよ、あの程度の念、お主の力場ならば平気ではないのか？ 『もう一人の目標』もいることだし、一石二鳥ではないのか？」

ロシが言う。

「『もう一人の目標』？」

アシュマは怪訝な表情をした。

「諸々の事どうでも宜しい。皆の者、帰るぞ。今日は楽しかった。また来るぞ、小僧」

「それでは『オロ』様に申し訳が立ちませぬ」

ハヤは尚もしつこくザザに言った。

それを聞いてアシュマは、

「『オロ』とは『オロ・エバス』のことか？」

そう訊いた。

ハヤは、しまったという顔をし、

「そんな事は、お前のあずかり知らぬ事。我等が言うべき事ではない」

と、突っぱねたが、アシュマには、却って背後に控えている者が、オロだと確信するに至った。

マスクド一行は、空の彼方へ、飛び去って行ってしまった。

「マスクド……容易ならざる奴」

そうアシュマは呟いた。

アシュマは再び官邸に戻ってきて、アルステインにあらましを話した。

「ふう。『マスクド』と言いましたか。厄介な」

「自ら『バヴェルの守護者』と名乗っていたな」

そうアシュマは言った。

「『マスクド』ってのは、そんなに強いのか？」

オルバニアンが訊いた。

「強さは分らん。剣の勝負では俺は勝ったと思っている。が、念導境界面が異常に強い……。何せ鬼虎の第一撃目を防いだのだからな」

「でも念を上げたら斬れたんだろう？」

「だが、直ぐに傷が再生してしまった。まるで、鬼虎の鬼の機能そのままだ。それに相手は念を上げれば、俺が奴を斬れなくなる様な事を、言っていたからな。それでは、いちごっこだ」

アシュマは気を失ったままのアーチェルの頭を膝の上におき、髪の毛を弄りながら喋っていた。

キュポアはアシュマのそんな仕草をボーッと眺めていた。

以前のキュポアならばそんな光景を見れば直ぐに注意して見せたものを、今はどうか？

そんな事すら、気にならなくなっており、専ら、ハルマの一挙手一投足に、目を向けていた。

「だが、これでどうとう、オロが本格的武力闘争を、仕掛けてきたことになるな。どうする？」

「どうする？　と言われましても、軍事力は行使できませんし、密かに暗殺するわけにも参りませんし」

アルステインは困り顔だ。

「何でだよ？　じゃあ、マスクドは良いのかよ？　オロは良いのかよ！？」　全く好き勝手しちゃってさ？　昼間の戦いで何人死んだと

思っているんだよ!？」

「分かっています。でも動けないものは動けないんです。今出来る事は証拠をかき集め、国元連でオロを弾劾することだけです」

「そんな、まどろっこしい事ばかりして、オロに先手取られたらどうするのさ!？」 例えばアップルトン王家の人たちを人質に、アーチエルを、またぞろ、さらわれたらどうすんのさ？」

ここで、ふと、アーチエルは目を覚ました。

「それは大丈夫に御座います」

「なぜ？」

オルバニアンが問う。

「たとえば誰かが、そういう事態に陥っても、悪事に加担しない事を誓い合いましたゆえ」

「それで大丈夫なのかね？」

「大丈夫です!」

そうアーチエルは言い切った。

いかにも意志の強そうな、眼差しだった。

「どちらにしても後手に回るわけだ」

「アシュマ君、もうムラサキを呼び戻しても、構わないよね？」

アルステイーンがアシュマに訊いた。

「ああ」

アシュマが言った。

「アーチエル様。ここはレキシタニアに行つて、お父上とお兄様に来て頂きましょう」

アルステイーンはアーチエルに呼び掛けた。

「なぜですか？ アルステイーン様」

「先ほども言いました様に、オロが兄上やお父上を人質に取つて、アーチエル様に無体なことをなさろうと、するかも知れません」

「それについては、先ほども言いました。例えばどんな事があるうとも、悪事に加担しない事を」

「そうは言つても、アーチエル様は、無情にもお父上や兄上様の苦

難を、見て見ぬふりが出来ますか？」

「それは……」

「出来ませんでしょうか？ 我々も同じです。お兄様やお父様を人質に取られれば、我々も動きが取れなくなります。それはこちらとしても戦略上困ります」

「……………」

「来て頂きましょう。この、ノリトレアに」
アルステインは念押しをした。

第六節 虜のアーチェル

アルステイーンは、レキシタニアのエドス・アップルトン前王、エースティーン・アップルトン王、両名にノリトレアに来てもらう為、紅龍号に自ら乗り込み、迎えに出向いていた。

「来て頂けるでしょうか？ 果たして。父上と兄上は。兄はともかく、父上は頑固ですから……」

そう、アーチェルは心配した。

「大丈夫ですよ。アーチェル様。きっと分かって下さいます」
アルステイーンは太鼓判を押した。

紅龍号はアルステイーン一行を乗せてレキシタニアの王宮裏庭に着陸をした。

ここでアシュマ達はボディチェックを受けた。

いつもの事でアシュマ達は意にも介さない儀礼的なモノだった。

だが、サリアナ・タウルとエスタ・ワナックスはそれを嫌がった。それは、ちょっとした騒ぎとなった。

「どうした？ 何の騒ぎだ？」

アシュマは、近くの役人に事の次第を訊いた。

「はい。サリアナ・タウル様とエスタ・ワナックス様がボディチェックをさせてくれないのです」

「そうか」

「貧乏御家人と侮るな！ 誰が我が身体を触って良いと言った？」
サリアナが大きな声音で拒否の意を顕にしていた。

「しかし、安全が確認されませんと、この国に入国する事、叶いませんが？」

「別にこの国で何かをするつもりは無い！」

「しかしそれでは……」

「わかった。俺がチェックしよう」

アシュマが言った。

「なっ、何？ ま、待て」

「待たん。お前の気の色は何かを隠している時の気の色だ。何を隠している？」

「何も隠していない！ だから触るな」

「うるさい。いい加減に諦めろ」

そうアシュマは言って、サリアナの眉間を指で突いた。

サリアナは金縛り状態となり身動き一つ出来なくなった。

「貴様、サリアナ様に何をする？」

エスタが突進してくる。

アシュマはそのエスタの眉間を指で突き、身動きできなくしてしまった。

早速アシュマは、サリアナの身体を調べ始めた。

そして身体を触ってアシュマは驚いた。

「……女か！」

アシュマが言った。

「知らなかったとは言え、これは失礼した」

アシュマは詫びた。

「と、なるとエスタ氏も女子か？」

エスタもサリアナも瞳に涙を浮かべて抗議していた。

アシュマは双方の眉間を突き身体を自由にした。

その途端アシュマはサリアナに頬を張られた。

「サリアナ殿、性別を偽ってまで逃避行する理由は何だ？ そも、サリアナと言う名前は本名なのか？」

「アシュマ殿、どうかその件は不問に伏して頂きたい。この通りだ」
そう言ってサリアナは頭を垂れた。

「面を上げられよ。サリアナ殿。誰かに対し害する気が無いのなら、

名前などどうでも良いこと。自由に名乗られるがよい」

「アシュマ殿、感謝する」

「エスタ殿はかなり剣を遣うと見たが、いかが？」

「エスタはわたくしの剣の師匠。遣えて当たり前」

「成る程」

アルステイーンは、早速エースティーの元を訪れた。

エドス・アップルトンも一緒だ。

アルステイーンは話を切り出した。

「敵は、このアップルトン王家を狙っております。それを回避する為にも是非、我が国において下さい」

「ご厚意は有り難いのですが、遠慮させていただきます。我ら、どのような悪意にも屈服しないとお互い、誓い合いました故」

エースティーは言った。

隣ではエドスが頷いている。

「言うのと、実行するのとは話が違ってきます。特にアーチェル様は、心根がお優しいお方。お二方が拷問に会っていたりすると、つい心を動かされてしまいます。それを回避する為にもここは我が国において頂き……」

「その話、有り難いが矢張りご遠慮しよう」

エドス前王が話の腰を折った。

「我らこの件に関してどの様なことにも屈服しないと誓い合った故」

「エドス様。誓い合うのは結構ですが、相手は確実にこのアップルトン王家を狙ってきます。その時のアーチェル様の心根を考えていただければ、この話、断われないはず。いかがですか？ それに我が国に来ていただければ、そのような心配も無用になりましたよう」

「むう……じゃが、国民を見捨てて他国にいくのはどうかと思う」

「永遠にこの国を去るわけではありません。少しの間離れるだけです」

「そこまで事態は切迫しているのか？」

「敵は、破壊の権化、バヴェルを発掘したと見て良いでしょう。私はそう踏んでいます」

「なんと！　してその根拠は？」

「バヴェルの守護者『マスクド』なる者が現れたからです」

アシュマは暫く帰っていなかった自宅兼道場にアーチェルやアンと共に戻った。

人のいない道場は閑散としていた。

「もう少し待ってて。必ず戻ってくるから」

アーチェルがそう呟いた。

「アシュマお師匠」

背後から声を掛けるものがいた。

「ガンロク」

アシュマは振り向きそう言った。

「アシュマお師匠、俺も連れて行ってくんろ。足手まといにはなんね。この通りだ」

そう言ってガンロクはその場に伏して土下座した。

「ガンロク。お前そこまで……」

アシュマは呟いた。

アシュマはガンロクが、そこまでアンの事を想っているのが、十分に分かった。

「分かった、連れて行ってやる」

「旦那さま！」

アンが大声を張り上げた。

「ガンロクは連れて行く」

アシュマは頑として聞かない。

アシュマはそこに、ガンロクの男意地を見たからだ。

アシュマ一行は紅龍号に乗り一路ノリトレアに進路をとった。

「アシュマあ、また変なの連れてきたなあ」

オルバニアンはガンロクを見上げた。

「白兵肉弾戦では役に立つぞ？ 見た目よりも素早いし、膂力もある」

「そりゃ、力は有りそうだけれどもよう……」

「ガンロクというだ。宜すぐ」

ガンロクはどでかい図体の割りに、消え入りそうなか細い声で言った。

「ほう、ガンロク殿も来たか。これは頼もしい」

エースティーは言った。

最早レキシタニアの名物男なのだ。

ガンロクは。

しかし、エースティーはともかく、エドス前王は不承不承付いてきた感がある。

それを、キュポアがなだめていた。

そこへ、とある通信が入る。

全世界に対しての通信だ。

発信元は……オロ・エバスだ！

早速アルミナが通信を繋げる。

『全世界の諸君。私はオロ・エバスだ。これから諸君らに重大な事を発表する』

「仰々しくも、何を良い始めるつもりじゃあ？ この男は？」

キュポアが声音を大きくして言った。

「静かに」

そう言ったのは、ハルマだ。

モニター画面のオロ・エバスが口を開いた。

『全世界の諸君。私は破壊の権化『バヴェル』を手に入れた。そしてそれは直ぐにでも動かせる状態にある。全世界の諸君、私は無用

な戦いを好まない。このまま私の軍門に下って欲しい』

「言うに事欠いて、何を良いよる！ この男は！」

「おかしい」

「何がおかしいのじゃ？ アルステイン様？」

キュポアが訊く。

「直ぐにでも動かせると言い張っているが、起動させるためにはアーチエル様が必要なはず。これは一体なんなのか？」

「これは一体なんなのか？ と、言われても……なんじゃろうなあ？」

「それは、これからアーチエルを奪いに来るか、別の起動方法があるという事だろう」

アシュマが口を挟んだ。

「お主、淡々と言つてのけるのう。お主の可愛い奥方が、危難にあうかも知れぬというのに」

しかし、アルステインは、腑に落ちないところがあった。

あのガルマインであってもバヴェルの起動には大量のエナジアが必要だったはず。

それも直ぐに確保できるとも思えない。

今、直ぐに、起動させることは不可能なはずだ。

オロの、行動原理から言えば、利潤の追求を求めて然るべきなのに、武力を用いて覇を唱えた。

これは彼の行動原理からして、外れているはずなのだが……。

で、当のオロは何をしていたか。

当のオロは何をしていたか。

それは、セックスに溺れていた。

絶世の美女とのセックスだ。

相手の名はティシュラ・アマンガムと言った。

彼女とのセックスはまさに天国をこの世に具現化するものだった。

蕩けるほどの快感をオロは味わっていた。

このようなセックスを、彼は、経験した事が無い。

ティシユラはオロの貞淑な『愛人』だった。

このような貞淑な愛人をどの様にして手に入れたか？

それはウグラ・ハンと言う人物からの紹介でオロの側に付く事になった。

オロは一目見て、この女性の事が、気に入った。

理知的で物静か。

何事においてもオロを立てた。

だが、彼女のこれまでの経歴は、一切不明だった。

さて、このティシユラ・アマンガムを紹介したウグラ・ハンとは何者か？

こちらは三年前のイルドリアの武道大会の優勝者だった。

オロはそれを見込んでこの男を『軍師』として側に置くことにした。

年齢は四十前後。

眼光鋭く、何者をも見抜くような何かを持っていた。

このような二人に対して、最近のオロは全て、彼らの言いなりになっていた。

どうやらこの二人には裏があるようだった。

そして航行中、紅龍号はガクンと、速度を落す。

何のことは無い。

魔封じの穴の上を航行中なのだ。

魔封じの穴。

文字どうり魔力（念）を抑える働きのある特殊な磁鉄鉱のある穴の事だ。

これは、まだ、一部の者にしか知られていない、特殊な磁鉄鉱で、これが知られれば今の念を基盤とする文明は崩壊する。

この時リーダーに反応が現れる。

「リーダーに感あり。この大きさは……人よ！」

リーダーを担当しているのはリイナだ。

対象が人と分かるのは、サイコリーダーならではだ。

「人？」

オルバニアンが、怪訝な表情をする。

「まさかアシュマみたいに、空を飛んでいるんじゃないだろうか？」

「それしか考えられまい？」

リイナが大人びて言う。

「何人いるんだ？」

「四……五、六……七人だな」

「マスケドだな。勢ぞろいだ」

アシュマが言葉を挟んだ。

「行って来る。後を頼む」

「アシュマさま！」

アーチェルが悲鳴を上げる。

「アーチェル。すまない。論議している暇は無い。このままではお前の身と、皆の命が危ない。生かしてくれ」

「アシュマさま。納得出来ませぬ。何故アシュマさまだけが、危ない目に、いつも合われるのですか？」

「論議している暇は無いといった。分かってくれ、アーチェル」

「分かりません。アシュマさまがそのような勝手をいつもなされるのでしたら、わたくしも勝手をいたしまする」

「何をするつもりだ？」

今度は、アシュマが驚いた。

アーチェルはアシュマよりも早くゴンドラに乗りつけ、命綱をくりつけたかと思うとゴンドラのスイッチを押した。

アシュマも慌ててゴンドラに乗り付ける。

「一体何をするつもりだ？」

ゴンドラが上に上がり始める。

「船外から直接シールドを掛けます」

「駄目だ！ 危険すぎる！」

「アシュマさまが、マスクドと戦われるのは危険ではないのですか？」

「うっ」

アシュマは言葉に詰まった。

ゴンドラが上りきった。

外には二人だけだ。

「確かに効果的だが……魔力が弱まっているぞ？ 大丈夫なのか？」

「大丈夫に御座いまする！ 倍掛け致しまする」

「大丈夫なんだな？」

「それはこちらの台詞で御座いまする。アシュマさまは、大丈夫なのですか？」

「大丈夫だ。信じてくれ」

二人は短い抱擁をして、お互いにキスをし、呪文を唱えた。

「聖なる女神タテトラム

聖なる盟約に従い、

汝をして我に光の加護を与えたまえ

汝、我を護りたまえ。

シールド！！ バイ、サウザンド！」

そう唱えると、アシュマは、

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ
ウィング!!」

そう唱えて宙を舞った。

相変わらず、紅龍号のスピードは半減したままだ。

マスクド達のウィングのほうが速いくらいだ。

「ザザよ。アシュマ・アトーが出てきたぞ。あそこには『起動キー』であるアーチエルもいるぞ。どちらをターゲットとする?」

ザザの右腕的存在であるロシが言った。

「皆の者、先ずはアシュマを片付ける。『起動キー』はそれからだ!」

マスクドの頭目である、ザザが宣言した。

皆は一斉に、アシュマを攻撃し始めた。

微妙に時間をずらし死角から攻めてくる。

「嫌らしい奴らめ」

アシュマはそう吐き棄てた。

アシュマは秘剣、万の眼で対応した。（いんごのまなこ）

が、攻撃を凌ぐので手一杯だ。

アーチエルがそれを見てやきもきしていた。

アシュマは敵が攻めてくるのを利用して、巧みに敵を引きつけながら紅龍号から離れて行った。

アシュマが敵の攻撃を防いでこれたのも、あくまで対比だが、アシュマの動きに対してマスクド達の動きが緩慢だったからだ。

これは魔法ウィングに掛ける魔力（念）の、力の大小によるものと思われた。

アシュマは気の力を、鬼虎から無限に供給する事が出来る。

それは念となり、魔力となるものだった。

だから、アシュマはマスクドたちに比べて、早く動く事が出来ると思われた。

どうやら、マスクド達の持つ『鬼』は、そこまでのシステムを持

っていないかもしれない。

それが、アシュマのマスク達達の『鬼』に対する見解だった。

ただ、アシュマの鬼虎がいかによれようと『魔封じの穴』に落ち込めば、念が保てるかどうかは疑問だった。

事実、マスク達より動きは素早いものの、いつものアシュマの動きよりかは、矢張り緩慢だったのだ。

それは上空百数十メートル上に位置しようと、下にある『魔封じの穴』により負の影響を受けていたのだ。

双方、『魔封じの穴』上空にいるならば、アシュマの方が有利だった。

アシュマはここで勝負を賭けた。

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無

無限の力、その一端を見せん

我を死の淵から救いたまえ

纏え漆黒の羽根

ブースト!!」

アシュマはブーストを掛けた。

それは、多対一から一対一を実現するものだった

アシュマに近いものからザキは脇腹を撫で斬られ、ラキは背後を袈裟に斬られ、グチは肩口を斬られた。

だが彼等は直ぐに傷口を修復し再生してしまった。

マスクを倒す手立ては無いものだろうか？

その時アシュマは、マスクの一人が呪文を詠唱する声を聞いた。それは……。

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、
無にして全、全にして無
無限の力、その一端を見せん
我を死の淵から救いたまえ
纏え漆黒の羽根
ブースト!!」

それは、何とブーストだった。

ブーストを掛けたのは、ハヤと呼ばれる女性のマスクドだった。
女性と言うよりは、まだ少女の面影を残していた。

その可愛い唇が、ブーストを唱えた。

アシュマにとっては、意外で且つ驚きであった。

ハヤは、相打ち覚悟で突っ込んできた。

彼女の細身の剣は、相手を突くのに適していた。

アシュマは完璧に、避けるのは無理と判断した。

アシュマは、彼女の切っ先だけに、集中した。

アシュマの、上空からハヤが、突っ込んでくる。

二人はぶつかり、ものすごい勢いで『魔封じの穴』に突っ込んで
行った。

「ザザ、さあ『起動キー』を、奪いにいこう!」

ロシがザザに進言した。

「さて、ロシよ。ハヤの搜索はどうなる?」

「ザザよ。大局を見て欲しい。今『軌道キー』を逃す事が、どれだ
けの損失になる事か。ハヤの事なら心配要らん。彼女も立派な戦士
の一人だ。自分の身一つぐらいなんともなる」

「……分かった。皆の者、『起動キー』を奪いにいくぞ。我に続け
!」

アーチェルは、ゴンドラの上でアシュマの身を案じていた。

遠く離れた戦さ場で戦っている、最愛の人を想っていた
そして、早く、自分の元に帰ってくる事を、祈った。

だが、戻ってきたのは最悪な事に、マスク達であった。
驚くアーチェル。

そして、言葉を発した。

「アシュマさまは……わたしのアシュマさまは……わたしのアシュマさまを、どうなさったのですか!？」

「アシュマか……。ハヤの突きをおわしたとも思えんしな。多分死んだのだろう」

答えたのはロシだった。

「嘘! 嘘です!! そんなの……嘘に決まっています!!」

「嘘なものか。さあ、我らと一緒に来てもらおう」

ロシが近付こうとした瞬間、シールドの結界が反応した。

「! ……シールドか」

「どけ、ロシよ。ここは我の役目と見た」

牛頭牛足のザザが、身の丈ほどもある大槌に気を溜めて、やって来た。

一瞬、アーチェルは、恐怖に身を凍らせた。

ザザが大鎚を振り下ろす。

閃光が走り、シールドの結界が、一瞬にして破られた。

勢い余ってザザの大槌が紅龍号の天井を打ち破った。

「アーチェル様、大丈夫ですか!？」

アルスティーンが叫ぶ。

「さあ、われらと共に」

ザザがアーチェルに近寄る。

「それ以上近付かないで! 近付いたら舌を嚙んで死にまする!」
「う……」

ザザは言葉を詰まらせて、次の行動に窮した。

ロシはそんなアーチェルとザザを横目にザザの作った紅龍号の天井の裂け目から紅龍号の中へ入って行った。

だが剣戟の音は聞こえては来なかった。

何が起こっているのだろうか？

中では怒号と悲鳴とが交じり合い、中で何かあったことは、連想するに難くなかった。

そして再びロシが現れた時、ロシの左手には、首根っこをつかまされたアリサの姿があった。

「アリサ！！」

アーチェルが悲鳴を上げた。

アリサは気を失っているのか、ぐったりとしていた。

「さあ、この娘の命が惜しかったら、我々と一緒に来てもらおうか？」

ロシは冷酷にもそう言い放った。

「卑怯者！ そんな方法を使って。わたくしだけを^{なぶ}戮れば良いではありませんか！」

「さて娘御よ。我らマスケドはそのような卑怯な手は使わん。ロシよその娘を返して来るのだ」

「ザザよ、先程も言った。大局を見て欲しい。このような事は瑣末な事だ」

「……………」

ザザは黙ってしまった。

葛藤しているのだろう。

アーチェルはこのロシと言う男が、一緒についていくことを拒めば、なんの躊躇いもなく、幼子であるアリサの命を奪うであろう事を、確信した。

「分かりました。付いて行きます。ですからアリサを……その幼子を、元に返してやって下さい」

「分かった」

ロシはもう一度紅龍号の中に入っていきアリサを返してきて、船外へ出た。

「では行きましようかな？」

ロシはアーチェルを促した。

（アシユマさま。助けて！！）

アーチェルは心の中でそう願ったが、アシユマは、助けには来てくれなかった。

アーチェルは一緒に、ついに行くしかなかった。

アーチェルは呪文ウィングを唱えて、ザザとロシに両脇を抱えられ母艦に連れて行かれた。

アシユマはどうなってしまったのか？

アーチェルはどうなってしまったのか？

情勢は暗雲立ち込め全く読めないものとなってしまった。

以下続刊

第十一話了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4540k/>

デュエリスト アシュマ 第十一話 キュポアの春（前編）

2010年10月8日14時52分発行